

**The
invariable and unexterminate
Original-theory
of all science.**

**Die
unveraenderliche und unverschwindbare
Urtheorie
von den allen Wissenschaften :**

**eine
Mono-urelectrogen-theorie**

**von
Dr. Hirom Cobayashi
Erster Band.**

NIPPON, TOKIO.

小林 廣 著

萬古不滅
萬世不變

萬有科學ノ始原論 第一卷

即ち 電素一元論

45. 5. 10

例言

一个ノ天體ナル我が地球ハ火團體タル太陽ノ一小分體トシテ生出シ、一團ノ生物ナル我が人類ハ無生物タル地球ノ一小分體トシテ生産セシモノナリトノコトハ、之レヲ科學界ノ學究ナリトセバ即チ我が地球ノ産母ハ太陽デ、吾人人類ノ産母ハ言フマデモナク地球デアル。

サレバ、該ノ太陽ノ生命タルベキ光、火、熱等ナル、其變態的ノ電流性、電化的ノ現象、作用ハ、止ダニ地球上ニ存在セル者ニ對シテハ、其金、石等ヲ首メトシ、凡テ是レ等ノ物質ヲ難ナク、通過シ得ベキ者デアリ得ルノミノ、者デハナク、既ニ已ニ、其大部分ハ現在ノ如ク、冷却シテ、眞ニ暗黒ナル物體トナリタル、我が地球

體ナリトスルモ、若シモ之レヲシテ、太陽ノ光、火、熱等ナル、其電化的作用ニ遭遇セシムルトキハ、更ニ復タ往時ナル始原時代ノ如キ、最高熱、火、光ナル一火團體ニ電化シ、變態セシメ得ベキ者ナレバ即チ最強度、最高位ナル、電流的ノ電化性作用ヲ具有スルニ至ルベキ者デアルト、言ヒ得ベキモノデアアル。

吾人ハ是ニ於テ、太陽ハ地球ノ產母デアリ、地球ハ吾人人類ノ產母デアルト言ヒ得ベキデアアル、若シ然ランニハ、吾人人類ノ腦ノ機能的作用即チ其心的作用ノ精神ナル、余ノ所謂ル、心電的ノ電流性作用ハ、現在ニ於ケル吾人ノ人體上ニ視ルモノノ如クニ、各自、各體ノ特有シツツアル、所謂有形性ナル五官的ノ感能性作用ノ以外ニ在テ、正サニ近世ニ唱道セラレツツアル、彼ノ千里眼者ナルモノガ、或ハ其有形性ナル眼ノ視力的作用、

若クハ其有形性ナル耳ノ聽力的作用等ノ以外ニ在テ、或ハ無形眼的ニ、若クハ無形耳的等ニ作用シツツ、或ル現象、事物ヲ認知シ得ル者ノ如クニ、ソンジヨ、ソユラニ儼存セル現象、事物等ハ、所在ノ遠近ニ拘ハラズ、之レヲ居ナガラニシテ感電シ、感能シ、感覺シ得ルコトハ、殆ンド彼ノ最近ニ發見セラレタル無線電信ノ電流性現象、作用ト同様ニ、恰モ之レヲ吾人ノ有形性ナル五官的作用ニヨリ、介達的ニ感覺シ、茲ニ始メテ、之レヲ瞭解シ得ル如クニ、作用シ得ベキ者ナルカ、否ナヤ、蓋シ該ノ變態性ナル精神的ノ現象、作用ハ、彼ノ千里眼ナルモノガ、余ノ始原論ニ謂フ所ノ、潜在性ナル始原的ノ、自然性ナル特別的發電裝置部ノ、心電分子ノ發電的若クハ感電的ノ作用デアレバ即チ其特異性ナル心電的ノ電流性作用ニヨリ、或ハ無形性ナル心耳

四
的、若クハ無形性ナル心眼的等、其直達的ノ作用トナリ、以テ或
ハ聽覺シ、或ハ視認シ得ルガ如ク、感能スベキ、變態性ナル心電
的ノ、電流性ナル作用者ニシテ、其古キハ二千四百七十六年前
ニ出現シ、顔ノ額部ニハ第三ノ假設的靈眼ヲ具ヘ、其首頭ハ固
ヨリ、其全身ヨリハ漏電的ノ電化光ヲ迸射シ、(但シ該ノ電化光
ノ放射的ナル現象、作用ハ現在人ニ於テモ、數シバ其類似性ノ
モノヲ發見シ得ベキモノナルノミデハナク、余ハ近年ニ於テ
少壯男子ニ三人アルヲ知レリ、内ノ一人ハ嘗テ東大生理學教
授大澤博士ニ、其檢定ヲ請ヒタルモノナリシト、本來凡テノ人
體ヨリ發散スル、其電化光トシテハ、未ダ以テ吾人ノ各自ガ任
意的ニハ、之レヲ發散シ、之レヲ視認シ得ベカラザルモノナル
モ、吾人ガ若シ汎ク、之レヲ生物界ナル、其動物體ノ、變態性ナル

放電的ノ現象、作用トシテ、我ガ人體ヲ首メトシ、廣ク動物間ニ
儼存シツツアル者ト爲シ得ベキモノナノデアレバ、變態性ノ
電流的作用ナル、體溫ノ放散的現象作用ハ即チ其一例デアル、
而シテ、吾人人體、若クハ動物體等ノ、漏電的放光等ノ現象、作用
ハ、尙ホ本篇ナル始原論ノ部ニ詳述シアリ、六神通ナル變態性
ノ直達的精神作用即チ心眼、心耳等ナル特異性作用ト、三十二
ノ體相トヲ具有シテ、其身長ハ支那語ノ翻譯ニ丈六即チ一丈
六尺、孔子ノ身長ハ九尺餘トアリニシテ、立身摩膝トアレバ即
チ彼ノ蜀漢ノ劉玄徳ガ手ヲ垂レバ、膝ニ至ルトアルモノト同
様デ、眞ニ空前、絶後ノ神秘的ナル活動力ヲ發揮シツツアリ、其
心眼ハ止ダニ千里外ヲ視認シ得ルノミデハナク、實ニ石壁ヲ
モ無礙ニ、之レヲ透視シ得ル者デアツタト、言ハレツツアリシ、

大聖孔子ハ人
工的ノ不自然
性ニ大成シタ
ル大脳力者デ
アル。

六
彼ノ大聖釋迦ノ經典中、若クハ其レ以上ノ年代人、特ニ始原時
代ノ人類ニ在テハ、却テ愈ヨ、倍マス多ク、儼存シタルモノナル
ベキ概ガアル。又釋氏ト同時代ナル支那周世ノ大聖孔子ハ怪
力、亂神ヲ語タラズト、言ハレテ居ルノデアリ。又後世人ナル二
千年前ノ大聖耶蘇ノ經文ノ如キモ、所謂千里眼者ナルベキユ
トノ神話事例ヲ後世ニ遺留セシメツツアルノミデハナク、現
在ニ吾人ノ眼前ニアル、彼ノ假名ナル催眠術者ハ、實ニ千里眼
的ノ、心電的ナル電流性ノ作用者即チ自然的ノ心電性ナル、彼
ノ釋迦ノ所謂、無形性ノ心耳的、心眼的等ナル電流性作用者ヲ
シテ、隨所、隨時ニ、之レヲ生起セシメラレツツアル者ト、言ハレ
ツツアルノデアル。

是ヲ以テ現世ニ尤モ進歩、發達シ、眞ニ學界ノ中心ナル歐、米ノ

諸邦中ニ在テモ、該ノ學界間ニハ尙ホ且ツ不可解的ナル、千里
眼的ノ、心眼的、心耳的等ナル、變態性ノ心的作用者ガ相ヒ續デ、
現出セルトノコトヲ、報道セラレツツアルノデアル。

特ニ我が邦ノ東大理科ノ教授ニシテ、有名ナル理學博士石川
千代松氏モ、去ル明治四十一年ニ歐洲ヨリ歸朝セラレタルト
キ、東京朝日新聞紙上ニ於テ、歐洲ニハ蟻類ノ専門的研究者ハ
多數アリトカ、又歐洲ニ於ケル千里眼的ノ能力ヲ特有セル者
ニ就キ、彼ノ特ニ進歩シ、發達シタル歐洲ノ學界ニ在テモ、其儼
存シツツアル千里眼的ノ現象、作用ハ、尙ホ且ツ眞ニ不可解的
ノモノデアアルユトノ實狀ヲ、報道セラレタル如クデ、アルノデ
アルガ、蓋シ進歩シタル歐、米人中ニ千里眼的作用ヲ具有セル
人物アリシハ、敢テ今日ニ始マリシニハアラザルナリ。

四十四年一月
始。

茲ニ又我が邦人中ニモ三年前來、稍ヤ進歩シタル千里眼的ノ作用ヲ具有セル、二婦人が出現シテ、一時ハ我が學界ニ時ナラヌ花ヲ咲カセシモ、無情ノ風ハ東ノ間ニ該ノ日本ノ二花ヲ散ラシ、跡ヲ留メザリシハ、吾人ノ尤モ遺憾トスル所デアツタガ、之レニ反シ、測ラザリキ我が邦ノ科學界中ニ、其有數ナル博士大家等ガ該ノ人類ノ千里眼的能力ト、其現象的作用トハ事實上ニ於テ、科學上ヨリ認定シ得ベカラザル者ト断定シ、昨四十四年晚春ノ頃ニ、新聞及ビ雜誌等ニ於テ、之レヲ戲術師即チテづまつかひナリトマデ、言ハレテ居タヨ一デアツタガ、又是レヨリ先キ、東大醫科大學長タリシ教授博士某ハ、昨年一月始、伊豆ノ熱海溫泉場ニアリシ時ニ、某新聞記者ノ千里眼的現象、作用ニ關スル問ヒニ、對ヘテ曰ク、人體ノ生理學上ニ於テ、凡ソ人

八

又去ル明治四
十一年ノ初夏、
余ノ白米常食
ノ中毒病論ノ
一部ガ、某新
聞社員ノ手ニ
入リタル頃ニ
於テ、當時ノ
報知新聞紙上
ニ、醫科大學

間ハ光線ニヨリ事物ヲ見テ、之レヲ識別シ得ルモノナレバ、彼ノ千里眼者ノ如ク、光線ナクシテ事物ヲ見得ベキモノハ、現下ノ學理上ニ於テ世ニ存在シ得ベキ理由ハナシトカ、言ハレタヨ一ニ、當時ノ時事新報紙上ニ記載シ、アツタノデアアルガ、吾人ハ借問セントス、該ノ人體ノ生理學ニ精通シ居ル博士先生ユソ、吾人ノ如ク、光線ハナク、本心モナク、深夜ノ暗室ニ就眠シツツ、本心ナラザル夢心ニ襲ハレ、毫毛ノ實在物ナキニ、アル事件ヲありありト夢ミル、我我衆生ノ凡人トハ異ナレル聖人カ、否ナ、至人ニシテ、眞ニ夢心の現象、作用ノ起ラザル者ナルカ、否ナヤナ、然ルチ況ンヤ、千里眼ナル者ハ本心的ノ作用ニヨリ、實在性ノ現象、事物ヲ認知シ得ベク、作用スル者ナルニモ拘ラズ、我我ノ夢心的作用ニ至テハ、夢心ニ續ク、茫漠タル僅カノ、醒覺的

例言

九

教授ノ教授ぶ
りト言フヨ
ナ題下ニ、或
ル醫學博士内
科教授ノ説ヲ
載セテアツタ
ノヲ見ルト、
コトナ事ガ書
テアツタ。
人體ノ解剖的
検査ヲ爲サザ
ル開業醫杯ニ
ハ、脚氣病ニ
關スル解説ナ
ゾ爲シ得ベキ
者ニアラズ、
云云ト。

ナル一部ノ記憶の本心性作用ヲ伴フノ外ニハ、現時ノ科學上
ニ在テハ、何等具體的ナル現象、事物、余ノ説トシテ、局部的ナル
心電分子ノ發電作用ナルユトハ、茲ニ之レヲ除キテ、ノ存在ス
ルユトナキモノナルニ於テチヤ、之レニ就テ、世人ハ思ヒ浮カ
バン、上カラ柳ガダレテ居ルニモカカハラズ、柳原小便無用屋
根にありト物シテ、獨リヨガル者ノアリシナ。
吾人ハ若シ今日ノ科學者ガ、該ノ具體的ニ實在セル現象、事物
ヲ認識シ得ル、千里眼ナル者ヲ以テ、人目ヲたぶらかす所ノテ
づまつかひト爲シ得ルモノナレバ、今日ノ科學界ニ於テ眞ニ
具體的ノ實在性ナラザル、各人ノ本心ナキ睡眠中ニ、發現スル
夢心的ノ現象、作用ハ、之レヲ何ト解説シ得ベキモノナルカガ、
却テ難解ナルモノデハチカコロカト、思ハルルノデアルガ、冤

ニ角余ガ該ノ始原論ハ是レ等ノ如キ、些事ナリトスルモ、尙ホ
且ツ其細大トナク、之レヲ研究シ、之レヲ討査シテ、始原的ノ根
本タルベキ學理上ヨリ、之レガ解説ヲ試ミンユトヲ勉メツツ
アル者デアアル。

是ヲ以テ吾人人體ノ心的作用ナル、其精神的ノ機能作用即チ
本篇ニ稱スル心電性ノ電流的作用ハ、止ダニ現在ニ於ケル他
人ノ精神的作用ヲ電化的ニ同化セシムル者ノミヲ以テ、其主
作用ト爲シ、以テ之レニ満足シ得ルモノニハアラザレバ、縱シ、
千萬年、否チ、實ニ無限ナル永遠ノ後世人ナリトスルモ、亦能ク
其精神的ノ機能作用ハ、實ニ之レヲシテ電化的、親和的ニ同化
セシメ得ベキ作用ヲ特有シツツアルユトハ、既ニ已ニ、三千年
前ナル釋迦ノ宗教ヤ、孔子ノ道德ヤ、蘇氏ノ哲理ヤ、若クハ二千

年前ノ、耶蘇ノ宗教等ガ正サニ、之レヲ證明シツツアル如クデアレバ、本篇モ亦此ノ理ヲ遂究センコトヲカムルノデアアル。是ニ於テ本篇即チ該ノ萬有科學ノ始原論、其者ノ論旨ガ果シテ、斯クノ如キモノナリトセバ、該ノ論旨ハ即チ特ニ社會ノ永遠ニ流傳シテ、無限ナル後世人ニモ及ブベク、電化的ニ作用シ得ル者トナリ得ベキモノデアアル、然レバ則チ始原論ハ止ダニ萬古不滅、萬世不變ナル萬有科學ノ、始原的ナル學理ヲ説述セル者ト、思フノデアアルバカリデハナク、更ニ之レヲ現時ノ宏大、無限ナル科學界ニ投ジテ、其論旨ヲ討究スルト俱ニ、其終局點ヲモ開發シ得ルモノト思フノデアレバ、本篇ハ即チ凡テ宇宙間ニ儼存シテ、眞ニ不可視的ナル無形性ニ實在スル現象、事物ヲ首メトシテ、凡テノ現象ト、凡テノ事物トニ就キ、或ハ之レヲ

探討シ、或ハ之レヲ追究シ、之レヲ闡明シ、之レヲ解説シツツアルノデアレバ、本篇ヲ覽ル者ハ須ラク此ノ意ヲ了シテ、高評ノ榮ヲ賜ハラシユトハ、著者ノ懇請シテ止マザル所ナリ。

余ハ從來ノ診察所以外ニ於テ、私立兩國病院ト、住所トチ有シ、加フルニ、郷里足利町有志者ノ切ナル依頼ニ應ジテ、五ヶ年間ニ亙リ、毎月三回ノ出張診察ヲモ爲セシ等、極メテ多忙ナリシ爲メ、乃チ該ノ出張往復ノ汽車中ニアル六、七時間ヲ利用シテ、或ハ稿本ヲ校正シ、若クハ夜間車室内ノ薄暗キ油燈ノ下ニ在テモ、視力ハ止ダ鉛筆ノ走ルヲ見ルノミデ、自己ノ所見ヲ筆述シ得ベク修養シ、遂ニ本篇ナル始原論ノ一部ヲ脱稿シ得タルニヨリ、乃チ一昨四十三年ノ年末ト、昨四十四年一月トノ間ニ於テ、報知、時事、朝日ノ三新聞紙上ニ英、獨、清ノ、三國ノ國語翻譯

者ヲ各ノ五名ヅツ募集スルノ廣告ヲナセシモ、當時ハ應募者至テ尠カリシニヨリ、其翻譯ヲ中止セシモノハ即チ本篇デアツタノデアアル。

是ヲ以テ余ノ主業ナリシ病院ハ既ニ已ニ廢止シ、出張所ハ一昨年限リニ閉鎖シ、第二卷ナル本論即チ緒論、總論、始原論ノ一部、電素論等ハ已ニ脱稿シ居ルモ、尙ホ充分ノ校正ヲ加ヘ、可及的急速ニ刊行セントスルモノナリ。

明治四十五年一月。

無名庵主人識ス。

例言終。

萬古不變 萬有科學ノ始原論。卷之一。

目次。

序言ノ目次。

第一篇 序言。

序言。

第一。革命的、社會的、發明的等ノ論說ヲ公ニシタル者ハ、

一 日本ノ醫界ハ樟腦ト、龍腦トヲ錯誤シ居ルトノ論

文。……………五

二 日本ノ癩病者ノ始末及ビ治療方法ニ關スル治癩

新論……………五

三 東京「エコー」雜誌記者ト小林トノ談論……………六

目次。

二

四 日本ノ醫界ハ錯誤セル、濫造物ナル聽診器ヲ常用
シ居ルトノ論文。……………二二

五 民間濫造ノ痘苗ヲ排シ、官營ノ安全ナル牛痘苗ヲ
製出スベシトノ論文。……………二三

六 明治二十八年講演、自著ノ白斑病論、凡ソ世界ノ白
斑病論中、其二位ニ下ラザルモノト信ズ。……………二三

七 明治三十一年我が關東地方ノ赤痢大流行ニ際シ、
自費ヲ投ジテ、各地ニ出張シ、其新治療法ノ講演。……………二三

八 明治三十五年講演ノ梅毒ハ、其初期ニ於テ全治セ
シムベキ改正療法。……………二三

第九。 其一。 其一部ヲ公ニシタルモ、未ダ全部ニ及バザルモノハ、
九 結核病ノ豫防論。……………二三

一〇 結核病ノ病性論。……………二三

一一 結核病ノ治療論。……………二四

一二 核結病ノ病性、多數ノ結核病及ビ肺結核ノ治療方
法等ニ就テ……………二五

一三 英國ろんどん醫科大學うゑいはーす、ばーかー氏
懸賞募集ノ、肺結核ノ治療法ニ關スル記事。……………二五

一四 日本ノ尤大ナル常食料ノ中毒病及ビ其始末ニ就
テノ鄙案。……………二六

一五 常用白米ノ多大ナル中毒病及ビ其廣汎ナル有害
性作用ニ關スル概況ノ拔萃。……………二六

第三。 未ダ公刊スルニ至ラザル者、

一六 日本人ノ玄米及ビ白米ノ常食ニ就テ。……………二六

- 一七 我ガ邦人ノ不適當ナル勞動食、若クハ蛋白質過少ノ有毒性ナル白米食ヲシテ、安價ナル多蛋白質性ノ勞心食ニ改正セシムベキ説……………三三
- 一八 蛋白質ノ過少ナル、不適當ノ勞動食、若クハ有毒性ニシテ勞動的常食料ナル、白米食ノ有害性作用ニ就テ……………三四
- 一九 玄米常食時代ニ於ケル武人ノ體格ト、其力量トニ就テ……………三九
- 二〇 玄米常食時代ニ近キ力士ト、白米常食時代ノ力士トノ身長及ビ白米ヲ常用セザル者等ノ身長ニ就テ……………四三
- 二一 玄米ノ常食時代ト、白米ノ常食時代トニ於ケル、武

人ノ常用シタル武器ニ就テ……………四四

- 甲 古刀ノ部(即チ玄米常食時代ノ刀劍)……………四六
- 乙 新刀ノ部(即チ白米常食時代ノ刀劍)……………四七
- 丙 甲冑ノ部……………四九
- 二二 素人自稱ノ脚氣病、否チ、白米常食ノ中毒病ニ關スル、余ト、東京「エユ」雜誌ノ記者トノ論談……………五〇
- 二三 白米ノ中毒病ヲ以テ有名無實ナル素人自稱ノ、單一ナル脚氣病トノミ爲シ得ルトキハ、現ニ空前ノ全盛ヲ極メ、其大慘害ヲ演ジツツアル花柳病ニ比スレバ、脚氣ナル者ハ輕易ニシテ、度シ易スキ者ト爲シ得ベキノ説……………七三

二四 明治三十二年ニ完成シタル腸ちぶすノ頓挫療法……………七三

目次

ノ拔萃……………七四

二五 明治三十二年ニ完成シタル改正赤痢療法ノ拔萃……………七六

二六 主トシテ濃色人種ニ視認スル、臀部等ノ母斑即チ

余ノ所謂、人類ノ幼兒斑又進化斑論ノ拔萃……………七七

二七 萬有科學ノ始原論……………七九

序外ノ記ノ目次。

第二篇 序外ノ記。

序外ノ記ニ就テ……………九〇

第一 日本人ノ不適當ナル有毒性ノ常食料(甲)ト、不適當

ナル勞働的ノ常食料(乙)トニ因リ生起スル病症ニ就テ……………九三

(甲)ハ有名無實ナル素人自稱ノ脚氣病、否ナ、常用白米ノ中毒病ト、英吉利斯病……………九三

(乙)ハ不適當ナル勞働性ノ常食料ニ因リ生起スルらひちすナル英吉利斯病……………一〇七

第二 熱帶地方人ノ不適當ニシテ、有毒性ナル白米ノ常

食料、若クハ不適當ニシテ勞働性ナル常食料ニ因リ、生起シツツアル常用白米ノ中毒病ト、らひちすナル英吉利斯病等トニ就テ……………一五一

第三 不適當ニシテ有毒性ナル常食料ト、不適當ニシテ

勞働性ナル常食料トノ有害性作用ニ關スル概況

ノ結論……………一七二

第四 素人自稱ノ脚氣病ヨリモ遙カニ重視スベキ我が

邦ノ花柳病ニ就テ……………一八二

第三篇

科學ノ定義……………二一九

目次終

萬古不變 萬有科學ノ始原論 卷之一

小林 廣著

第一篇 序言

本篇ハ萬有ナル科學界ノ元種デアルト俱ニ、
又其終末論ナルコトヲモ意味スル者デアル。

大聖釋迦ノ萬古ニ傳ヘントシタル宗教モ、世運ノ變遷ト俱ニ
基督教ノ起レルアツテ、之レト對峙シ、又其原ハ遠クシテ、流派
ノ別ルルニ乘シテハ、日蓮師ノ如キ、革宗的思想家ノ奮起スル
アルヲ觀ルノミデハナク、治世上ニハ彼ノ希臘ノ歴山大王ヤ、
蒙古(元)ノ忽必烈ヤ、佛ノ那翁等ノ如キ、廣大ナル版圖ヲ領有ス
ルニ至ル者等ノ輩出スルコトアルハ、蓋シ世運ノ然ラシムル

第一篇 序言

所ナルカ、將タ人性ノ進化上、若クハ其思想ノ進歩上ニ於テ、或ハ其通有性トモ成ツテ、出現シ得ベキ自然的、否ナ、電原的ノ恆性ナルカ、吾人ハ茲ニ斷言セズト雖モ、抑モ今日ニ無上ノ發達ヲ遂ゲ、極メラ健全ニ進歩シツツアル我ガ科學界ハ、果シテ吾人ノ容喙ヲ許サヌモノデアローカ。

凡ソ世界ハ後二千五百年ノ始頭、其五百年間ニ於テ、

人界外ノ神子トアル宗祖佛陀ナル釋迦(二四七五年前ニ生ル)、

儒道ノ主宗ナル孔子(二四六二年前ニ生ル)、

大哲學者ナルそくらてす(二三八一年前ニ生ル)、

神使ノ救世主トアルきりすと(一九一五年前ニ生ル)ノ如キ、世

界的四大聖人ノ相ヒ次デ出世セシ以降、世人ハアラユル方面

ニ向ヒ、偉大ナル加護、得度、善行、得道等、凡テ其厚德ヲ被リツツ

明治四十四年
ノ算。

アリシハ空前絶後ノ大幸福デアツテ、大聖ナル孔子モ、そくらてすモ、釋迦モ、耶蘇モ、其各一代間ノ説述、教化ハ殊ニ長ク、尤モ能ク、世界的ノ大多數者ヲ誘導シ、之レヲ徳化シ、之レヲ教育シ、之レヲシテ善行者ナラシメシハ、固ヨリ言フマデモナキユトナルガ、其説述シタル教訓ヤ、理論ヤ、授法ヤ、傳道等ハ果シテ萬古不滅、萬世不變ノ者デアローカ。

年月ト俱ニ人類ハ繁殖シ、世運ト俱ニ人體ハ進化シ、隨テ社會ハ之レト俱ニ變遷シ、加フルニ天變、地異等モアレバ、凡ソ人界ノ萬事ハ平時ニシテ、尙ホ荒メル潮流アリ、或ハ離合シテ、其常道ナキガ如キ觀アルモ、蓋シ世潮ノ趨ク所、大勢ハ之レト相ヒ伴フベキモノナレバ、我ガ電原的ノ人界以外ニ他界ナケレバ、時人ノ或ハ原説ヲ改竄シ、若クハ之レヲ校正シ、人界ノ萬事ハ、

其時代ノ重サナルニ隨ヒ、倍マス之レニ精華ヲ加ヘ、愈ヨ微妙ノ域ニ進達シ得ベキ理由アルハ固ヨリ當然ナルガ、兎ニ角四大聖人ノ偉大ナル遺跡ハ、其餘徳ガ遠ク後世ニ流傳シテ、殆ンド不變、否ナ、不滅的ノ者デアル。

現ニ我ガ日本國ハ世界ノ一等國デアアル、此ノ盛代以前、余ハ一貧家ニ生レ、幼時父ヲ失ヒ、尋デ母ヲモ亡ヒ、徳川末世ノ政治ハ紊亂シ、社會ハ騷擾シ、教育ノ荒敗セル時、身ヲ委スベキ所ナク、修學ノ如キハ絶對ニ不可能ナリキ、乃チ蠶室ニ入ルモ、農家ニ行クモ、年猶ホ少ニシテ、奮闘スベキ體力ハ足ラズ、多年間ニ亙ル、夜半後ノ獨學中ハ通常横臥セシユトナカリシガ、漸クニシテ貸費生トナリ、文明國ノ國語ヲ學ビ、其一專門科ナル醫學ヲ修メ、遂ニ斯業ヲ以テ放縱ナル生活ヲ爲シツツアルユト約三

十年間ナリ、而シテ在校以來醫學上ニ關シ、其思想上ニ、

第一 革新的、社會的、發明的等ノ論說ヲ公ニシタルハ、

一 日本ノ醫界ハ樟腦ト、龍腦トヲ錯誤シテ、反對作用アル龍腦ヲ用ヒツツアルトノ論文(明治十四年)。

以後日本ノ醫家ハ漸漸ニ龍腦ヲ廢シテ、精製樟腦ヲ用フルニ至リ。又日本ノ翻譯醫書ハ漸次ニ龍腦ヲ除キ、樟腦ト譯載スルニ至レルノミデハナク、明治二十三年ノ日本藥局法ハ精製樟腦ヲ載セテ、本論ノ正確ナリシヲ證セリ。余ト同時ノ頃、醫科大學藥局員ナル同僚草野ノ樟腦ノミニ就キ、一言セシユトアルハ余ノ樟腦研究ヲ知りタル爲メナリシ。

二 本邦ニ於ケル多大ナル癩病者ノ始末ニ關スル一六二

「ペーシ」ノ治癩新論(明治十七年著作。改正ノモノハ二百ペーシ)餘アリ。明治四十二年我ガ邦ノ要所ニ於テ、余ノ癩病者隔離ノ方法中、其第二條ノ第一方法ト、第三條トニ於テ説述シタル所ノ如ク、該ノ癩病院ノ公設アリシハ、正サニ本論ヲ實行セシト謂フモ不可ナキガ如シ。

三 又明治四十一年十一月發行ノ東京「エコー」雜誌記者ト、小林トノ談論中、其癩病ニ關スル記事ハ左ノ如クデアアル。癩病ガ天刑病トシテ不幸ノ病デアアルコトハ言フマデモナイ、ケレド醫師トシテ此病氣ヲ研究シ、此病氣ノ爲ニ心ヲ盡ス者ハ餘リ多イ方デハナイ、然ルニ小林氏ハ今ヨリ二十五年前即チ明治十七年ニ於テ既ニ治癩新論ノ著述ガアツタ、當時氏が癩病ノ研究ヲ爲スヤ實ニ熱心デ、癩病

ノ取締及ビ療法ニ就テハ、既ニ大學在學中ヨリ其研究ニ着手シ、當時參考書ヲ得ルニ困難ナリシニ係ラズ、遂ニ其著述ヲ公ケニスルニ至ツタ。治癩新論ノ精神ハ、彼ノあるまうえる、はんぜん氏ノ新説ヲ論據トシテ、癩病ハ傳染病デアアルカラ是非トモ日本國內ノ癩病ヲ消滅セシメホバナラヌト云フ論策デアツタ、我ガ日本ノ政府ハ此頃ニ至リ漸ク癩病豫防方法ヲ講シヨトシテ居ルガ、小林學士ハ二十五年以前ニ於テ既ニ大ニ茲ニ見ル所アツタノデアアル、卓見ト言ハネバナラヌ。

當時氏ハ、九州地方ガ本邦デ一番癩病ノ多イ所ト論斷シタガ、去ル十月報知新聞紙上デ、醫科大學生理學教授大澤博士ガ論述シタ所ト對照シテ見ルト、關東人タル小林氏

ノ思考ガ、如何ニ達見デアツタカト云フコトガ分ル。
東京ト癩病。

前陳ノ次第デアルカラ政府ガ、癩病取締ノ方法ヲ議スルニ至ツテ、氏ハ其素懷ヲ現實ニスルノデアルト云ツテ、大ニ喜ンデ居タノデアルガ、近頃マダ政府ハ財政上ノ都合デ、三十萬圓ノ癩病豫防費ヲ繰延べルトイフコトヲ聞キ、非常ニ憤慨シテ居ル。

小林學士ハ記者ニ語テ云フ。去ル十月十六日發行時事新報第六面欄外ノ記事ヲ見ルト、東京施療院建設ノ記事ガアル。之ハ東京市ノ經營ニ成ルモノデ、本年内ニ起工シ、其費額ハ十四五萬圓ヲ要スルト云フコトデアル、日本ノ首府デアアルガ、僅カニ日本ノ一市タル東京ガ、十四五萬圓

ヲ投ジテ施療院ヲ建設スルト云フノニ、我が大政府ガ僅カニ三十萬圓ノ而カモ國家ノ爲メニ大切ナ費用ヲ繰延べルニ至テハ、實ニ言語同斷ト云ハネバナラヌ。

近時東京附近ニ於テ癩病者ノ施療所ヲ建設セララルト云フコトヲ聞傳ヘタモノカ、東京市内ニハ眞ニ恐ルベキ多數ノ癩病者ガ集ツテ來テ、人家ノ多イ路傍、坂路、橋上、墓地、神社ノ行路等ニ踞坐シ、通行人ニ物ヲ乞フテ居ルノヲ見ル、人性ノ常道トシテ、見ル者ガ惻憐ノ情ニ堪ヘザルハ勿論、該ノ患者トシテ衆人ノ面前ニ醜態ヲ曝露スルハ忍ビ難イ所デアローガ、彼等トテモ生命ヲ有スル以上ハ食ハズニ居ルコトハ出來ナイ、思フニ、彼等ハ適マ施療所設立ノ事ヲ聞イテ來タガ、ソレガ延期セラレテモ、歸ルベキ

旅費ハナク、止ムナク日日其醜態ヲ行人ニ示シテ居ルノデアロー、之レ即チ我我東京市民ガ近頃ニ至リ、突如トシテ多數ノ癩病者ヲ見ルニ至ツタ所以ダ、且ツ夫レ、天刑病ナルモノハ尤モ恐ルベク、尤モ忌ムベク、現世ノ疾病中最兇悪性ニシテ最大危険病ニ屬スル一傳染病デアアル、然ルニ之ヲ我日本ノ最大都會ニシテ、最多數ノ人ガ集ツテ居ル所ニ、自在ニ集散セシメテ、其取締ヲ怠ツテ居ルノハ、我我人民ニ對シテ保護ノ任ヲ缺イテ居ルモノト謂ハネバナラヌ、人民ガ之ヲ見ナガラ黙ツテ居ルノハ、其危険ヲ知ラナイカラデアロー。

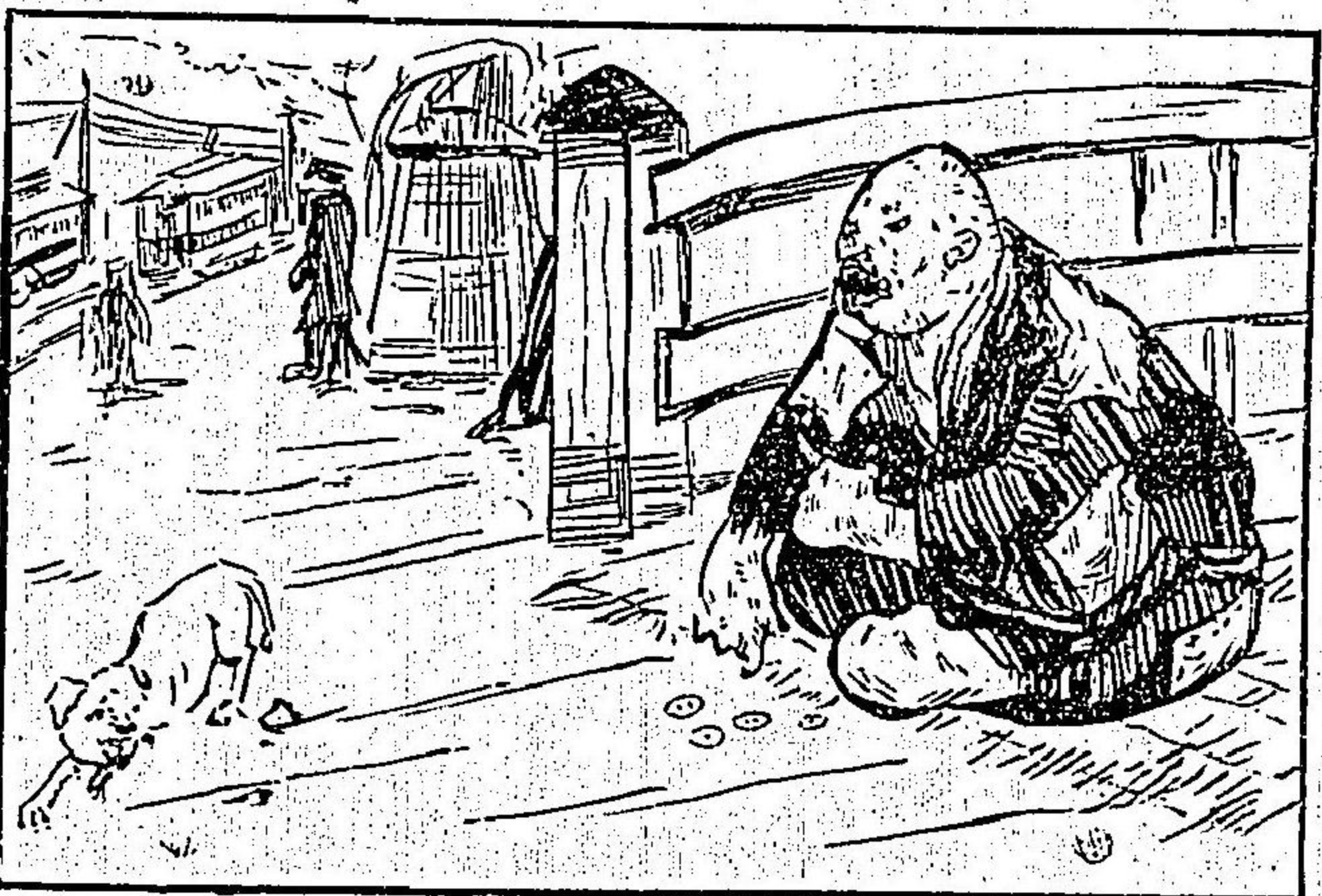
小林學士ハ更ニ其氣焰ヲ高メテ云フ、舊幕時代ハ江戸表デ一人モ癩病者ハナイト、時ノ政府ハ公言シテ居タガ、其

下カラ彼ノ藤間ノ一派ハ、有名ナル端唄、淺草詣リニ藏前通ればお菰がせがむ云云ト唄ヒ、假裝ノ癩病ヲ扮シ、踊ツテ、政府ノ御役人ノ目ノナイノヲ諷刺シタ、若シ當時ノ藤間派ヲシテ今日ニ在ラシメバ、何ト唄ツタデアローカ、我輩ハ藤間派ニ代ツテ、一寸ユンナモノヲ作ツタガ、何ウデシヨ、讀ンデ呉レ給ヘト出シタノヲ見ルト、

「東京見に行きやかたゐが多い、橋も通りもお宮も寺も、何處に行つても癩病がせがむ、もしや傳染つて眉毛を脱かし、指や鼻をば落しもしたら、國へ歸つて言譯出來ぬ、恐い都ちや汚ないみやこ、物見どころかサツサ歸らんせ。」

是ヲ以テ之レヨリ約三ヶ月後ノ、明治四十二年一月三十

一日ノ東京時事新報ハ、其第九千百號ノ十面ニ應募漫畫。
 街頭ノ美觀(警官ノ眼ニハ着カヌ)
 ト題シテ、當時ノ東京市内ニ於ケ
 ル公道ニハ、左ノ如ク突如トシテ、
 多數ノ醜惡ナル癩病患者ガ出現
 セル状態ノ諷刺畫ヲ掲載シタコ
 トモアツタノデアアル。



四 我ガ邦ノ醫界ニ於ケル凡テノ
 教育幹部(即チ神聖ナル各醫學校)
 ハ病牀ノ利器ナル聽診器ヲ錯誤
 シテ、濫造物ヲ常用シツツアリト
 ノ論説及ビ余ノ直達性打診法(明治二十三年第一回日本

醫學會講演。

今日ノ内科的病牀實驗ノ教場ニハ、余ノ稱揚シタル管狀
 聽診器ヲ用フル者多シト聞ケリ。

五 本邦民間ノ濫造物ナル痘苗ヲ排シ、官營ノ安全ナル牛
 痘苗ト爲スベキノ論文(明治二十四、五年ノ兵庫縣醫會雜
 誌)我ガ邦現今ノ官製牛痘苗ハ一具五錢ノ代價ニ至ルマ
 デモ、余ノ本論旨ト異ナル所ナシ。

六 明治二十八年四月ノ東京醫學會會場ニ概要ヲ講演シ
 タル、一八九四年著作ノ百五十四「ペーシ」アル白斑病論(全
 部)改正セル者ハ二百餘「ペーシ」アリ。本篇ハ白斑病ヲ大、小
 二種ニ區別シ、其癍痕性ニアラザル小白斑ハ、其數ノ多少
 ニ拘ラズ、通常大白斑病ノ如ク、悪性經過ヲ爲サザルモノ

各國ノ皮膚病
學者ガ未ダ曾
テ説述セザル
所ナリ。

ナ多シト爲シ。

該ノ白斑病ノ初發ハ、概シテ、病的ナル膚色ノ濃斑ヨリ生
起シ、其病況ノ尙ホ進行スベキモノハ、通常トシテ患部ニ
濃色ヲ呈シツツアルモ、其進行ヲ停止スルモノハ、該ノ患
皮ノ濃色ヲ消失シ去ル者トナシ、白斑病 *Leucopathia seu Vitili-*
go alba ナル病名トハ全然反對ニ、膚色ノ病的ナル濃色斑ヨ
リ白化シ來ル者デアルコトヲ説述シ、其急進スベキ悪性
ノ者ハ初期ヨリ體ノ各部ニ數個ノ濃褐色斑ヲ生起シ、續
テ、其中間ニハ不定形ノ小白斑ヲ發現シ、吾人ヲシテ殆ド
急劇的ニ猛進スベキ、悪性ナルユトヲ豫期セシムルガ如
ク、眞ニ寒心スベキ者ナリトスルモ、尙ホ且ツ數月間ノ外
用藥ニ依リ、之レヲ全治シ得テ、已ニ十餘年間ヲ閱スルモ、

悪性ナル白斑
病ノ初期ニ於
ケル全治ノ實
驗。

未ダ曾テ歐洲
ノ皮膚病學者
ガ説述セザル
所ナリ。

今日尙ホ、其再發セザル者ノアルノミデハナク、本病ノ數
年間ニ亙ル經過中ニ在テモ、其鷄卵大以下ノ者ニシテ、乳
白色ナラザル者ハ往往ニシテ自癒スルニ至ルユトモア
リ、若クハ止ダニ患部ノ縮少スルノミニシテ、自然的ノ全
治ニ就カザル者尤モ多シトスルモ、亦其大、中、小斑ノ邊緣
ハ、其濃色ヲ去リ、以テ病勢ノ進行ヲ停止スルモノアルニ
反シ、殆ド不斷的ニ蔓延シ、其進行ノ急劇性ナル最悪性ノ
者ニ在テハ、止ダニ白斑ト健皮トノ間ニ於テ、特ニ病的ナ
ル濃皮色ヲ儼存セシメツツアルノミデハナク、患部以外
ノ皮膚ニ二十錢銀貨内外ノ、多クハ圓形ナル病的ノ濃膚
色斑ヲ生起スルニ至ルト俱ニ、其中間ハ既ニ白化シ、漸次
的ニ白斑ヲ生起スルノデアアル、ガ、從來開明國ノ皮膚病學

者中ニハ、斯ノ如ク、白斑病ノ病性ニ就キ、其詳細ナル發生ノ狀態、性質等ヲ記述シタル者ハナキヤウデアアル、然ルニ之レニ反シ、該ノ大形ナル白斑病ガ未知ノ間ニ頓發セリトカ、又汽車ノ窓ノ氣通ニ遭フテ、該ノ大白斑病ガ頓發セル等、素人ナル患者ノ誑言ヲ、堂堂タル歐洲ノ神聖ナル醫書中ニ記述シ居ル者尤モ多ク、且ツ白斑病ヲ以テ絶對的ニ不治病ト爲シツツアルハ、蓋シ世界的一般ノ事實デアロト思フ。

白斑病ノ特ニ急進スル者ハ約二十年内外ニシテ、其全膚色ハ殆ド白色トナリ(但シ眼ノ虹彩ハ脫色セズ、頭髮モ全部脫色スルニ至ラズ)即チ病的ノ白人トナルノデアアルガ、白斑病者ノ白人トナルハ通常三十年内外、若クハ其レ以

上ノ長年月間ヲ要スル者アルガ如シ。

余ハ神戸病院
在勤中ノ去ル
明治二十四年
七月二十四日
ト、同年九月
三十日トノ兩
度ニ於テ、惡
性ナル白斑病
者ノ下腿患部
ノ一小微片ヲ
採取シ、躬ラ
之レヲ自體ノ
下腿内面ニ移
植試験ヲ實行
シタルハ、左
記ノ如クデ、
其第一回ノ七
月ハ、
左下腿内面
ニ三個。
右下腿内面
ニ四個。
其第二回ノ九
月ハ

余ガ東京在住ノ十七年間ニ、東京市内ニ於テ視タル白斑病性ノ白人ハ八人ヲ算シタノデアアルガ、日本全國中ニハ尙ホ多數ナル該ノ白斑病性ノ白人ヲ算シ得ルモノデアロト思フ、何トナレバ、余ノ經驗上ニハ神戸市ニ於ケルモ、東京ニ於ケルモ、余ノ専門ナル、其内科患者ノ一千名中ニハ、胴部ヤ、四肢等ニ潛ミタル大白斑病ノ儼存者ヲ三名乃至五名、又小白斑ノ儼存者ハ特ニ壯年以上ノ者ニ於テハ數十名ヲモ發見シ、又六十歳以上ノ者ニアツテハ、其過半数者ニ發見シツツアルノデアアルカラ、若シモ三千萬人ニモ就テ、親シク該ノ白斑病ノ有無ヲ調査シタナラバ、恐ラクハ、白斑病者ノ實數ガ眞ニ驚クベキ多大數ニモ達シ

左下腿内面
ニ三個。

右下腿内面
ニ三個。
ヲ移植シタノ
デアツタ。

得ベキモノデハ、ナカローカト思ハレルノデアアルガ、日本
書紀卷ノ二十二、人皇三十三代推古天皇二十年(西曆六一
二年ニシテ、今ヲ距ル約一千三百年前)ノ記ニ、僅カニ一人
ノ歸化人ナル白癩即チ白斑病者ニ關スル朝議ノ決定ヲ
觀テ(余ノ治癩新論及ビ白斑病論ニ詳述シアリ)余ハ眞ニ
慨歎ニ耐ヘザル者ガアルノデアアル、況ンヤ、各開明國ニ於
ケル皮膚病學ノ大家ヲ首メトシテ、我が醫界ニ在テハ該
ノ白斑病ニ對シ、其治療方法ノ絶對的ニ、之レナキ者トナ
サレツツアルノミデハナク、彼ノ推古天皇二十年ノ白癩
ニ關スル朝議ノ裁制ハ、圖ヲザリキ千三百年ヲ距リタル
今日ニ在テ、尙ホ且ツ之レヲ外國輸入ノ多白斑ナル家鷄
類ニ見ルガ如ク、或ル一方ニ於テハ、反テ更ニ、之レヲ我が

邦人ニ對シ、再演、實行セラレザルユトナキ者ナルニ於テ
シヤ。余ハ是ニ於テ問ハン、去ル明治二十八、九年頃ノ千里
眼者ナラザル我が文部省ノ當局者ハ、該ノ世界的ナル一
般人類ノ尤モ嫌忌スベク、最モ醜惡ナル病患ニ對シテ、抑
モ如何ナル手段ニ出デシモノカナ。

又今ヲ距タル約一千七百年前即チ西曆二〇〇〇年内外ノ
頃ニナリタリト言フ、神遺法ナル我が邦ノ、最古ノ醫書中
ニアルみだりがさナル古語ハ、余ノ視ル所、蓋シ癩病ヲ言
ヒ、又まらがさトハ梅毒ヲ言ヒタルモノナランモ、皇朝ノ
史傳上ニ始メテ癩 *Lepra, der Aussatz* ナル語字ヲ記セシモ
ノハ、今ヲ距タルユト實ニ一千三百年前ノ、人皇三十三代
推古天皇ノ時ナリトス、即チ我が六國史中ノ一ナル日本

書紀、卷ノ二十二ノ推古帝二十年ノ記ニ、始^レテ白癩 *Lepra*
alba, der weisse Ausatz ナル者ノ記事ガ現レタリトスルモ、該
 ノ日本書紀ノ記述ニヨレバ、該ノ白癩ハ真正ノ癩病ニア
 ラズシテ、今日ノ白斑病タルベキコトハ、現時ノ醫學上ニ
 於テ正サニ明瞭デアアルニモ拘ラズ、是レヨリ後チ天智西
 曆六百六十二年、天武六百七十三年兩帝ノ間ニ、成リタル
 者ト言ハレツツアル、彼ノ延喜式大祓ノ祝詞ノ文中ニ、白
 人、古久美^{コクミ}ナル二難語アツテ、凡テノ和學者流ハ殆ド該ノ
 二語ヲ白癩及ビ黒癩ト訓解シ、且ツ之レヲ是認シツツア
 ルニ反シ、獨リ加茂真淵ノミハ、之レニ反シテ、該ノ白人^{シラビ}ヲ
 新羅人ト、古久美^{コクミ}ヲ高麗人ト爲シ、以テ美ハ麗ノ誤リナラ
 ント憶斷セシモ、余ハ復々之レニ反シ、諸多ノ理由ニヨリ、

白人、古久美
 ナル二難語等
 ハ、余ノ治癩
 新論及ビ白癩
 病論ニ詳論シ
 アリ。

該ノ二難語ニ關スル二異説ハ、俱ニ之レヲ排シテ、現在ニ
 於ケル我が日本人ノ頭腦ノ構造ヤ、眼ノ虹彩色ヤ、犬ヤ、猫
 等ノ虹彩色ノ變移等ノコトヨリ、該ノ白人^{シラビ}ハ讀デ字ノ如
 ク即チ白人^{シラビ}ナレバ、之レヲ現時ノ歐洲人ト爲シ、又古久美^{コクミ}
 モ讀デ字ノ如ク即チ黒身^{クワシ}ナレバ、今ノ黒人ナルベシトナ
 シ、以テ當時前後ニ輸入セル印度ノ事物等、其金人ナル佛
 陀ヤ、生ケル駱駝等ノ輸入物等ヲ以テ、之レヲ其證左ト爲
 シタリシ如クデアアル(余ノ白斑病論ノ拔萃)。
 余ハ去ル明治二十一年(一八八八年)度ノ一ケ年間、熊本病
 院ニアアルヤ、數名ノ重症白斑病者ヲ診療セシモ、其當時ニ
 在テ、我が醫界ニハ該病ノ治療方法ナキヲ慨シ、其醜態ナ
 ルヲ悲ミ、明治二十二年二、三月ノ交、歸郷ニ際シ、縣廳ノ許

可ヲ得テ、汎ク白斑病者ニ對シテ、遠近ヲ問ハズ、其往復旅費ハ私財ヲ投ジテ、一切之レヲ給與スベク、其治療藥ヲモ一切施與スルノ旨意ヲ當時ノ新聞紙上ニ公告シ、可及的多數ノ同病患者ヲ診療シ、以テ本病ノ研究ニ資シタルユトモアツタノデアアル。

七 赤痢病ノ我ガ邦ニ於テ頻年ニ互レル大流行ハ、遠ク其源ヲ四國、九州ニ發シ、其十五、六年ノ後ナル明治三十年内外ノ頃ニハ、關東地方ニモ來襲シタガ、當時余ハ相模ノ或ル地方ニ往診シ、赤痢患者中ニハ赤痢ノ病患以外ニ於テ、齒牙脱落等ノ驚クベキ不幸ナル慘狀ヲモ目撃シタリ、是ニ於テ余ハ同三十一年盛夏ノ頃、自費ヲ以テ地方ニ出張シ、赤痢療法ノ講演ヲ爲スベク豫メ諸新聞紙上ニ廣告シ、

神奈川縣下ノ厚木町ヤ、栃木縣宇都宮市等ニ出張シテ、赤痢ノ新治療方法ヲ講演シタユトモアツタノデアアル。

八 ぢひりす即チ梅毒ノ初期ニ於テ全治ヲ企圖スル改正療法、明治三十五年(一九〇二年)第一回日本聯合醫學會講演。

第二 其一部ヲ公ニシタルモ、未ダ全部ニ及バザル者ハ。

九 結核病ノ豫防論ノ一部、明治二十五年(一八九二年)刊行
發兌當時ハこつば博士ノつべるくりん療法ノ失敗セシトキナルニヨリ、人心慰安ノ爲メ、其一部ヲモ説述シ置ケリ。

一〇 結核病ノ病性論。

本篇ハ肺結核ヲ首メ、凡テノ結核病ニ就テ、先ヅ其病性、狀

態ヲ論究シタ者デアアル、明治二十六年著作（一八九三年）。

一 結核病ノ治療論。

本篇ハ各種ノ治シ易キ、結核病ノ治療方法ヲ首メ、難治ナル肺結核ノ治療方法ヲ論究シタルモノデアアル。故ニ各種ナル結核病ノ病狀、性質ニ關スル論究上ヨリ、睪丸ヤ、頸腺ヤ、肋膜ヤ、胃腸、腹膜等ヤ、痔瘻、膀胱、内耳、脊椎骨、肋骨、肺尖等ナル諸結核病ノ如キ、治癒セシメ易キ結核病ノ治療方法ヲ説述シ、更ニ進デ、世間ニ最モ多ク、且ツ尤モ難治ノ者ト言ハレツツアル、肺結核ノ治療方法ヲ論述シタ者デアアル。是ヲ以テ彼ノ有名ナルつべるくりん等ノ類ヲ専用シ、若クハ他ノ治療方法ニ因ツテ、特ニ極メテ難治ニシテ、然カモ單一ナル肺結核ヲノミ治癒セシメンコトヲ企圖シツ

ツアル、つべるくりん等ノ療法トハ既ニ已ニ根本的ヨリ、其治療方法ノ基臺ヲ異ニシツツアル者デアアル、明治三十八年著作（一九〇五年）。

二

結核病ノ病性、多數ノ結核病及ビ肺結核ノ治療方法等ニ就テ、其一部ノ拔萃、明治三十九年及ビ四十年（一九〇六年及ビ一九〇七年）ノ日本橋新聞ニ、市街ノ撒水方法ニ就テノ説述、當時英國倫敦醫科大學ノ肺結核治療法ニ關スル、懸賞募集ノ廣告アリシヲ見聞シタルニヨリ、其續載ヲ停止セシ者。

三

余ハ英國ろんどん醫科大學うゐーはーす、ばーかー氏懸賞募集ノ肺結核ノ治療法ニ關シ、外國ノ臣民ナレバ、更ニ其應募者ニ對シテ、肺結核ノ治療方法ニ就キ、之レヲ論

文的ニ競争スベク起稿スル事トシ、該ノ競争論文終結ノ期日等ヲろんどん大學ノ當事者ニ問ヒ合セタルニ、別紙ノ如キ、廻答ヲ得タルモ、時已ニ其適當ナル競時期ヲ過ギタルニヨリ、該ノ論文モ亦遂ニ、之レヲ放擲シタリシモ、當時ニ於ケル當事者ノ廻答ノ要旨ハ左ノ如クデアアル。然ルニ該ノろんどん大學ノ當事者ヨリノ廻答書ハ遺憾ナガラ紛失シ去ツテ、今猶ホ發見シ得ザレバ、茲ニハ其掲載ヲ止ムル事ニシタノデアアル。

一四 日本國中、殆ド其全部ニ互レル常食料ノ中毒病、及び其始末ニ就テノ鄙案、明治四十一年(一九〇八年)四月ノ日本消化機病學會ノ會場講演。

一五 有名無實ナル、素人自稱ノ脚氣病、否テ常用白米ノ多大ナル中毒病、及び其廣汎ナル有害性作用ニ關スル概況ノ拔萃、明治四十一年(一九〇八年)十一月、十二月ノ東京「エユ」雜誌掲載。

顧フニ、明治四十三年(一九一〇年)九月米國政府ガ、其新領土ナル比律賓ノ官憲ヲシテ、白米常食ノ禁止令ヲ發布セシムルニ至リタルユトハ、蓋シ余ノ常用白米ノ尤大ナル中毒病、及び其廣汎ナル有害性作用ニ關スル概況ノ説述ト、同年四月余ノ日本國中、殆ド其全部ニ互レル、多大ナル常食料ノ中毒病ニ關スル概況ノ講演等トニ、關聯シタル者ナラン、何トナレバ、本邦ニ於テハ邦人間ニ此論説ナク、歐米人モ未ダ嘗テ常用白米ノ國人病的等ナル、其大慘害アルユトニ關シ、余ノ所謂素人自稱ノ有名無實ナル脚氣

病以外ニ互リ、其有害作用ノ尤モ大ナルユトヲ陳說シ、若クハ著述シタル者アルヲ見聞セザレバナリ。

第三 未ダ公刊スルニ至ラザル者。

一六 本邦人ノ玄米及ビ白米ノ常食ニ就テ(但シ前ヲ畧シテ、拔萃ス)。

文祿元年征韓ノ役、云云。古來ヨリ我が邦人ノ常食シツツアツタ玄米ノ強飯ハ、殊ニ不消化ナレバ、一日間ニハ一杯ヅツ二食ニシテ、三食スル能ハザリシモノモ、已ニ白米ノ軟飯ニ改良セラレタルモノアル時ナレバ、各地方ノ陶器改良ト俱ニ、嘗テ一日二回ナリシ食時モ、一日三回ニ改正セラレ、茲ニ食料、食器、食時ノ革新的動機ハ全ク成リ、以テ三百八年前ナル、西曆一六〇三年ノ徳川期ニ入ルヤ、古來

ヨリ邦人ガ久ク常食シタル黒米製ノ強飯期ハ已ニ去リ、甘味ナル白米ノ軟飯トナリ、其極メテ消化シ易キガ爲メ、一日三回ノ食時制トナリ、其一食ハ各自ノ望ミニ委シ、三、四杯ヨリ五、六杯ニモ及ブベキ自由制トナリ、以テ今日ニ至リシモノナラント信ズ。

然ルニ此ノ香氣ハ優美ニシテ、其豊味ノ佳絶ナル、凡ソ吾人ノ嗜好上、殆ド他ニ比類ナク、殊ニ消化シ易ク、其改良ノ結果ハ甚ダ優勝ニシテ、古クハ一千五百八十六年(西曆三二五年)以降、近クハ三、四百年(約一五五〇年頃)前來ヨリ、人性快樂ノ一トモ稱シ得ベキ、甘味ナル常食料ノ白米飯ハ、焉ンゾ知ラン、吾人常食者ニ對シ、止ダニ蛋白質性營養分ノ不充分ニシテ、拙著始原論上ノ勞働的食料品ナルヲ免

ル能ハザルノミデハナク、長ヘニ尤大ナル害毒性作用ノ物質ヲ含有シツツアツテ、殆ド絶望的ナル大災害ヲシテ、其常食者間ニ醸生セシムルニ至レル者アラントハ、加之、該ノ毒素ハ今日ノ如ク、大發達ヲ爲シツツアル學界ニ在テモ、尙ホ且ツ、之レヲ知悉スル能ハズ、況ンヤ、該ノ毒素ハ彼ノ歐洲ニアツテ、嘗テ其常食料ノ害毒ヲ逞フシタルユトアリシ、彼ノ麥角毒ノ小麥(麥粉)ニ於ケルモノノ如ク、現ニ大進歩ヲ爲シタル我が邦ノ科學界ニ在テモ、之レヲ安全ニ除キ去ルヲ得ザルモノナルニ於テチヤ、則チ吾人ハ更ニ該ノ白米ヲ常食料ト爲シ得ベキヤ、否チヤノ研究ト、發見トガ目下焦眉ノ急ト爲スベクシテ、無上ノ必要アルユトハ固ヨリ言フマデモナシ。

吾人ハ思フテ、茲ニ至リ、眞ニ慨歎、痛恨ノ極デアアル、實ニ筆モ、ペンモ、之レヲ操ルベキ力ヲ失ヒ、心、目俱ニ活動シ能ハザルニ至ラントス、噫、亦悲惨ノ極ナラズヤ。故ニ我が邦ハ國家トシテモ、國人トシテモ、其何レヨリスルモ、未來ノ短日月ヲ以テ更ニ安全ナル白米若クハ半白米カ、玄米カノ常食ニ復活セシメネバナラヌトハ、一般國人ノ大ニ渴望スル所デアロト思フ、然ラバ則チ白米中ノ有害性物質即チ其毒素ハ、或ハ之レヲ除去シ得ルカ、若クハ之レヲ消毒シテ、無害、安全ノ常食料ト爲シ得ル等ノ方法ニ就キテ、先ヅ之レヲ研究スベキユトノ、目下焦眉ノ急デアアルコトハ、既述ノ如クデアアル、故ニ我が國人ハ時日ヲ移サズ、最モ迅速ニ、該ノ無害性白米若クハ半白米等ヲ常食シ得ベ

キ研究會ヲ設立スルハ、目下ノ最大急務デアロト思フ。然レドモ該ノ白米中ニ含有セル毒素ノ發見ハ、當然之レヲ専門學者ノ研究ニ委スベキモノナレバ、余ハ猶ホ、其他ノ方面ニ在テ、縱シ、今日ノ白米若クハ半白米ハ、専門家ノ研究上ニ、之レヲ無害安全ナル常食料ト爲シ得ベキモノトスルモ、若シ之レヲ拙著ノ科學的始原論ノ原則上ト、人體生理ノ學究上トヨリ推考スルニ、今日ノ如ク、世界的競争場裡ニ立ツベキ、我が邦人ニ在テハ、尙ホ且ツ該ノ無害性白米若クハ半白米等ヨリモ、遙カニ以上ナル多蛋白質性ニシテ、然カモ一般國人ニ向テハ、白米ヨリ廉價ナル常食料ヲ論定スベキ必要アレバ、乃チ余ハ本章ノ末尾始原論ニハアラズ。ニ於テ更ニ此方面ニ向テ、研究スベク熱中

シタノデアアル(一九〇六年)。

一七 (拔萃)我が邦人ノ不適當ナル勞働食、若クハ蛋白質過少ノ有毒性ナル白米食ヲ、安價ナル多蛋白質性ノ勞働食ニ改正セシムベキ説。

余ハ拙著萬有科學ノ始原論ヲ基臺トシ、古來本邦人ノ常食料ナル、蛋白質過少ノ勞働食(即チ白米ヤ、麥ヤ、其他ノ常食物、例ヘバ沖繩ヤ、鹿兒島等ノ粟ト、さつまいも等ノ常食ヲ主トスルモノナシテ、白米以下ノ低價ナル多蛋白質性(玄米若クハ新製ノ半白米ヤ、麥ヤ、粟等ト、大豆ト「玄米ト大豆トハ煮熟法ヲ研究スルノ要アリ」、若クハさつまいもヤ、じやがたらいも等ト、大豆ト、其他ノ肉類等トノ混成食、但シ最廉價ナル南洋ノ冷蔵牛肉ハ嘗テ脚氣論ノ部ニ於テ、

尤モ之レヲ稱揚シテ、説述シ置ケリ、南洋ノ牛肉ハ一斤百二十匁僅カニ我ガ七錢ニシテ、東京及ビ橫濱間ニテハ百二十匁一斤ノ價ガ僅カニ十三、四錢ニテ販賣シ得ベキモノナリトス。米國ハ九錢、香港ハ十二錢ナリノ勞心食ニ改良セシムベキ論説、明治四十年(即チ一九〇七年)。

一八

(拔萃)蛋白質ノ過少ナル不適當ノ勞働食、若クハ有毒性ニシテ勞働的常食料ナル白米食ノ有害性作用ニ就テ。

該ノ蛋白質過少ニシテ不適當ナル勞働食、若クハ蛋白質過少ニシテ有毒性ナル白米食(一層有毒ナルハ外國輸入ノ白米ナリ)ノ如キ者ハ、吾人ノ體質ヲシテ、止ダニ矮小、孱弱ナラシムルノミデハナク、鼻梁ハ低ク、腰部ハ高ク、下肢ハ短キ、骨質的畸形等ナル英吉利斯病性ノ異體ヤ、多大ナ

ル齒質及ビ皮膚、爪質等ノ不良ヤ、夥大ナル鼻たらし、世界的無類ナル頑固性便秘(特ニ我ガ東京市内等ニ在テハ白米常食ノ生母乳、若クハ乳母乳ニ養育セラレツツアルニモ拘ラズ、生後僅カニ數日ノ後チ、若クハ數月間ノ乳兒ニシテ、已ニ常習性ナル便秘ヲ患フル者多數アルノミデハナク)但シ始メニハ一日二、三回ノ下利スル者モアルノデアル、老壯者ニハ實ニ二週間以外ニモ互ル、世界的無類ナル頑固性ノ常習便秘ヲ患ヘツツアルモ、驚クベキハ、其怡然トシテ、殆ド自ラ無病視シ居ル者ノ少ナカラザルニアリ、多大數ナル痔核、多灸痕、全國醫業者ノ全數ニ殆ド三倍セル、世界的無類ナル、不明ノ治術者即チ按摩術者等ノ存在ヲ必要トスル、諸病症者ヲ續出セシメツツアツテ、斯ノ

如キ、最大ナル國人病的、若クハ、異體等ノ未ダ容易ニ之レ
 ナ、拔ク、ユト能ハザルモノアルハ、實ニ國家トシテモ、個人
 トシテモ、寒心スベキ、大不幸ノ常食料タルコト固ヨリ論
 ズルニ足ラズ、況ンヤ、又彼ノ四年前(一九〇七年)ノ春季ニ
 開設セラレタル、我が邦ノ脚氣病ノ調査會、其者ノ主腦タ
 ル、余ノ所謂有名無實ナル、素人自稱ノ、輕輕度シ易キ脚氣
 病ノミチ生起スルニアラズシテ、實ニ吾人ガ國家トシテ
 モ、個人トシテモ、
 尤モ悲シムベク、最モ患フベキ、尤大ナル國人病的ノ、中毒
 性諸病症、ヤ、其營養的障害等ヲ生起シツツアツテ、而カモ
 白米常食ノ國人以外ニ在テハ、通常尤モ汎ク、其上下ノ兩
 級者間ニ互テ視認シ得ベカラザル、多大數ノ病症ト、該ノ

無限的ナル體質ノ、畸形的、異態的ノ、不良者等トナシテ、多
 多益マス續出セシメツツアルニ於テナヤ、實ニ現時ノ世
 界各地ニ散在スル人民ノ、白米ヲ常食シツツアル者ハ、其
 體格ガ、畸形的若クハ、異態的ニ矮小ニシテ、其非常ニ夥多
 ナルハ、之レヲ目シテ一種ノ小人國トモ、言ヒ得ベシ等ノ
 論文(一九〇七年)。

今ヲ去ル、約三百六年(一六〇五年)前ニ生レタル(當時ノ本
 邦ハ未ダ全部ニ互リ、白米ノ常食者ニアラザルベシ、今ヨ
 リ三百二十一年、一五九〇年前ノ加藤清正ノ軍制中ニ、兵
 士ノ食料ハ黑米タルベキユトノ條アリ、顧フニ、我が邦古
 來ノ黑米飯ハ三百六十一年、一五五〇年前ノ北條氏康ノ
 訓誡ノ如ク、一日間ニ朝夕二食ノ常習ナレバ、殊ニ戰時ノ

夜襲等ニハ尤モ長ク、其活動力ニ耐ヘ得ルガ爲メナラン
 澤庵師ノ娼畫ノ贊ニ、佛ハ法ヲ賣リ、祖師ハ佛ヲ賣ル、云云、
 汝ハ五尺ノ軀カシ女體ヲ賣テ、一切衆生ノ煩惱ヲ安シズ、云云
 トアリ。又今ヨリ約六、七十年（一八四一年ノ頃）前ナル江戸
 人ノ諷刺ニ、世の中も四尺五寸につまりけり、五尺の軀（男
 子）をき處なし」トノ句アルニヨリ、觀シ來レバ、邦人タル者、
 豈ニ寒心セザルベケンヤ、現ニ本邦ノ丁年男兒ノ身長ハ
 平均五尺幾寸アルベキカ、婦女ノ身長ハ既ニ平均五尺以
 下ナリト言ハレテ居ルノデアル。

借問ス、米國政府ガ比律賓ヲ領屬シタル以後、約二十年間
 ナルニ、一九一〇年ノ今日、卒然該地人ノ白米常食ヲ禁止
 シタルハ、果シテ該ノ地ニ多生スル脚氣病ノミニ因ルカ、

否ナヤナ。

一九

玄米常食時代ニ於ケル武人ノ體格ト、其力量トニ就テ。

（拔萃）今ヲ距ル八百四十九年前ノ康平五年（西曆一〇六三
 年）ニ誅セラレタル、玄米ノ常食時代ナル、陸奥ノ賊魁安倍
 貞任ノ傷體ハ、之レヲ巨楯ニ載セ、六人ニテ舁キ至リ、賴義
 ノ之レヲ視タルトキ、腰圍七尺、長ケ之レニ稱ヒシトアレ
 バ即チ貞任ノ身長ハ優ニ八尺以上ノ巨漢ナリシ者ナラ
 ン。

又源爲朝ハ嘗テ京師ヲ逐ハレテ、單身九州ニ入り、僅カニ
 十五六歳ニシテ大戦二十、小戦二百ヲ經テ、九ヶ國ヲ降伏
 セシメ、保元元年即チ七百五十五年前（西曆一一五六年）ノ
 亂ニハ年甫カニ十七歳ナルモ、其軀幹ハ偉大ニシテ、身長

ハ優ニ六尺以上アリ、宗家ニ藏スル所ノ八甲ハ、一モ其躬ニ適スルモノナク、遂ニ他甲ヲ撰シテ、戰陣ニ臨ミ、其努力ハ衆ニ優リ、五人力ノ強弓ヲ常用シ、三尺五寸ノ大刀ヲ以テ奮戰シ得ルモ、年尙ホ少ナリシ爲メ、其經驗アル夜襲ノ善謀ハ用ヒラレズ、却テ大軍ノ夜襲ニ敗ラレ、疾デ民家ニ浴スルトキ、數百ノ官兵ニ圍レ、單身裸體ノママ柱ヲ抉ツテ、數人ヲ擊殺シタリト言フノデアアルガ、又流サレテ、單身大島ニアルヤ、傍ヲノ諸島ヲ征服シタルニヨリ、後世ニ及ンデ、八郎單身取琉球ノ詩句アルニ至レリ。

難太平記ニ、足利義包即チ義兼ニシテ、七百十餘年(一二〇一年)前頃ニ、日本唯一ナル足利學校ヲ再興シ、他ニ七堂伽藍ヲ草創シ、其體格ノ偉大ナリシ雄姿ハ、今モ尙ホ足利町

鑢^シ阿寺所藏ノ妙手ノ畫像ニ、其雄姿ヲ偲バセツツアリ、其身長八尺餘ニテ、力ハ衆ニ勝レ、鎮西八郎爲朝(身長八尺)ノ落胤デアルト記シテアル。

又安元、治承頃ノ木曾義仲ハ壯偉、多力、善ク射ル、今ヲ距タル七百二十八年前ノ養和元年(西曆一一八一年)ニ、少數ノ見兵ヲ以テ、城資長ノ兵萬餘ヲ逆ヘ擊ツテ、一舉ニ、其九千人ヲ殺シ、翌壽永元年ニハ見兵僅カニ三千ヲ以テ、城長茂ノ兵四萬騎ヲ迎撃シテ、立チドコロニ、之レヲ潰走セシメ、尋デ四萬ノ兵ヲ以テ、平家ノ大軍、十餘萬ヲ栗殼壑ニ夾撃シテ、之レヲ潰走セシメ、短時間ノ力戰的一舉ヲ以テ、其二萬人ヲ殺シ、其死屍ハ實ニ山壑ヲ填塞セリト、諸書ニ見ヘタリ(但シ當時ハ射戰ヲ序幕トシ、之レニ次グニ努力的ノ

接戦ヲ主トシタノデアアル。

又義仲ハ孤軍ヲ以テ義經ノ大軍ト戦ヒ、遂ニ三條磧ニ敗レタリシモ、其妾巴ハ膂力アリ、毎ニ從軍シ、時ニ單騎止リ、鬪ヒタリシニ、十人力ヲ有スル剛者、畠山重忠薄テ、巴ノ甲袖ヲ攫ムヤ、巴ハ馬ニ策チ、躍リ逸シテ、甲袖ヲ絶チ、去リタリシニ、偶タマ勢多口ヲ破リタル範賴軍先鋒ノ勇士、内田家吉ニ會ヒ、之レヲ搏テ、其首ヲ斬リ、之レヲ義仲ニ視セシトアリ。又世ニ巴ノ子ナリト稱スル和田ノ三男、朝比奈義秀ハ北條黨ノ扼守セル門ヲ排シテ(俗ニ朝比奈ノ門破リト言フ)入り、又足利義氏ノ甲袖ヲ攫テ、之ヲ斷チシ等、其膂力アルニヨリ名ヲ遺シ。又七百十年前ノ建仁元年(西曆一〇一年)賴家ノ時ニハ、多力能ク射ル板額女アリ(日本外史)。

二〇

(拔萃)玄米常食時代ニ近キ力士ト、白米常食時代ノ力士トノ身長及ビ白米ヲ常用セザル者等ノ身長ニ就テ。

勸進相撲ノ力士中デ身長ノ八尺餘アリシハ、約二百八十六年前即チ寛永年中(一六二四年)ノ、勸進相撲ノ元祖ナル横綱明石志賀之助デ、七尺餘アリシハ仁王仁太夫、生月桂太左衛門等ナリトスルモ、白米常食時代ノ力士ノ身長ハ今之レヲ探知シ得ザルモ、今ヲ距タルユト約百六十年前(一七五一年)ノ寶曆頃ナル、湖龍齋ノ錦繪一枚ノ力士畫ニ、其身長ハ六尺八寸アリ、五人力ヲ有スル者ナリト記シタモノモアツタガ、又八十年前ナル天保初年(一八三〇年)ノ頃ニ於ケル、七代目ノ横綱タリシ稻妻ハ、身長六尺二寸アリシト言フノデアアル。

大聖孔子ノ身長ハ九尺餘アツタト言フノデアアル。

明治前ノ大男ナル白眞弓肥太右衛門ハ、其長ケ六尺四五寸ニシテ、明治以後ノ武藏瀉ヤ、大砲ハ近代ノ大男ナルニモ拘ラズ、其身長ハ漸ク六尺四五寸ニ滿タザルトノユトデアツテ、彼ノ明石關ヨリ低キユトガ實ニ一尺五六寸デアアルガ、明治十一、二年頃ニ、市内淺草ノ興行場ニ於テ、余ノ觀タル米食ヲ常用セザル一支那人ノ身長ハ、實ニ九尺アリトノユトデアツタノミデハナク、白米ヲ常食セザル滿洲人ハ固ヨリ、西藏人ヤ、或ハ粟トさつまいもト牛、豚、鶏、魚肉等ヲ常食シツツアツタ薩摩人士モ、琉球人モ、又豚肉ヤ、牛肉等ヲ常食シツツアツタ朝鮮人モ、俱ニ其體格ハ偉大ノ者ガアルノデアアル。

二 玄米ノ常食時代ト白米ノ常食時代トニ於ケル、武人ノ

常用シタル武器ニ就テ。

既述ノ例證ハ歴史的ノ記録、若クハ傳説等ニヨリタルモノナレバ、或ハ不安ノ念ナキニアラザルベキモ、余ハ更ニ進ンデ、之レヲ立證センガ爲メ、不可動的ニ現存セル、古人ノ實用シタル器物ニ就テ、聊カ之レヲ證明シ置ユト思フ、余ハ之レヲ或ハ我が邦ノ古刀ト新刀トニ討テ、若クハ新古ノ甲冑等ニ問ヒ、以テ其身長、重量、大小、形狀等ヲ測定シ、之レヲ基臺トシテ、論證シ得タナラバ、縱シ、眼前ニ該ノ勇壯、偉大ナリシ古人ノ實狀ヲ目撃シ、若クハ其力量ヲ實測シ得ズトスルモ、其記述上ニハ聊カ自說ノ安立ヲ得ヨトト思フノデアアル。

余ハ玄米ノ常食時代ト白米ノ常食時代トニ於ケル、武人

ノ體格ト力量トハ、各ノ其用ヒタル甲冑及ビ刀劔等ノ大小、長短、重量等ヲ比較スルトキハ、該ノ用者ノ體格ト、其力量トニ於テ、顯著ナル差異アリシモノナルベキコトハ、之レヲ發見シ得ルノデアル。

余ガ所藏ノ甲冑及ビ刀劔ニ就テ、之レヲ例セバ、玄米常食時代ノ刀劔即チ古刀ト、白米常食時代ノ新刀(徳川治世ノ初年即チ慶長八年以降ノ作)トニ於テ、既ニ左記ノ如ク、顯著ナル相異アルコトヲ發見シ得ルノデアル。

甲

古刀ノ部(即チ玄米常食時代ノ刀劔)。

- 一 金王 在銘、舊目釘孔以上ニテ長サ三尺餘、百九十匁アリ。

元曆ノ頃(西曆一一八四年)七百二十七年前。

- 二 大左 無銘、舊目釘孔以上ニテ長サ三尺一寸二分、

二百三十匁アリ。嘗テ小松帶刀氏ノ所藏ナリシガ、今ハ余ノ有トナレリ。

元應ノ頃(西曆一三一九年)五百九十二年前。

- 三 一文字 無銘、舊目釘孔以上ニテ長サ二尺九寸七分、二百二十五匁アリ。約六百年前。

乙 新刀ノ部(即チ白米常食時代ノ刀劔)。

- 一 木村四郎衛門 在銘、舊目釘孔以上長サ二尺四寸

八分、新目釘孔以上ノ長サ二尺二寸九分、百六十匁アリ。

元和三年(西曆一六一七年)八月賀州住兼若造、二百九十四年前。

- 二 小林伊勢守國輝 在銘、目釘孔以上ノ長サ二尺四

寸六分、百七十匁アリ。

延寶(西曆一六七三年)ノ頃、二百三十八年前。

三 清光(加州) 在銘、舊目釘孔以上ノ長サ二尺五寸一分餘。新目釘孔以上二尺三寸一分、二百匁アリ。

貞享甲子造(西曆一六八四年)二百二十七年前。

吾人ハ既述以外ニ、或ル數ノ刀劔ヲ檢定セシガ、所謂古刀ノ多數ハ、概スルニ、其最初ノ目釘孔以上ノ、刀身ノ長ハ三尺以上ノ者ヲ通常トシテ、優ニ三尺以上ノ大刀ヲ視ルコト數シバナルニ反シ、新刀ノ多數ハ新目釘孔以上ノ刀身ガ二尺三四寸内外ノ者尤モ多ク(徳川旗下ノ士ニハ二尺三寸五分ノ制アリシト聞ケリ)、時ニ其二尺六七寸或ハ其以上ノ大業物ヲ視ルコトアリトスルモ、蓋シ此ノ長刀ヲ

通常ノ物ト爲ス能ハザリシナリ。

余ハ嘗テ治療ノ爲メ熊本本妙寺ニ至リ、加藤清正ノ素質、黒塗リ具足ヲ觀テ、其鎧袖ノ實用的ニ附着シアルニ感ジ、且ツ清正老後ノ杖ハ余ノ鼻下ニ達スベキ長物ナルニ驚キタルガ、清正ノ身長ハ優ニ七尺以上モアリシトノコトナレバ、固ヨリ其用ヒラレタル者デアロト思フ。

丙 甲冑ニ就テハ、現ニ余ノ所有セルモノハ僅カニ八領ニ過ギザレバ、其少數ナルガ爲メ遺憾ナガラ嘗テ豫期シタルガ如キ適當ノ所斷ハ、之レヲナシ得ナカツタノデアアル。既述ニヨレバ我が邦人ハ、止ダニ有毒性ナル外國米ノ輸入ヲ廢止スベキノミデハナク、却テ國産ノ米ヲ輸出スルト同時ニ、大ニ大豆ノ輸入ヲモ獎勵シ、内ハ白米ノ常食ヲ

禁シ、而シテ玄米若クハ新製ニ限ル半白米ヤ、麥類等ト大豆ト、或ハ馬鈴薯ト大豆ト、或ハばんと大豆ト、若クハ沖繩ヤ、鹿兒島等ノ如ク、粟ニ甘薯ト大豆等トヲ常食料ト爲シ、最モ廉價ナル南洋産ノ冷蔵牛肉ト、豚肉及ビ魚、鳥類等ノ肉トヲ常食セシムルコトハ、我が邦ニ於テ目下焦眉ノ急務デアルコトハ、言フマデモナキコトデアル。

二二 余ハ茲ニ聊カ一般的醫界ニ在テ、現ニ眞認セラレツツアル、余ノ所謂有名無實ナル、素人自稱ノ脚氣病、否ナ、白米常用ノ中毒病ニ就テ、少ク之レヲ述ベテ置ユ。然ルニ世界ノ廣キ學界ニ於テハ、元來無用視シセラルルヤモ測リ難キモ、國人トシテハ義務デアリ、責任アル事ト信ズレバ、去ル明治四十一年(一九〇八年)十一月ニ東京「エユ」雜誌

ノ記者ト論談シタル者ノ中、其脚氣病、否ナ、白米常用ノ中毒的有害性作用ニ就テ、其一節ヲ轉載シテ置ユト思フ。東京「エユ」雜誌紙上ノ小林廣氏ト記者トノ論談。

記者曰ク、日本國ヲ愛スルモノハ必ズ之レヲ讀メ。

小林氏ハ最後ニ滔滔數時間ニ亙ツテ、吾人ニ語ツタ、但シ氏ハ米食ノ常用ニ關スル意見ヲ一大論文ニ草シテ居ラルル程デ、其ノ議論ハ細密ニ涉リ、廣汎ニ及ビ、殘念ナガラ一之レヲ紹介スルコトハ出來ナイ、ダガラ、吾人ハ成ルベク、其大要ヲ述べ、成ルベク讀者諸君ニ興味ノ多イ點ヲ紹介シヨト思フ。

サテ小林氏ハ劈頭第一ニ日本人ノ體力ヲ論ジ、其原因ガ何レニ在ルカヲ論究シタ、其中ニ氏ハ論シテ云フ、明治四十一

年(一九〇八年)十月二十五日ノ夕刊報知新聞ノ第一面ヲ見ルト、くろばときん將軍ノ日露戰史ガ譯サレテアル、其日本軍ノ概評ト云フ項中ニ斯ンナユトガ書イテアル、『日本軍ヲ概評セバ、幾多ノ長所ヲ舉ゲテ確カニ賞讚ニ値ヒスルヲ、具體的ニ證明シ得ルハ勿論ナルモ、之レト同時ニ幾多ノ弱點ヲ指摘スルヲ得ベシ、而シテ此ノ弱點ハ今後ノ戰爭ニモ顯ハレ來ルベキモ、予ハ敢テ此處ニ指摘セザルベシ、只ダ日本軍ノ重ナル缺點ハ、戰鬪ノ成績不明ナルユト多ク、又當然露軍ノ敗ラルベキ場合ニモ、其機會ヲ逸シタルユト多シ、是レ無論日本指揮官ノ失策タルヲ免レズト云フニ止メン。諺ニ言ハズヤ、勝者ニ對シテハ是非ノ論ナシト予ハ又敢テ言ハシ「勝者ハ崇拜セラルト、予ハ實ニ此ノ言ガ日本軍ニ對シテ

適切ナル評言タルヲ信ズ」云云。

我輩ハ軍事ニ就テハ全然門外漢デアアルガ、くろばときん將軍ノ此日本軍ノ概評ヲ觀ルト、實ニ其炯眼ニ驚カザルヲ得ナイ、流石ニ氏ハ良將軍デアアル、獨リく將軍バカリデナク、三十七、八年ノ交戰中、在旅順ノ外國軍事記者モ亦タ往往此種ノ意見ヲ報道シ、日本兵士ハ疾ク酩酊シ、疲憊蹣跚ノ状態ニテ戰頭ニ立ツ等ノ記事アリシガ、思フニ該ノ酩酊ハ我が軍ノ規律上ヨリ、之レヲ觀レバ、飲酒ノ酩酊デハナク、體ノ疲勞状態ナリシナラン。サラバ、此ノ弱點又ハ缺點トハ如何ナル者デアローカ、蓋シ我輩ノ考フル所ニ依レバ、此ノ弱點、缺點ハ我我日本人ガ最大急務トシテ講究セザル可カラザル大切ナ事デ、若シ亦タ該ノ弱點ト缺點トガ如何ニシテカ、避ケ得ベ

キ方法ガアルナラバ、同時ニ其方法ヲモ講究セネバナラヌ。固ヨリ我輩ハ軍事ニハ暗イガ、我輩ノ専門トスル科學的範圍ニ於テハ、我輩ノ卑見ヲ開陳スルノ義務ト責任トヲ感ズルモノデアアル、サラバ、く將軍ガ稱シテ日本軍ノ缺點トシ、弱點トスル所ハ果シテ何デアローカ、我輩ノ見ル所ヲ以テスルト。

第一ニ將軍ガ指摘シタ日本軍ノ弱點ト云フノハ、軍人ノ體質、軍馬等、之レヲ露軍ニ比スレバ數多アルベキモ、其要點ハ既ニ戰鬪ニ勝テ得タ軍隊ガ、充分ノ追撃ニ耐ヘナカツタ程ノ、過度ノ疲勞状態ニ陥ツタユトヲ言ツタノデアロー。

第二ニ此ノ弱點ハ、蓋シ日本人ノ體質ト過度ノ疲勞等トガ、其性質上殆ンド日本人ノ天性トモ云フベキモノデアアルカ

ラ、今後ノ戰爭ニモ決シテ避ケ得ベキモノデナイト、云フ意味デアロー。

第三ニ「日本軍ノ重ナル缺點ハ戰鬪ノ成績不明ナルユト多シ」ト云フノハ、日本軍ハ戰鬪ニ敵軍ヲ破リ得ルモ、追撃ガ不充分デアツタ爲メ、敗者ヲ殲滅スルユトガ出來ナカツタ等ノ事ヲ言フノデアロー。

第四ハ「當然露軍ノ敗ラルベキ場合ニモ、其機會ヲ逸シタルユト多シ」トイフノハ、日本軍ハ露軍ニ勝ツテ、露軍ヲ殆ンド殲滅セシムベキ場合ハアツタガ、千八百七十一年彼ノ獨軍ガせだんニ於テ佛ノ全軍ヲ擒ニシタト言フ様ナ、最後ノ決戰ヲ爲スユトガ出來ズ、遂ニ其好機ヲ逸シタユトヲ謂フノデアロー。

第五ノ「是レ無論日本指揮官ノ失策タルヲ免レズ」ト言フノハ、若シ日本指揮官ノ指揮、其宜シキヲ得タラバ、當時ノ露軍ハ見事ニ粉碎、全滅セシメラレ、或ハく將軍自身モ遂ニ捕虜タルヲ免レ得ナカツタ場合ガアツタカモシレヌトノ意味デアロー。

ソユデ、更ニ此ノ五節ヲ一括シテ、我輩ノ研究上カラ論證スルト、例ヘバ茲ニ大ニ敵軍ヲ敗リ、進ンデ追撃ニ移リ、臆テ敵軍ヲ粉碎シ、全軍ヲ捕虜トシ、敵軍ヲシテ復タ起ツ能ハザラシムルノ瞬時ニ於テハ、層一層、最後ノ大活動力ヲ奮起セシメネバナラヌ、然ルニ日本軍ハ斯カル場合ニ於テ、業ニ已ニ一種ノ病的ナル過度ノ疲勞状態ニ陥リ、如何ニシテモ最後ノ大活動力ヲ揮フコトガ出來ナイト言フノハ、抑モ如何ナ

ル故デアローカ、是レニハ必ズ一大原因ガナクテハナラヌ、我輩ハ之レヲ白米食常用ノ中毒病ニ歸スルノデアルト主張スル者ナリ、蓋シ白米食ノ常用者ニアツテハ、其平素已ニ末梢神經、細小血管、心臟ノ筋質及ビ發動力主宰ノ筋質等ガ、縱シ通常輕微ノ症徴トハイヘ、已ニ多クハ白米質食料ノ中毒性状態ニ陥ツテ、其潜在性ノ病的障害アルモノト爲スベキ性質ガアルカラ、此ノ一種ノ病的組織ヲ具有スル身體ニハ、最後ノ今一息ト言フ場合ニ於テ、體力ハイヨイヨ萎靡シ、疲勞ハ倍マス増加スベキ理由アルヲ免レナイ、デアアルカラ、我ガ精銳ノ勇士モ身命ヲ抛ツテ、力戦スルノ勇氣ハアツテモ、竟ニ此ノ病的作用ニ打勝ツコトガ出來ナイ、大勝ヲ眼前ニ見ナガラモ、身體疲憊シ、胸内苦シク、下肢重ク、活動ヲ加フ

ル毎ニ、層一層病的の上ノ苦悶、困難ヲ感ズルノデアル、目前ノ勝ハ勝デアルガ、全ク遺憾ナシト云フコトハ出来ナイ、日露戦争中、我軍ハ事實上遼陽ニ、奉天ニ、古今無雙ノ大勝ヲ重ネタトスルモ、或ル點ニ於テハ、空シク長蛇ヲ逸シタカノ遺憾ガアル、戦争ニハ終始敗戦ヲ重ネタク將軍ガ、其戦鬪ノ場裡ニ實歴シタ結果、其爛眼ヲ以テ日本軍ノ、此ノ弱點ヲ指摘シタノデアルガ、彼レハ戦術上ヨリ斯ク見タノデ、更ニ一步ヲ進メテ、其原因ガ何レニ在ルカハ、流石ノ將軍モ看破スルコトガ出来ナカッタデアロー、併シ我輩ハ科學上カラ深く、其原因ヲ研討シ、論究シテ、大ニ日本ノ陸軍并ニ日本國民ニ警告スル所ガナクテハナラヌ、是レ日本國民タル我輩ノ義務デアル、責任デアル。

食米國人特有ノ病氣。

食米國人ニ特有ノ病氣ハ何デアアルカトイフト。

第一世間ニ知ラレツツアルハ脚氣病デアアル、然ルニ食米國人タル我が日本ニ於テ、年年此脚氣病ニ襲ハルルモノガ何人アルデアローカ、博士べるつ氏及ビしよえべ氏、其他學者ノ説ニ依ルト、年年約十萬乃至十二三萬人ニ上ルトイフノデアアルガ、當明治四十一年(一九〇八年)十月新刊ノ醫學大辭書中、岡田博士ノ脚氣論ヲ觀ルト、我國年年ノ脚氣罹病者ノ數ハ五萬ヲ下ラザルベシト爲シ、且ツ其著シク増加シタノハ數十年以來ノ事デアルト言ツテ居ル、ケレドモ、此レ等ハ醫士ニ診察ヲ求メタ病者ノ概數デアローカラ、此レヲ以テ決シテ正確ノモノトスルコトハ出来ヌ。

我輩ノ本邦人ニ關シ、此レヨリモ以外ニ、尙ホ遙ニ多大數ナル、白米常食ノ中毒病者アルコトヲ信ズルハ、決シテ理由ノナイコトデハナイ、且ツ夫レ素人自稱ノ脚氣病以外ニ於テ、眞ニ我國ノ不明病ト稱スベキ一種ノ病氣ガアル、即チ無限性ナル國人病ガアルノデアルカラ、之レヲモ合セテ調査シテ見タナラバ、我國人ノ多大數ハ白米食常用ノ爲メ、中毒セラレツツアルノデアルト言ツテ宜イカモ知レヌ、抑モ精密ノ研究ヲ遂ゲヨ―トスルニハ、極メテ簡單ナル原始ノ状態カラ考察シテ行カネバナラヌ、例ヘバ進化論ニ於テハ動物ハ原始蟲カラ始マツテ、ソレガ蟲類トナリ、魚類トナリ、禽鳥若クハ獸類トナリ、或ハ猿猴トナリ、遂ニ人間ガ出現シタコトニ論及シテ行ク、此ノ如ク病理學ニ於テハ蚊ヤ、蚤ニ刺サ

レタ傷デモ、猛烈ナル毒蛇ニ嚙マレ、又ハ電擊性ノ病症ニシテ咄嗟ノ間ニ死スルトイフ様ヲ激烈ナルモノデモ、俱ニ同じク一個ノ病氣トシテ取扱ヒ、研究シテ行カヌト、到底最極ノ眞理ニ到達スルコトハ出來ナイ、斯ノ様ヲ着眼點カラ出立シテ行クト、我國ニ於ケル白米常食ノ中毒病ハ、脚氣病并ニ同種ノ病氣ハ實ニ非常ナル多大數ニ上ルコトカ確カデアアル、而シテ此レガ白米常食ノ結果デアルト斷言シタナラバ、世人ハ定メテ驚クデアローガ、我輩ガ多年研究ノ結果ハ何ウシテモ、此レヲ白米食ニ歸セネバナラヌ。

元來此種ノ病氣ハ今日始マツタモノデハナイ、支那ニ於テハ古ク已ニ春秋左氏傳ニモ、其事ヲ載セアリシト聞キシガ、實ニ西曆四十一年(今ヲ距タルコト一千八百六十八年前)即

テ東漢光武帝ノ世、伏波將軍馬援ノ追討軍ガ南下シテ、交趾ニ駐在セシトキニモ、之レアルユトナ知ラレタリ、即チ馬援將軍ハ該ノ地方ニ流行スル地方病ヲ避ケンガ爲メ、當地産ノ米ヲ食ハズシテ、薏苡仁ヲ常食シ、凱旋スルヲ得タノデア
ルガ、將軍ノ死後ニ該ノ多額ヲ車載シタ薏苡仁ノ收賄説ノ爲メ、爵位ヲ褫奪サレタノハ滑稽デアツタ。

故ニ導引ト稱スル、不明ナル治療ノ名ハ已ニ漢時代ニアツタ、我國ニ於テモ仁德天皇十三年(西曆三百二十五年)ニ始メテ、茨田ニ精米所ヲ置カレ、次デ三百七十六年後(西曆七〇一年)ノ大寶令ニ按摩博士一人、按摩生二人ヲ置ク等ノ記事アルヲ觀レバ、我國ニモ亦既ニ已ニ白米常食ノ中毒病ナル不明病ガ出現シ、此ノ不明病ヲ治療スル不明ノ治療者ガ起タ

仁德天皇十三年(西曆三百二十五年)ニ始メテ精米所ヲ置カル。西曆七〇一年大寶令ニ按摩博士ト按摩生トヲ置カル。我が邦ノ脚氣病否ナ白米ノ常食ニ因ル中毒病症ノ出現

ノモ明了スルユトデアアルカラ、茲ニ四、五世紀ノ古代ヨリ、既ニ已ニ導引、按摩、灸點、針治等ナル不明ノ治療者ガ常用白米ノ中毒病ナル脚氣病ト同種ノ不明病ニ對シ、其治療ヲ施シツツアツテ、永ク我が全土ニ儼存シテ居タユトト思ハルル。然ルニ現時ノ我が邦人ハ、之レガ爲メニ治療セラレタ幾多ノ病症ト、其治療ニ從事シツツアツタ無慮十萬ノ按摩(明治四十二年我が邦ニ按摩廢止ノ論アリシトキ、東京朝日及ビ報知新聞等ノ記事ニモ、現ニ我が邦ノ按摩業者ハ十萬人アリトノユトヲ記述シアツタ)以下灸點等ノ事ニ至ツテハ、古來未ダ充分ニ其存在ノ理由ヲ説明シタモノガナイ、然カモ食米國以外ノ開明國人ニ在テハ、斯ノ如キ不明ノ罹病者モナク、亦タ斯ノ如キ不明ノ治療者モナイ、獨リ我が國ノ如キ

食米國人ニ限り、無限ナル不明ノ罹病者ト、吾人開業醫ノ全數ニハ殆ド三倍セル、多大數ノ不明ナル治療者トガ儼存シ、且ツ脚氣病ガ特ニ食米國タル我が國ニ現存スルト云フノハ、抑モ如何ナル原因ニ歸スルデアローカ、我輩ハ之レヲ白米食ニ歸スルノデアアル、云云、以下略ス。

我が醫界ノ脚氣ニ關スル觀察上ニハ、種種ノ議論ガアツテ、醫界ニ於ケル脚氣病ノ原因說ハ紛紛擾擾タルモノデアアルガ、然ルニ此脚氣病タルヤ、其病症ノ多クハ、之レヲ無識者ナル素人が自ラ脚氣病ト稱シテ、殆ド過マタザル如クニ、至ツテ知り易ク、其病性ハ専門的ノ有識者タル、博士大家ノ專任的ナル研究上ニ在テモ、猶ホ且ツ之レヲ極メテ解シ難イト云フヨ―ナ有様デアアル、例ヘバ今日マデ已ニ四年間ノ星霜

ヲ繼續シツツアル、我が邦ノ專任的ナル脚氣調査會、其モノガ即チソレデアアル。

見ヨ、脚氣病患者ノ八九分ハ患者自カラ、其脚氣病ニ罹ツテ居ルト云フコトヲ訴ヘテ、來ルニモ拘ラズ、我我開業醫ヲ首メトシ、世界的ナル醫學者ガ脚氣病ニ關スル智識ハ、其得ル所今日マデニ是レ以上ノ發達ヲ見ル能ハザルヨト、奇觀ヲ呈シテ居ル。是レ實ニ我輩ガ畢生ノ遺憾否ナ、誠ニ以テ奇怪至極ノ事ト云ハネバナラヌ。

患者自身が脚氣病ト自認シテ、我々醫師ニ、其治療法ヲ委託スルニ過ギナイト云フノハ實ニ天下ノ奇觀デアアル。

日本國中唯ダ獨リ鹿兒島人士ノ體格ハ、何故ニ偉大ニシテ強健デアアルカ。

米食常用者が、其身體ニ受クル中毒性ノ諸病症ニ就テモ、小林學士ハ縷縷述ブル所ガアツタケレドモ、事理論ニ互ツテ、我我素人ニハ遽カニ了解シ難イ點モアルカラ、此處ニハ唯ダ肉食者(始原論上ノ適度ナル勞心食者)ノ體格ニ關シテ、小林氏ガ語ツタ一二ノ例證ヲ舉ゲテ、此談論ノ結末ヲ着ケルゴトトシヨ。

氏ハ吾人ニ語ツテ云フ様、近ク本邦ニ在テ、僅カニ一局部ノ一集團人中ニ在リ優秀ナル體格ヲ具ヘ、他ノ各地人ノ體格ニ比ベテ、特ニ卓越セルモノガアル。

ソレハ即チ鹿兒島藩士デ、余ガ嘗テ約三年間鹿兒島ニ居タ時ニ親シク研究シタ所デアル。

鹿兒島藩士ノ體格ハ概シテ強剛偉大デ、誠ニ立派ナモノデア

アル。

獨リ我輩が見タ所バカリデナク、人モ必ズ之レヲ信ズルノ理由ガアル、本年(一九〇八年)十月四日ノ時事新報第九面ヲ見ルト、野津元帥ニ係ハル記事(上原中將談)中ニ斯ンナコトガ書イテアル。

元帥ノ體格當時ノ薩摩藩主ハ熱心ニ身體ノ練磨ヲ獎勵シタリシカバ、侯ト時代ヲ同ウスル西郷侯、樺山伯、伊東元帥、高島子等ハ、何レモ強健ノ體格ヲ具ヘ、予等ノ時代ノ薩摩人トハ、體格ニ於テ顯著ノ相違アルヲ覺ユ、云云ト。

然ラバ何故ニ鹿兒島ノ藩士ハ強健ノ體格ヲ有シタノデアロカ、身體ノ練磨ハ無論、其一因タルニハ相違ナイ。

併シ如何ニ身體ノ練磨ヲ行ツタトテ、適當ナ常食料ト、善良

ナ體格トデナクテハ、其練磨ニ堪ヘテ、偉大ナル發育ヲ爲ス
モノデナイ、思フニ是レニハ他ニ大ナル原因ガナクテハナ
ラヌ。

余ノ見ル所デハ、鹿兒島人ハ衛生的ニ善良ナル常食料(不適
當ナル勞働食ニハアラズ)ヲ持ツテ居ル。

天正年間豊大閣ガ鹿兒島ヲ征伐シタ時ニ、間者トシテ僧侶
ヲ使ツタ、其後鹿兒島ハ佛教禁制デ、殺生、禁斷、ナク、肉食ハ勝
手デアツタ。

魚肉、鳥肉ハ固ヨリ、猪、兔ノ肉ヤ、豚肉ヤ、牛肉等モ食ツタ。

又タ犬ヲ養フテ、兔ヲ捕ルユトモ巧ミダ。

上野公園ニ行クト、其好適例ヲ西郷翁ノ銅像ニ見ルデハナ
イカ。

亦タ一方ニ於テ薩隅ノ地方ハ米ガ多ク收レナイ。

其代リニ粟ヲ種エ、甘藷ヲ作り、蕎麥ヲ蒔ク。

彼レ等ハ白米食(有毒性ナル勞働食)ノ常用者デハナイ。

寧ロ肉食(適度ナル勞働食)ノ常用者ノ一集團人デアアル、故ニ

從來我が日本國中ニアツテ、止ダ特リ、有毒性ナル白米食常

用ノ中毒ヲ蒙ラザリシ、一集團人デアアル、是ヲ以テ鹿兒島人

ハ有毒性ナル白米食ノ害毒ヲ蒙ラズ、不適當ナル勞働食ニ

生起スベキ英吉利斯病等ヲ免レ得タ者ノ少ナカラザルノ

デアレバ、彼ハ叢爾タル島嶼ノ暖地ニシテ、尙ホ且ツ慢性ナ

ルまらりや病ヤ、ひらりあ病ヤ、肺等ノちすとま病、余ハ市人

ノ多大ナル貧血性ノ病症ヲ詳釋センガ爲メ、汎ク糞便ヤ、尿

液ヤ、血液等ノ顯微鏡的検査等ヲ實行セシモ、當時ノ市中

ニハ血液中ノひらりあ幼蟲ハ甚ダ多カリシモ、十二指腸ノ巨口蟲ハ極メテ稀デアツタ等アリシモ、當時余ガ市人ニ觀タル多大ナル貧血性膚色ノ原因ハ、主トシテ當地方ノ溫熱ナル氣候ニ因ルベキモノニシテ、或ハ慢性まらりあ等ノ病害作用ニ起ルモノト爲シ得ベキモノモアツテ、吾人關東人ノ面色ニ比スルトキハ、概シテ殊ニ著明ナル貧血性ノ膚色者ナルニモ拘ハラズ、其特殊ノ常食料ト、藩制上トヨリ身體ノ練磨ヲ強行セシニヨリ、自然的ニ其體格ガ概シテ偉大ニ、且ツ強健トナリシ所以デアル。

余ガ嘗テ神戸市ニ居タ時ニ、二友人ト俱ニ攝州ノ摩耶山ニ急歩シテ、上ツタユトガアル。

其時ノ一人ハ體質ノ強良ナリシ鹿兒島人デアアルガ、己ニ久シク白米ノ常食者ニ化シツツアツタ者ナレバ、坂路漸ク半バニシテ全ク疲レテ了ツテ、遂ニ頂上ニ躋ルユトガ出來ナカッタ、日常ハ自覺上ニ病氣ガアツタトイフ譯デアナイガ、當時ハ顔色變ジ、胸内苦悶シ、心臟奔馬ノ如ク跳動シ、加フルニ體モ、下肢モ極メテ重モ苦シク、最早一步タリトモ登山シ能ハザルニ至ツタノデアルト、云フノデアル、然ルニ身長僅ニ五尺二寸ナル小男ノ、然カモ一見シタ所、アマリ強壯ラシクモナイ、余ハ左程ノ疲勞ヲモ覺エナカツタガ、俱ニ徐歩シテ、一同歸宅シタノデアツタ、是レハ即チ余ガ米食ハ三食トモ一杯カギリニテ、他物ト多量ノ肉類ヲ常用シ、運動ヲモ勉メツツアツタカラデアロト思フ。

ソユデ余ハ日本國民ニ警告スル、否チ世界ノ白米ヲ常食ス

ル人民ニ警告スル、今後ノ人間ハ白米ヲ常食スルコト勿レト、然ルニ我が日本國人ニ取りテ、白米食ヲ常用トスルナト言フノハ、少シク苦痛デアルカモ知レヌ。

米ヲ棄テテ、高イ肉ヲ食フコトハ容易ニ行ハレヌカモ知レヌ。

然レドモソレニハ廉ク牛肉ナヅヲ得ル方法モアル。

我輩ハ其方法ニ就テ、南洋ノ牛肉ナレバ、我が百二十匁一斤十三、四錢位ヲ得ルコトマデモ、既ニ研究シテ居ルノデアアル、本來我が邦人ノ常食料ハ止ダニ蛋白質過少ノ、勞働食デアルト言ヒ得ルノミデハナク、多クハ不幸ナル有毒性ノ白米食ナレバ、即チ之レヲシテ白米食以下ノ低價ナル、多蛋白性勞心食ニ變更セシメ得ルコトハ、恰モ手掌ヲカヘスガ如ク、

易易トシテ直チニ實行シ得ベク、他ニ記述シ置ケル如クデアアルガ、餘リ話シガ長クナルカラ茲デ止メテオコトト思フ
(「エュー」雜誌記事終)。

二三 嘗テ余ノ主唱セシガ如ク、若シ常用白米ノ中毒病ヲ以テ、我が邦ノ醫界ヲ首メ、現ニ世界的醫界ノ是認シツツアル所ノ如ク、余ノ所謂ル有名無實ナル、素人自稱ノ單一ナル脚氣病トノミ爲シ得ルトキハ、我が邦ニ在テ(其最多數ヲ發病セシムル、極惡地ナル東京市内ニ於テモ、其住人ヲシテ毎年三月ヨリ十月若クハ十一月ノ間ニ亙リ、白米五ト、大麥五トノ混飯ヲ常食セシムルコトトセバ、該ノ素人自稱ノ脚氣病ヲ以テ、其醫療ヲ要スルニ至ルモノハ殆ド消失シ去リ得ベキノミデハナク、近來ノ東京市内ニ於ケ

ル該ノ脚氣病者ハ、實ニ余ノ他所ニ於テ概述シ置ケルガ如ク、既ニ已ニ著シク減退シツツアルユトノ事實ヲ、正サニ證明シツツアルモノガアルノデアアルカラ、現ニ空前ノ全盛ヲ極メ、大流行ヲナシツツアル、花柳病ノ慘害ニ比スレバ、該ノ脚氣ハ却テ遙カニ輕易ニシテ、尤モ度シ易キ者ト爲シ得ベシトノ説(一九〇七年)本編ノ序外ノ記事中心ニアル花柳病ノ部ヲ參觀スベシ。

二四

明治三十二年即チ一八九九年ニ完成シタル、腸ちぶすノ頓挫療法(附腸ちぶす初期診断法ノ概説)ノ拔萃。

本療法ノ精神ハ、發病後五日マデノ腸ちぶす患者ニ對シ、下劑ニ次グ、注意性ナル下劑的療法ヲ主トシ、中量ノ樟腦ト輕量ノ下熱藥トヲ併用スルニ止メ(但シ發汗ヲ催シ、患

腸ちぶすノ初發病者ニ對スル該ノ頓挫療法ハ、五ヶ年間ノ研究ニヨリ完成シタルモノデアアル。

者ハ著シキ輕快ヲ自認シ得ベシ)、其治療方法ハ極メテ簡易ニシテ、其奏效作用ハ確實ナルモ、或ル事情ノ爲メニ、未ダ公刊セザリシナリ。

但シ本病ハ發病後六日ニ及ブモ、尙ホ且ツ便秘シテ、注意ノ下ニ、下劑ヲ應用シ得ルモノナレバ、概スルニ、其諸症狀ヲシテ、著シク輕易ナラシメ、其經過ヲシテ通常三週以内ニ短縮セシメ得ベキ作用アル者トス、而シテ其重症ナル經過ニ陷ルユトヤ、或ハ危險症等ニ陷ルガ如キ、不良ナル狀態ヲ見ルユトナクシテ、尤モ安全ナル治療方法ニ屬スルモ、獨リ本療法ノ適應スベキ時機ヲ逸シタル者ニ在テハ、固ヨリ本療法則チ應用セザルヲ可トスルノ細心の注意ヲ要ス。

赤痢ノ初發病者ニ對スル該ノ頓挫療法ハ。五ヶ年間ノ研究ニヨリ完成シタルモノデアアル。過ぐるゝる鐵液ノ缺クルトキハ結晶硝酸銀ヲ與フベキモ、俱ニ其味ハ惡シ。

二五

明治三十二年ニ完成シタル、改正赤痢療法モ、亦其原則トシテハ、下劑ニ次グ、注意性ナル下劑的ノ療法ナルモ、大人ニハ過ぐるゝる鐵液(一日間二、〇ぐりすりん適宜、水一〇〇、〇ヲ一日三回ニ分服セシメ、用後直チニ充分ナル冷水ノ含嗽^{ウガヒ}ヲサシムベシ)ヲ兼用スルノ要アリ。特ニ其初發者ニ在テハ、縱シ發熱シ、劇烈性ニシテ、急進スベキ重症性ニ發病シ來リタル者ナリトスルモ、通常二三日以内ニ於テ、頓挫的ニ奏效シ、其病症ハ急速ニ輕易トナリ、毫モ副作用ヤ、危險症狀等ノ傍發スルコトナキモ、若シ初診ノ時、或ハ已ニ三四日以外ヲ經過シ、若クハ已ニ最急劇ナル重症者ニシテ、該ノ治療時機ヲ逸スルノ虞アルカ、若クハ小兒等ノ服藥ヲ嫌忌スルモノニ在テハ、速カニカ

主トシテ濃色人種ニ著明ナル臀部、腰、背部等ノ母斑即チ余ノ所謂人類ノ幼兒斑又進化斑論ノ拔萃。

二六

余ハ東洋ノ濃色人種ニ於テ、其胎生時代ノ末期ニ生起シテ、已ニ初生兒ニハ之レヲ發現シ來リ、通常六歳内外ニ消失シ去ル、余ノ所謂人類ノ幼兒斑、又進化斑(通常醫學者ノ母斑ト稱シツツアルモノ)ハ即チ鳥獸類ノ幼時色、進化色、蟲類若クハ魚類、例ヘバ金魚ノ孵化色、進化色、幼時色等ト同性質ノモノニシテ、我ガ人類特ニ東洋人ニ於テ著明

ニ視認シ得ル所ノモノハ、其最多數ガ臀部ト、其近圍トニ生起シ來リ、其臀部、殊ニ薦骨及ビ尾骶骨部ニ全缺スルユトアルハ、蓋シ極メテ稀ニシテ、縱シ、該ノ菲暗色ナル雲斑狀ノ、非常ニ汎ク生起シテ、或ハ各所ニ斑斑狀、斑紋狀、雲斑狀等ニ、或ハ汎ク、或ハ點狀等ニ多生シ來ルコトアツテ、其發生部ハ常ニ臀部及ビ全背面ニ限ラルルモ、時トシテ、汎ク上下肢ノ外面等ニモ、蔓發シ來ルコトナキニアラズ、而シテ濃色兒ニハ該ノ斑多ク、且ツ濃色斑ナルモノ多カリシモ、或ハ濃色兒ニシテ該ノ斑ハ少ク、若クハ斑色ノ至テ菲キ者モアリシガ、又白色兒ニシテ濃斑、若クハ多斑ナル者モ往往之レアリシ。

余ハ神戸市滯在中、夙ニ日歐人ノ混血兒及ビ清國人ノ幼

兒ニモ、該ノ斑ノ臀部ニ存スル者アルヲ視シガ、余ガ先キノ二十餘年間ニ互ル、該ノ斑ノ檢定上、其制圖五百ニ及ビタル者ニ就テ、之レヲ觀レバ、該ノ斑ノ薦骨及ビ尾骶骨部ニ缺如スル者ハ、百人中僅ニ三人ニ過ギザリシガ、該ノ斑ノ斯クモ尾骶骨部ニ多發スル例類ヲ探討セバ、斑色家犬等ニ於テモ亦其尾根部ニ斑色ヲ缺クユト、極メテ稀ナルヲ知レリ、然レドモ余ノ該ノ記述ハ、深ク之レヲ秘シテ、既ニ十餘年間ニ互ル今日迄未ダ之レヲ公表セザリシナリ。

二七

本篇ハ則チ萬有科學ノ始原論デアアル。

此始原論的原則上ヨリセバ、余ハ後章ニ於テ、人體ヲ十餘條ニ別チ、人體ハ即チ一種ノ有生性ナル變態的ノ電體物デアルトノコトヲ、説述シタル如クデアアルガ、果シテ人體

始原論ヲ本位
ト爲セル、電
化的作用ノ新
治療則。

ガ變態性ノ電體物デアルカラニハ、嘗テ吾人ガ專攻セシ
醫療上ノ一些事ニアツテモ、彼ノ尤モ難治ト言ハレツツ
アル、癩病ノ初期ヤ、肺結核ノ初期、若クハ其全經過中ヤ、其
他ノ多クノ結核病ヤ、癌腫ヤ、長久ナル經過ノ糖尿病ヤ、慢
性腎炎ヤ、心臟病、各種ノ慢性貧血病、出血病(血友病)、産後ヤ、
各病後等ニ持久スル衰弱的ノ病症ヤ、英吉利斯病ヤ、痛風
ヤ、慢性神經痛ヤ、神經衰弱等、凡ソ是等ニ類屬スル、諸多ノ
病症ニ就テハ、余ハ一切之レヲ概括シテ、始原論的本位ナ
ル、其電化的作用ノ療則上ヨリ、之レヲ觀シ來ルニ、該ノ各
病者ノ體性上ニハ、其電化的ノ作用上ニ於テ、或ル一分ノ
モノガ減退シ若クハ缺乏スルモノアルユトハ、言フマデ
モナキユトナレバ(即チ余ガ本篇ニモ概述シタル如ク、近

時ニ流行シツツアル、冬季ノ植物ニ對スル、温室ノ變態性
電氣的ノ、電流性作用ナル溫熱ヲ減弱セシムルモノト、全
然同理トナルノデアレバ、此ノ體質性ナル電化的作用、其
モノノ或ハ減退シ、若クハ衰乏シツツアル等、其各病體ノ
電化的作用ハ、之レヲシテ或ハ奮起セシメ、若クハ亢進セ
シメ、以テ漸次的ニ旺盛ナラシメテ、其自然的ナル即チ電
化的ナル體質性作用ヲ強良性ニ持續セシムベキ必要ハ、
固ヨリ當然之レアルモノナルニ由リ、乃チ彼ノ現ニ不治
病ト稱セラレツツアル癩病、癌腫、諸種ノ結核病、糖尿病、慢
性腎炎、出血病、慢性經過ノ心臟病等ノ病者ニ對シテハ、今
日ノ如ク進歩シ、發達シタリト言ハレツツアル、我ガ醫界
ナリト雖モ、猶ホ且ツ依然トシテ、其適當ナル藥用的ノ療

則ナク、僅カニ糖尿病者ニ對スル、對症的ノ方法ナル澱粉食ノ禁止ヤ、慢性腎炎ニ對スル、攝養的ノ方法ナル牛乳療法等ノ如キ、極メテ其不備ナルモノナルノミデハナク、吾人醫家ハ通常トシテ、止ダニ之レヲ、該當ノ患者ニ命ズルノミノ療則ヲ實行シツツアルモ、吾人ハ始原論上ヨリ、到底是レ等ノユトニ安ンジ得ル能ハズ、縱シ、一步ヲ譲リ、彼レ等ノ多クハ不治的ノ難病ニシテ、其病性上ニ在リ、若シ之レヲ全治シ得ザルモノアリトスルモ、其長キ病期中ニアリ、能ク持續シテ、平常ノ健康状態ニ等シキ、體質的愉快ナル状態、即チ好良ナル電化的状態ヲ以テ、長ヘニ病苦ヲ忘レ、殆ド之レヲ知ラズニ經過シ得レバ、得ラルル程ニ、不治病者ノ現世ニ大ナル幸福タルユトハ言フマデモナキ

ユトデアアル、故ニ吾人ハ從來ノ、或ハ患者ナル素人マカセノ、糖尿病者ニ對スル澱粉食ノ禁止ヤ、慢性腎炎ノ病者ニ對スル牛乳療法ト稱シツツアル、彼ノ攝養的方法ヲ主トシテ、之レヲ實行セシメツツアル治療方法ノ以外ニ在リ、該ノ患者ヲシテ、止ダニ或ル種ノ藥用的治療方法ニヨリ、其特有セル體性的ノ電化的作用ヲ喚起シテ、之レヲ持續セシムベキ、必要アリト爲シ得ベキノミデハナク、假令ヒ、輕症ナリトスルモ、貧血性若クハ體質性不良等ノ病症ヲ持續スル患者ニ對シテ、或ハ一時的若クハ持續的ナル藥用ニモセヨ、該ノ病者ノ體性ナル電化的作用ヲシテ、催進奮起セシメ、之レヲシテ、或ル度ノ健康状態ニ快復セシムベキユトハ、蓋シ我ガ神聖ナル醫療上ノ一方法デアアルベ

キノミナラズ、尙ホ他ニ眼ノ白内障ヤ、膽石ヤ、腎石ヤ、膀胱結石等ノ諸病症ハ、今日ノ科學上ニテハ、其治療方法ノ原則ヲ、彼ノ外科的ノ施術以外ニ在テハ、殆ド之レヲ發見シ得ザルモノトスルモ、若シ將來ニ於テ電氣的療則ノ進歩シ、發達スルニ至レバ則チ該ノ結石病等ハ、蓋シ、其本性ガ病的ニ變態シタル電化的作用ノ結果ト爲シ得ベキモノナレバ、是レ亦將來ニ於ケル、其電化的還元性ノ療則上ヨリ、更ニ進ンデ、其新治療法ナル電化的作用ノ方法ヲモ、之レヲ發見シ得ルニ至ルベキ者デアロト思フノデアアルガ、尙ホ又今日ノ醫界ニ在テハ、其治療方法上ニ於テ、未ダ全ク注意セラレザル所ノ、精神系統ノ機能的ナル變調者（即チ精神變調者ヤ、精神病者等ヤ）、神經系統ノ機能的諸病

症等ニ對シテハ、余ノ始原論ニ所謂、人體ノ心電的ノ電流性作用ナル、其心電術即チ現ニ假名ノ催眠術ナル虛名ニヨツテ、其一部ノ實在性ナル治術ヲ現行セラレツツアルノデアアルガ、近キ將來ニアツテハ、余ノ所謂心電的ノ電流性作用ナル、其心電術ニヨリ、腦及ビ神經系ニ係ル、諸病症ノ治術的方法ハ急速ノ進歩ヲ爲シ、且ツ非常ニ宏大シ得ベキモノト、信ズベキ理由ガアルノデアアル。例ヘバ五十餘歲ノ一婦人ニシテ、殆ド二十餘年間ニモ亘リ、斷續的ニ治療セシト言フ肺結核ハ已ニ治シ去リ、二、三年前來全身ハ著シク肥滿シ居リシニ、偶マ胃癌ノ病症ヲ呈シ來リ、腦ノえんぼり、右半身不遂、強熱等ノ諸症ヲ間隔的ニ反復發作シ、且ツ神經症狀ハ増盛シ、嘗テ十餘年間ニモ亘リツツ

該ノ患者ハ或
ル博士ヤ、專
門ナル山田博
士ノ診察ヲウ
ケタコトモア
ルノデアアル。

アリシト言フ、尤モ頑固性ニ持續セル常習性ノ不眠症ア
ツテ、諸種ノ催眠藥モ殆ド無効ニ歸セル爲メ、或ル催眠術
者ガ二週間ニ亘リ、毎夜ニ連續シテ實行セシ催眠術モ、遂
ニ該ノ患者ヲシテ、一回モ快眠セシメ得ザリシ者ナリシ
ニモ拘ラズ、余ハ精神ノ慰安的ナル、心電性ノ訓誨方法ニ
ヨリ、最モ單純ニ就眠シ、快眠シ得ベキユトノ談話ヲ十六
日間ニ於テ、僅カニ三回反復シタリシニ、爾後ハ該ノ嘗テ
不幸ナル不眠患者モ隨所、隨時ニ意ノ如ク就眠シテ、尤モ
良ク快眠シ得ルニ至ラシメタル者アル等ノ如クデアアル。
余ハ淺學ヲ省ミズ、敢テ本篇ノ如キ、宏大、無限ナル、最高等ノ科
學的大問題ニ關シ、特ニ専門以外ノ、萬有ナル科學的始原論、其
者ノ學理ヲ説述スルノデアレバ、嘗テ余ト同僚タリシ舊知ノ

者ト雖モ、本篇閱覽ノ榮ヲ賜フ者アルハ、恐ラク鮮少ナルベシ
ト思フノデアアルガ、蓋シ余ノ獨立否ナ、孤立的ナル不同化的主
義カ即チ余ノ天性ナル、自體ノ心電的作用ガ、恰モ或ル多數ノ
文豪ヤ、畫家ヤ、著作家ヤ、藝術家等ノ心電的作用上ニ、或ハ世俗
ト俱ニ移化シ得ズトカ、或ハ世潮ニナヅミ得ズトカ、若クハ其
配偶者ニ適セザル等ノモノ多クシテ、或ハ終身的ノ孤立主義
者トナリ、若クハ遂ニ終世獨身生活ヲ爲スモノアルガ如ク、其
不親和のカ、不軟化的カ、將タ又不同化的カ等ノ孤立主義者、否
ナ、電化的作用者デアアルニ因ルカラデアローカト思フノデア
ル。

抑モ余ノ今回著述セシ、斯ノ電素一原説ナル、萬有科學ノ始原
論、其者ノ原理ハ現下ノ科學上ヨリ、之レヲ言フモ、正サニ萬古

不滅、萬世不變ノ者デアロート思フノデアルガ、彼ノ神秘力ヲ蒙ムレルトアル釋迦ヤ、耶蘇ノ宗教主義ニ據レル、靈能的治心法モ、孔子ヤ、そくらてすノ最高等ナル思想ノ道德的、哲學的等ノ治世論モ、俱ニ已ニ數千年ヲ經過シツツアツテ、既ニ今日ノ科學的始原ト相ヒ距タルユト遠ケレバ、人類ノ進化ト、社會ノ變遷等トニ遭遇スレバ、四大聖人ノ治心法モ、治世論モ、尙ホ且ツ變化、動搖ノ點ナキヲ保テ難カルベキノミデハナク、本篇(即チ余ノ萬古不滅、萬世不變ナル萬有科學ノ始原論)ハ現今斯クモ偉大ニ、斯クモ健全ニ、進歩、發達シタル科學界ノ原理、其者ヲ基臺トシテ、發軔シタル者ナルニモ係ハラズ、該ノ萬有ナル科學界ノ根柢ニ對シ、更ニ進デ、其輕重ヲ問ハントスルノデアレバ、余ハ淺學ヲ顧ミルノ違ナク、本篇ニ題スルニ、萬古不滅、萬世

不變ナル萬有科學ノ始原論ヲ以テシ、以テ宇宙間唯一ノ電素說ヲ主張スル所以デアル。

序 言 終。

第二篇 序外ノ記ニ就テ。

余ガ本篇ノ序言中ニ概述シタル、有毒性ニシテ不適當ナル白米ノ常食ニ因リ生起スル中毒病、素人ノ自稱スル脚氣病ヲ含ムト、本邦人ノ常食料ナル不適當ニシテ、勞動的常食料ニ因リ生起スル英吉利斯病ト、現下我が日本國ニ在テ、實ニ空前ノ一般的ナル大猖獗ヲ極メ、最トモ尤大性ニ大流行ヲ爲シツツアル所ノ、三種ナル、花柳病トノ三論說ニ關スル記事ハ、殆ド題辭トモ爲シ得ベキ、僅僅數行ノ記述ニ過ギザレバ、餘人ハ固ヨリ自身ニ於テサイモ、遺憾ト苦痛等トガ交モ到來シツツアルノデアアル、ガ、余ガ該ノ始原論ノ著作上ヨリ、之レヲ觀ル時ハ、業ニ已ニ冗長視シスベキ感ナキ能ハザルニ反シ、其記述ノ凡テハ

余ガ母國ノ近親ナル一般國人、其全部ニ關聯スベキモノナレバ、乃チ余ハ、我が帝國議會ノ決議ニ基キテ、既ニ已ニ四年間ニ亘リ、繼續的ニ研究セラレツツアル、彼ノ脚氣病調査會ノ主腦タル脚氣病、其モノノ説述ニ首メ、現ニ我が邦ノ醫科團ハ、今日ノ如ク、業ニ已ニ無上ナル進歩、發達ヲ爲シタル秋ナルニモ拘ハラズ、實ニ我が邦ノ長久ナル年月ヲ經過シタル今日マデ、殆ド知ラレザリシ英吉利斯病ハ、現在ノ國人間ニ在リ、實ニ非常ノ多大ヲ以テ儼存シ、尤大ナル病害ヲ逞フシツツアル者ナルノミデハナク、彼ノ脚氣ナル白米常食ノ中毒病モ、斯ノらひちすナル英吉利斯病モ、俱ニ我が邦人ノ常食料ガ或ハ有毒性若クハ不適當ナル爲メニ生起スル者デアアルガ、現ニ醫學術ノ特ニ進歩シタリト言フ、我が邦ニ在テ、已ニ四年間モ經過シ、各專

門、大、家、ノ、親、シ、ク、研、究、セ、ラ、レ、ツ、ア、ル、脚、氣、ナ、ル、モ、ハ、余、ノ、論、
 究、上、ニ、於、テ、ハ、却、テ、有、名、無、實、ノ、モ、ト、ナ、ル、ノ、デ、ア、レ、バ、縱、シ、我、
 ガ、帝、國、議、會、ノ、決、議、ニ、基、キ、タ、ル、モ、ノ、ナ、リ、ト、ハ、言、へ、吾、人、ノ、研、究、
 シ、タ、ル、事、實、上、ニ、於、テ、ハ、若、シ、モ、白、米、ノ、中、毒、病、ヲ、以、テ、單、一、ナ、ル、
 脚、氣、病、ト、ハ、ミ、ニ、解、釋、ス、ル、モ、ト、セ、バ、該、ノ、無、識、者、ナ、ル、素、人、自、
 稱、ノ、脚、氣、病、ヨ、リ、モ、現、下、我、邦、ノ、國、情、上、ニ、在、テ、ハ、嘗、テ、數、回、ノ、議、
 會、ニ、於、テ、決、了、セ、ラ、レ、ザ、リ、シ、モ、ニ、シ、テ、而、カ、モ、醜、態、醜、惡、ヲ、極、
 メ、常、識、ヲ、以、テ、ハ、到、底、吾、人、ノ、記、述、シ、得、ザ、ル、所、ナ、ル、彼、ノ、花、柳、病、
 ノ、害、毒、ハ、遙、カ、ニ、尤、大、ナ、ル、慘、毒、ト、災、禍、ト、ナ、我、ガ、一、般、的、國、人、間、
 ニ、流、布、セ、シ、メ、ツ、ツ、ア、ル、者、ナ、レ、バ、余、ハ、敢、テ、之、レ、ヲ、汎、キ、社、會、ノ、
 一、般、人、ニ、告、白、ス、ベ、ク、已、ニ、五、年、前、ニ、筆、ヲ、絶、チ、タ、ル、其、脚、氣、病、否、
 ナ、常、用、白、米、ノ、中、毒、病、ト、ら、ひ、ち、す、ナ、ル、英、吉、利、斯、病、ト、醜、惡、ナ、ル

花柳病トノ三者ニ關スル舊著ヨリ、之レヲ拔萃シテ、余ガ始原
 論ノ序外ノ記ト題シ、茲ニ掲載シタノデアアル。

第一 日本人ノ不適當ナル有毒性ノ常食料甲ト、

不適當ナル勞働的ノ常食料乙トニ因リ生起スル
 病症ニ就テ。

「甲」ハ有名無實ナル素人自稱ノ脚氣病、否ナ常用白米ノ中
 毒病ト、英吉利斯病トデアアル。

思フニ、圍碁上達ノ秘訣ハ對局以外ノ鍊修ニアリトノユトハ、
 嘗テ故本因坊秀榮氏ニ聞キシ所ナルガ、脚氣病ガ白米常食ノ
 中毒病タルベキ原理ノ發見モ、亦却テ病牀以外ノ研究ニアリ
 トノユトト、通シツツアル様デアアル、故ニ余ハ該ノ事實ノ發見
 ニ就テ、先ヅ余ノ觀タル白米常食ノ中毒病素人自稱ノ脚氣ナ

含ム論ヲ公發スベク期待シタノデアツタガ、嘗テヨリ著述シ
 ツツアツタ所ノ、萬有科學ノ始原論ハ章ヲ重ヌルニ隨ヒ、倍マ
 ス多大ノ腦力ヲ要スルコトトナリ、茲ニ於テ微微タル脚氣論、
 否ナ、白米常食ノ中毒病論ノ如キハ、汎キ學界ヨリ之レヲ觀レ
 バ、到底比較シ得ベクモアラザルガ如ク、思ハルルバカリデナ
 ク、畢竟余ガ該ノ新論ノ著作ハ萬有科學ノ始原論デアルカラ、
 人體ノ生理ヤ、病理ヤ、治療方法等及ビ其營養的物質等ニ至ル
 マデ、凡テ醫科ニ關聯スベキモノハ即チ始原論ノ一篇デア
 ルコト、固ヨリ言フマデモナキコトデア
 ル。故ニ脱稿ニ瀕シタ脚
 氣論、否ナ、白米常食ノ中毒病論ヤ、其他ノ多數ナル著作ハ固ヨ
 リ日常ノ職業マデモ、殆ド擧ゲテ、之レヲ放却シ、專バラ本論ナ
 ル始原論ノ記述ニ熱中シタルノデア
 ルガ、殊ニ脚氣ニ關シテ

脚氣ナル病名
 ハ因襲ノ久シ
 キ素人ナル患
 者ノ自稱スル
 モノデア
 ル。

ハ、我邦醫界ノ主腦者タル博士大家ガ、現ニ脚氣病調査會場ニ
 在テ、或ハ討議シ或ハ研究シ、若クハ調査ヲ爲ス等、業ニ已ニ持
 久的ニ鞅掌シツツアレバ、該ノ脚氣病ノ調査ハ最早、其結了ヲ
 告ゲタルヤモ亦知ルベカラザレドモ、兎ニ角余ハ茲ニ、余ノ觀
 タル白米常食ノ中毒病、其者ノ脚氣ニ關スル論究ノ概要ヲ舉
 ゲテ、諸大家ノ參考マデニ述ベテ置コ
 ー。
 然ラバ從前ニ吾人ハ病牀ノ實驗上ヨリ、如何ニ脚氣病ヲ論定
 シタルカト言フニ、從來脚氣患者ノ習慣トシテ、醫診ヲ受クル
 トキハ、通常患者自ラ脚氣ナリト稱シテ、醫診ヲ受クル者ハ十
 中ノ七、八以上ニモ上ルノ常習アツテ、縱シ、醫家ガ之レヲ診察
 スルトシテモ、脚氣ナレバ即チ之レヲ脚氣ト診定シタルナリ。
 斯ノ如クシテ、脚氣病者ノ多數ハ患者ノ自稱シ來レル病名ヲ、

醫師モ亦即チ之レヲ承稱スルユトハ通常ニシテ、且ツ多シトス、例ヘバ、ベールツ先生ノ病牀實驗ヲ首メトシ、しよるべ氏、其他ノ内科専門博士ノ「クリニツク」Klinikニ在テモ、患者ノ多クハ依然トシテ、自ラ脚氣ト稱シテ、其豫診ヲ受ケ、豫診ノ實驗者ハ其病狀ノ脚氣ニ異ナルユトナケレバ、更ニ又之レヲ脚氣トシテ教師ニ申告ス。教師モ亦之レヲ脚氣ト診定スルノ外ナシ。是ニ於テ多クハ始メニ、患者ガ自稱シタ所ノ脚氣ナル病名ハ、儼然タル醫家ノ病牀ニ於テモ、其病名ハ因襲的ニ確定セララルニ至ルユトトナツタモノデアル。

吾人ハ斯ノ如クシテ、脚氣病者ノ數年間ニ亘ル統計表ニ就キ、脚氣ノ初發症狀ト、脚氣ニ尤モ多發シ來レル症候ト、脚氣ノ多發スル時季ト、其自然的ニ減退セル年季ト、脚氣ニ罹リ易スキ

年齢ト、老幼及ビ男女トノ間ニハ、其罹病數ガ著シキ差異アル等トハ細大トナク、之レヲ審査シ、猶ホ且ツ脚氣病ノ多發スル都會ト、或ハ其多發セザル市町ト、或ハ其極メテ稀有ナル各地方ノ宿驛、村落、山上、山間ノ住人等、悉ク之レヲ調査シ、或ハ職業、或ハ大商店、若クハ多人群居等ノユトニ及ビ、凡テ脚氣ニ關聯セル、諸種ノ要項ハ舉ゲテ、之レヲ編纂シ、若クハ調査スルモ、因襲ノ久シキ脚氣病毒ニ魅セラレタル、脚氣患者ノウツツ的、チポロゲ的ナル精神狀態ニヨリ、催眠的即チ余ノ所謂、心電的ノ電流性作用ニ電化セシメラレタル、吾人脚氣研究者ノ頭腦ニハ、已ニ先入主トナリタル脚氣病、其者ノ凡テガ、恰モ潮流ノ如ク、滔滔トシテ、奔流シツツアルカノ如キ狀態ニアレバ、爲メニ脚氣本來ノ發病狀態ハ、之レヲ細研スルニ遑ナカリシ理由モ、

亦蓋シ茲ニ存スルノデハナカローカ、若シ然ラザレバ歐米ニ醫學ヲ修メラレタル、我が邦多數ノ醫師ハ、日常白米ヲ以テ主食トスル、我が國人ノ多大數ニ於テ、既ニ視認シ得ベキモノニシテ、殊ニ余ガ左ニ説述セル諸病症ノ如キハ、彼ノ歐米諸邦ニ在テハ、我が邦人間ニ於ケル如ク、止ダニ未ダ之レヲ實驗セザルモノナルノミデハナク、該ノ諸邦ニ於ケル教師ノ講義ヤ、其病牀ニ於ケル患者ニ就キテノ實修ヤ、其普通ナル醫書中等ニアツテモ、或ハ之レヲ聞キ、若クハ之レヲ發見シ得テカツタユトデアロトト思ハレル、例ヘバ我が日本人ノ如ク、止ダニ蛋白質過少ニシテ、既ニ勞心性ノ常食料ト爲スニハ、不適當ナルノミデハナク、實ニ尤大ナル中毒病ヲ生起セシメツツアル、有害物質ヲ含有スル所ノ白米ハ、近クハ三四百年間ニ亙リ、殆ト一

般的ニ常食料ト爲シツツアツテ、業ニ已ニ其邦人間ノ最大多數ニ亙リ、尤モ汎ク儼存スル病症ガアルノデアアル、茲ニ其例證ヲ舉グレバ即チ

一 日本人ノ有毒性ニシテ不適當ナル常食料ニ因リ、生起スル常習性若クハ頑固性ノ便秘デアアル。

我が邦人間ノ一般ニ亙リ、居恆的常習性ニ便秘スル者非常ニ多ク、殊ニ都會ニ在テハ、頑固性便秘ノ六七日以上ニ亙ル者アルハナンソノ、實ニ二週内外ヲ持續スルモ、猶ホ且ツ之レニ對スル患者ノ病感ハ、殆ド之レナキガ如シト言フニ至テハ、茲ニ余ガ言フマデモナク、歐米ノ學界ニハ、其生理學ヤ、病理學上ニ在テ、未ダ曾テ全然知ラレザル、眞ニ世界的無二ノ、魔界的ナル常習性頑固便秘ト爲シ得

日本人ニ見ル
世界的無二ノ
頑固性便秘。

ベキモノデアル。若シ吾人が該ノ驚クベキ極端ナル頑強性ノ常習便秘ヲ以テ之レヲ歐米人ニ問ハバ該國ノ生理學ヤ病理學上ニハ吾人人體ノ生體上ニ於テ斷シテアリ得ベカラザル病症トナシ以テ一モ二モナク其存在ヲ認メラレザルユトハ余ノ確乎トシテ斷言シ得ル所ナルノミデハナク又我が邦ノ小兒ニハ殆ド之レニ類スル不明的ノ便秘者ガアルノデアル即チ我が邦ノ生後數月内外ナル乳兒ノシカモ自然的ナル實母若クハ乳母ニヨリ授乳セラレツツアル者ナルニモ拘ラズ(歐洲人ノ如ク不充分ナル牛乳ノ不自然的人工的ナル養育ニハアラス)吾人が數シバ實驗シ得ル所ノ白米中毒性兼英吉利斯病性ナル常習性便秘及ビ多汗症等ヲ兼ル者等アツテ其己ニ魔

日本ノ乳兒、
幼兒等ニ見ル
常習性便秘。

日本幼兒ノ常
習便秘モ、歐
洲幼兒ノ石鹼
便秘モ、其發
生原因ハ俱ニ
同一性ノモノ
デアル。

界ノ人トナリ居ル者ガアルノデアル。然ルニ最近歐洲ノ嬰兒若クハ小兒ニ見ル便秘ハ其石鹼的便秘症ナルユトヲ發見セラレ且ツ其治療方法モ發見セラレタルニヨリ之レヲ彼ノ獨逸國大學教授小兒科專門ノ某博士ガ最近ノ革新的大發見ナリト稱贊シテ數月前ニ我が大學教授小兒科專門某博士ノ時事新報紙上ニ報告セラレタル如クデアアルガ余ノ觀ル所ニヨレバ本來我が邦ノ乳兒若クハ小兒等ノ常習性便秘症モ彼ノ歐洲人ノ小兒ニ見ル石鹼的ノ便秘症モ其發生原因ハ俱ニ全然同一性ナル始原病ノ一症候ニ屬スベキモノトナシ得ルノデアアルガ其發生狀態ニ至テハ尙ホ余ガ左ニ記述スル所ノ如ク互ニ其發病ノ狀態ヲ異ニシツツアル者デアアル即チ日本ノ嬰兒

概スルニ日本ノ小兒ノ多クハ、已ニ母體内ニ在テ英吉利斯病ト、白米ノ中毒トニ罹リツツアルノデアアル。

若クハ小兒ハ、母體ノ常食料ガ通常蛋白質過少ノ、不適當ナル勞働食ナルノミナラズ、多クハ、有毒性ナル白米ヲモ、常食シツツアル者ナレバ、其妊期中ニ於ケル胎兒ハ、已ニ母體內ニ在テ、先天性ノらひちすナル英吉利斯病ニ襲ハレツツアルノミデハナク、母體ノ常食料ナル白米ノ中毒ニモ正サニ罹リツツアルノデアレバ、乃チ歐洲人ノ男性胎兒ノ心音ハ、一分間ニ百四十至以内ヲ通常ノ者ト爲シツツアルモノナルニモ拘ラズ、我が邦人間ニ於テ、余ガ普通ノ健康者ナル妊婦ニ就テ、親シク算定シタル所ニ由レバ、僅カニ一ノ徴候ナル男性胎兒ノ心臓音サイモ、通常トシテ一分間ニハ遙カニ百四十至以上、余ガ本邦ノ男性胎兒ニ就テ、其九月、十月、十一月ノ間ニ算シタル心臓音ハ、一分

間ニハ通常百五十至内外、或ハ百七十至内外ヲモ昇降シ居リ、又初生兒ノ七日以降ニ在テ、其熟睡中ナル一分間ノ脈數ハ實ニ百五十至内外ヲモ算シ、數ヶ月間ヲ經過スルモ、尙ホ且ツ其脈數ハ甚ダ多キニ過グルモノデアツタノデアアルヲ算シツツアツタユトモ即チ本邦人ノ胎兒ハ已ニ白米ノ中毒病ニ襲ハレツツアル一ノ證左デアロート思フバカリデハナク、東京市内ノ小兒ハ滿一ケ年ニシテ、漸ク獨歩ヲ始メ得ル者ハ十二對スル一、二ニ止リ、他ノ地方ノ小兒ト雖モ、尙ホ且ツ少數ニ止マルノデアアルガ、或ハ齒牙發生期ノ滿一ケ年ニ及ブ者ヤ、二、三歳稀ニ四歳ニシテ、始メテ獨歩シ得ル者モ、亦數シバ之レヲ見ルノデアアル、又我が邦人ハ年齢六十歳以上ニ至レバ、椎骨炎ナラザ

ルニ、腰ノマガル者ノ尠ナカラザルノデアアルガ、蓋シ是レ等ノ者モ亦不適當ナル常食料ニ因ル脊柱骨ノ骨質軟化病若クハ其軟骨病ノ一症候ト爲シ得ベキモノナラン。然ルニ歐洲人ハ古來概シテ、其常食料ガ多蛋白性ノ勞心食ナレバ、貧者ニアラザル限り、我が邦人ノ如ク、胎生時ノ英吉利斯病者ハ尠ナカルベキニ反シ、其初生兒以後ニ於ケル人工的、不自然性ナル營養法ハ、主トシテ不自然性ノ不適當ナル牛乳ニヨル者多シト聞キシガ、該ノ不適當ナル不自然性ノ常食料ニ因リ、體ノ營養上ニハ却テ不適當ナル障害性作用トナリ、以テらひちすナル英吉利斯病ヲ生起スルニ至ルモノデアロト思フ。

二 日本ノ小兒ノ胎生時代ト、其生後トニ於ケル英吉利斯

病及ビ其便秘症デアアル。

我が邦人ノ常食料ハ、余ガ本篇ニモ略載セシガ如ク、余ノ始原論上ヨリ言フトキハ、固ヨリ蛋白質過少ノ勞働的常食料ナルノミデハナク、實ニ或ル有害性毒分ヲ含有シツツアル白米ヲ、一ケ年間ニ約四千五百萬石乃至五千萬石ヲモ、消費シツツアルノデアアルカラ、本邦人ノ多クハ該ノ有毒性ナル勞働食ヲ常食シツツアルモノト言フモ、過言デハナカロト思フ。

該ノ不適當ナル勞働食ヤ、有毒性ナル勞働食ノ尤大ナル弊害ハ、余ガ尙ホ他ニ説述セル所ノ如クデアツテ、最大多數ノ英吉利斯病者ナルらひちす病者ヲ生起セシムルノデアレバ、本邦人ノ體格ガ矮小ナルユトヤ、體形上ニ異態

者ヲ多生セシメツツアルユト等ハ言フマデモナシ。
 妊婦ガ該ノ有毒性ナル勞働食ヲ常用シツツアルトキハ、
 妊婦ノ自體ハ固ヨリ、胎兒ハ、其妊娠期ノ始メヨリ居恒母
 體內ニ在テ、其害毒ノ有害性作用ヲ蒙リツツ發育スル者
 ナレバ、既ニ己ニ母體內ニ於テ、其胎生時期ノ英吉利斯病
 ニ襲ハレツツアルベキユトハ、眞ニ不可抗的ノ事實トナ
 ルノデアル。

是ヲ於テ本邦ノ嬰兒ハ分娩後ニモ、己ニ病體ナル該ノ母
 乳若クハ乳母乳ニ生育セラルル者トナルノミデハナク、
 該ノ生母モ、乳母モ、俱ニ蛋白質過少ノ勞働食若クハ蛋白
 質過少ノ有毒性ナル白米ヲ常食シツツアルノデアルカ
 ラ、余ハ既ニ此學究上ヨリ先年來妊婦ニ會ヒバ、其診ヲ受

ル者ハ固ヨリ、其他ノ者迄モ、白米食ハ妊期中ヨリ全授乳
 期中モ、之レヲ全廢スベキユトノ必要ヲ切ニ勸告シツツ
 アリシト雖モ、縱シ富家ノ婦人ナリトスルモ、其周圍ノ暗
 黒ナル事情等ニヨリ、恐ラクハ一人モ、余ノ此ノ切ナル忠
 告ヲ實行シ得タル者ハナカリシカト思ハレタノデアル
 カラ、該兒ハ母體內ニ在テモ、分娩後ノ現世ニアツテモ、其
 體ノ發育上ニハ、殆ド不斷的ナル障害性作用ヲ蒙リツツ
 アルユトトナルノデアル。

茲ニ本邦ノ小兒ニハ彼ノ胎生時期ヨリ、既ニ己ニらひち
 すナル英吉利斯病ニ罹リツツアツテ、其生後ニ於テモ、母
 乳ト、乳母乳トガ既述ノ如キ、有害性ノ作用物ヲ含有シツ
 ツアル者ナレバ、吾ガ東京市内ニ見ル所ノ如ク、生後僅カ

一、二ヶ月内外ヨリ早クモ便秘症ヲ生起シ來ル者アルニ至ルノデアル、余ハ是ニ於テ我が邦ノ乳兒ヤ、小兒ヲ始メ、凡ソ白米ヲ常食料ト爲シツツアツテ、其酒客、肉食者若クハ勞働業者ナラザル者ハ男女ヲ問ハズ、殆ド舉ゲテ便秘者ト爲シ得ベケレバ、乃チ東洋病ノ一ナル痔核患者ノ最多數ヲモ、我が邦人間ニ實驗シ得ルバカリデナク、其甫カニ四五歳ナル幼兒ニアツテモ、尙ホ且ツ該ノ外痔核ヲ患ヒツツアル者アルヲ實驗シ得ル所以デアル。

三

日本人ノ最大多數ニ見ル痔核即チいぼチデアル。例ヘバ嘗テ余ガ神戸市ニ在リシトキ、一千三百名ノ十六歳ヨリ三十歳以下ノ婦女ニ就テ、最モ簡單ニ反復檢定シ得タル所ニヨレバ、我が邦人ノ白米常食者ノ中ニハ、百人

中ニ平均七十人ニモ達スベキ、外痔核即チいぼチノ患者(但シ淋毒性ノこんじゆるーむ Condylom ハ之ヲ除ク)アリシヲ實驗シ、又他ニモ外痔核患者ノ夥多ナルユトヲ實驗シツツアルノデアルガ、蓋シ或ル歐洲人ニハ痔核ヲ以テ東洋病ノ一ト爲セシ者アルモ、敢テ過言ニハアラザルヲ了解シ得ベキデアル。

四

我が邦人中ニハ常用白米ノ一中毒性病症トシテ、胃部ノツカヘル病症ニ苦シム者ノ尠ナカラザルノデアル。

五

我が邦人中ニハ常用白米ノ一中毒性胃症アリ、胃腸病ノ専門家ニハ往往ニシテ、之レヲ胃擴張ナリト診斷セラレツツアル者アルモ、常食料中ノ白米ヲ禁除スレバ則チ治シ去ルモノガ鮮ナカラザルノデアル。

六 我ガ邦人中ニハ通常ノ健康體ニシテ、肩ノこり、はる病
 症若クハ體ノだるき病症等ヲ不斷的、常習性ニ患ヒツツ
 アル者極メテ多シ、否ナ殆ド一般的ノモノデアル。顧フニ、
 我ガ邦人ノ一般ガ、嘗テ白米ヲ常用セザル歐米ノ諸國ニ
 ハ、其例類ナキ、不明ノ治療者ナル、無慮十餘萬ノ按摩術者
 ナ、首トシ、針治ヤ、灸治者ニ至ルマデモ、日夜ヲ通シテ、之レ
 ナ、必要視スベク、餘義ナクセラレツツアル所以ノモノハ、
 蓋シ本邦ニハ、白米常食ノ中毒病トシテ、其不明ナル病症
 ガ、尤モ汎ク、全國人ノ間ニ互ツテ、一般的ニ儼存シツツア
 ルニ、因ルカラデアル。縱シ、我ガ日本國ノ醫學術ハ、現ニ無
 上ノ大進歩、大發達ヲ爲シツツアルモノナリト、言ハレツ
 ツアルニシテモ、余ノ尙ホ恐ルルハ、該ノ進歩、發達シツツ

アル醫學術者ノ一團モ、或ハ彼ノ不明ナルだるき等ノ諸
 病症ニ魔セラレツツアルニアラザルナキニアリ。

七 我ガ邦人中ニハ殊ニ普通ノ健康ナル婦女ニシテ、或ハ
 周圍ノ微細ナル狀況ニ感動シ、忽チのぼせるト自稱スル、
 或ル神經性ノ鬱血的病症、數シバ面部ノ一時性充血ヲ伴
 フ者アリ、ニ苦シム者ノ尠ナカラザルノデアル。
 但シ中、壯年ノ男子ニモ、該ノ癖習ニ罹リ易キモノ尠シト
 セズ、蓋シ本症ハ、些細ナル異常ニモ耐ヘ難キ病徵ヲ自覺
 スルニ至ルモノト、ナシ得ベキモノデアル。

八 本邦ノ健康者ニ見ル所ノ不明ノ心跳、例ヘバ特ニ夏季
 ニ於テハ十七、八歳ヨリ二十歳内外ナル健康狀態ノ男女
 ニシテ、不明ノ心悸亢進ニ苦シム者ノ鮮カラザルノデア

ル。是レ亦其原因ハ常用白米ノ中毒症狀ニ屬スル者多シトナシ得ベキモノデアアル。

九 我ガ邦ノ健康者ニ見ル所ノ、歩行状態ノ順調ナラザルモノ、例ヘバ夏季ニ當リ、東京市内ヲ疾走セル人力車夫等ノ歩調ヤ、若シクハ春秋兩季ニ於ケル中學ヤ、小學生徒等ノ、遠足歸途ノ歩調ヲ觀察スルニ、其歩武状態ノ順調ナラザル者ノ非常ニ多數アルハ、容易ニ之レヲ了會シ得ベシ、是レ亦タ常用白米ノ中毒症狀ニ原因スルモノガ多カリト思ハルルバカリデナク、都會ノ住人ハ、余ガ多年間檢定シタル所ニヨレバ、日常市内ヲ往復スル歩行ノ状態ガ、如何ニモ徐緩ニ過グルモソ極メテ過多ナルノコトデア

十 我ガ邦ノ健康ナル少年若クハ壯年男子ニ見ル所ノ、登山半途以上ノ不可能症、例ヘバ我國ノ労働業者ナラザル、健康ナル丁年若クハ壯年男子ノ白米ヲ常食シツツアル者ガ、夏日富士山ニ登躋ヲ試ムル等ノコトアルニ當リ、其半途ニ至リ、所謂強力^{ゴウリキ}ノ扶ケヲ假ルニアラザレバ、其登山ノ目的ヲ達スル能ハザル者尠ナカラズト聞キシガ、是等ハ、其白米常食ノ中毒性ナル病的作用ニヨルベキ者デア

ルコトハ、既ニ余ガ一九〇七年ノ東京「エユ」雜誌ニ略載シタルガ如クデアアル、例ヘバ嘗テ余ト熊本縣下人吉町行ノ、長阪ノ登躋ニ同行セル某ハ、年二十四五歳ニシテ、身長モ、體重モ、遙カニ余ヨリ勝レル偉丈夫ナリシニ、其半途ヨリ登阪不能症ヲ起シ、非常ノ困難ヲ以テ徐歩シツツ、漸ク

ニシテ、人吉町ニ達シタリキ、又余ガ兵庫縣摩耶山ノ登躋ニ同行セシ某モ、體力ハ充分ナル二十餘歳ノ少壯者ナルニモ拘ラズ、已ニ其半腹ニ於テ登山不能トナリ、遂ニ登山ヲ中止セシメシユトモアツタガ、兩者トモ余ノ同僚ニシテ飲酒ヲ好マヌ、強壯ナル偉丈夫デアツタノデアアル。

十一 我ガ邦人ハ健康ナル丁年以上若クハ壯年ノ男子ニシテ、或ル勞働ノ後ニ於テハ、更ニ尤モ必要ナル、最後ノ大活動力ヲ發揮スルユトノ、不可能ナル状態ニ陥リ易キユト、例ヘバ戰鬪ニ於テ層一層ノ突撃ヲ要スルニ當リ、尤モ必要ナル、最後ノ大活動力ヲ發揮スルユトノ不可能トナル者ノ多數アルハ、恰モ彼ノ登山半途ノ不可能者ト同様ニ、全然病的ノ作用ニ外ナラザレバ、余ガ一九〇七年ニ、露國

ノ名將くろばときん將軍ノ日露戰評中、其日本軍ノ弱點ヲ指摘シタル者ニ對シテ、更ニ其解釋的ノ反論ヲ東京「エユ」雜誌ニ、同記者ノ切望ニ應ジテ、略載シタル所ノ如クデアアル。

十二 我ガ邦ノ丁年以内ノ健康ナル、白米常用ノ學生ガ長距離ノ疾走競争、遠距離ノ徒歩競争等ヲナスニ當リ、其半途ニ落伍シテ、遂ニ競走不可能ニ陥ル者アルハ、尠ナカラザルノデアアル、例ヘバ一九〇六年頃ニ東京市内ノ或ル中學生徒ノ一團ガ、其郊外ニ於テ疾走早着競争ヲ試ミタルトキ、其數學生ハ半途ニ倒レ、或ハ草叢若クハ藪中ニ横臥シ、胸中ノ苦悶ヤ、心跳(心悸亢進)等ニ苦シミ居リシ等ノユトハ、當時某新聞ニ記載セラレシ所ノ如クデアアル。

十三 一九〇八年盛夏ノ頃ニ各地兵士ノ疾走行軍中、稍ヤ多
 數ナル日射病者ヲ出シタルハ、當時ノ新聞紙上ニ數回報
 道セラレタル事實ナルガ、該病ノ發生原因ハ單ニ高熱日
 射ノ爲メノミデハナク、平素ニ於ル常用ノ白米毒(縱シ一
 部ノ白米食ニモセヨ)ガ、已ニ或ル度ノ有害性作用ニヨリ
 筋質、神經、心臟、最小血管等ヲ侵シツツアルニ乘ジ、更ニ炎
 天ヲ冒シテ過勞セシ爲メニ、筋質ハ勞働困難トナリ、遂ニ
 心臟麻痺的ノ急變等ヲ驀發スルニ至ツタ者デアローカ
 ト思フノデアアル。

十四 一九〇一年頃ニ、東京時事新報社ハ懸賞ニヨリ、上野不
 忍池畔ノ環狀徒歩ノ早着競争ヲ開催シタル時、其速度ハ
 一時間平均、我が二里以上ヲ要シ、恰モ綱引二人ノ人力車

夫ガ田舎道ヲ疾驅スル速力以上ヲ持續スルニ、等シカル
 ベキ者デアツタガ、遺憾ナノハ、其決勝不明ニ了ツタノデ
 アツタ。又一八九一年頃ニ、或ル外國人ノ相互間ニ開催セ
 ル、西京發、大阪經由、神戸着(約二十三里アリ)ノ徒歩早着競
 争ニ當リ、其西ノ宮町以西ニ於テ已ニ落伍セル者、二三名
 程モアリシトノコトデアツタガ、約十時間ニシテ終了シ、
 其優勝者ヲ出シタル時トハ、非常ニ大懸隔ノナカリシ場
 合ノモノデアローカト思ハレタノデアアル。

乙「ハ不適當ナル勞働性ノ常食料ニ因リ生起スルらひち
 すナル英吉利斯病デアアル。

不適當ナル勞働性ノ常食料ニ因リ生起スル、我が邦人
 ノらひちすナル英吉利斯病ニ就テ、Rachitis らひちす、

佝僂病、*Englische Krankheit* 英吉利斯病、又 *gleich, auch eine Krankheit des Weizens* 穀類ノ常食ニヨリ生起スル病症ト

モ言フ。

凡テ我が邦人ノ如ク、蛋白質ノ過少ナル、有毒性白米ノ常食ヤ、或ハ不適當ナル、勞働的食料ノ穀物類ヤ、若クハ芋類等ノ如キ、不適當ナル食料品等ヲ常用シ、若クハ凡テ不適當ナル食品ヲ常用シ、少量ナル味噌ノ汁ヤ、魚肉杯ヲ兼食スル等、其常食料中ニ蛋白質性分ノ過少ナルトキハ、體ノ營養的ナル弊害性作用トシテ、其體質上ニハ或ル種ノ疾病、殊ニ英吉利斯病ナル佝僂病ヤ、或ハ極端性ナル骨質軟化病等ヲモ生起シ得ベキノミデハナク、尙ホ他ニ梅毒ノ遺傳的素因ヤ、輕性ニシテ頗ル緩慢ナル經過ノ結核病等

モ、關係スベキデアルカラ、例ヘバ吾人人體ノ胎生時期、若クハ其小兒時期ニ在テハ、爲メニらひちすナル *Rhachitis*

佝僂病即チ英吉利斯病 *Englische Krankheit* ニ罹リ易シトス、故ニ我が邦人ノ、蛋白質過少ノ、不適當ナル常食料ヤ、有毒性ナル白米ヲ常食シツツアル小兒時期ニハ、吾人が單ニ一瞥シタバカリデサイモ、既ニ該病ノ爲メ、其頭蓋骨性ノ變形ヤ、鼻梁骨ノ發育不全ナル低鼻者ヤ、貧血性ヤ、營養不良等ヲ認識シ得ルユト非常ニ夥多ナリトス、然ルニ我が邦ニ於ケル多數ナル各醫學校ノ教授ヤ、専門學者モ、未ダ該ノ多大數ヲ以テ我が國人間ニ儼存スル英吉利斯病者ヲ認識スルニ至ラズシテ、長ヘニ今日マデモ、之レヲ觀過シ居ルハ、如何ニモ奇怪、否チ、遺憾千萬ナルユトデアル

(傳聞スル所ニヨレバ、我が日本國ニ於ケル從來ノ博士申請ノ論文中ニハ、斯ノ如キ重大ニシテ、且ツ廣汎ナルモノハナキヨロデアレバ、設シ初學者ナルモ、我が日本國ニ於ケル該ノ英吉利斯病論ノミヲ以テ學位ヲ申請スレバ、彼ノ特ニ變動シ易スキ小兒ノ營養法ヤ、大腸菌等ノ如キ、狹小、淺薄ナル論說ヲ羅列シタルモノヨリモ、却テ博士學位ノ申請論文ニ適當シ得ベキモノデハナカローカト思ハレル)ガ、我が邦人ニ見ル、該ノ英吉利斯病ナル病症ノ一部ガ輕性ナルモノ多シト、恩師べるつ先生ノ、我が邦人間ニ多大數ヲ以テ儼存スル、該ノ英吉利斯病ヲ發見セザリシトニ、由ルモノデハナカローカ(余ガ一八八七年頃ノ鹿兒島醫學校ヲ首メトシ、神戸病院ヤ、一八九三年頃ノ第四金

澤醫學部等ノ同僚、殊ニ學生諸氏ハ、當時余ガ日本人ニ關スル英吉利斯病ノ講話ヲ爲セシユトハ、今モ尙ホ腦裏ニ留リ居ルユトデアロト思フ。

余ハ左ニ、内科専門教授べるつ博士、小兒科専門教授三輪信太郎博士、内科専門教授井上善次郎博士、外科殊ニ骨病學専門大學教授田代義徳博士等ノ最近ノ著書ニ就テ、該ノ我が邦人間ニハ長ラク知ラレザリシ、らひちすナル英吉利斯病ニ關スル、各博士ノ意見ヲ參照スレバ、不謹慎ナガラ左ノ如クデアアル即

日本人ニ見ル佝僂病、らひちす *Rhachitis* 又英吉利斯病 *Englische Krankheit* ニ就テ諸博士ノ說及ビ余ノ論說。

一 一九〇一年べるつ博士内科學ノ佝僂病又英國病。

日本ニ於テハ幸ニ殆ド絶無ト稱シテ可ナリ、然レドモ日本上流社會ノ小兒ニハ胸廓ノ薄弱ナル者甚ダ多ク、其結果ハ本症ト同一ナリ(肺病篇絞胸 *Schnuerbrust* ノ項ヲ參考スベシ)、又極メテ貧困ナル地方ノ小兒ヲ視ルニ多クノ點ニ於テ英國病ニ相似タル所ノ疾病即チ脾疝ニ罹ルモノ多シト言フノデアアル。

二 一九〇八年醫學大辭書中、小兒科專門教授博士三輪信太郎氏ノ佝僂病。

我ガ日本ニテハ古來殆ド絶無ノ疾患トセラレタルモ、明治三十九年(一九〇六年)初夏富山縣、石川縣ニ於ケル地方的流行ニ際シ、多數ノ患者ヲ出シタルヨリ漸次諸方ヨリ發見セラレ、今ヤ北海道、佐渡、北陸道各國及ビ九州、臺灣ニ

モ其存在ヲ報ゼラルルニ至レリト、言フノデアアル。

三 一九〇九年井上博士内科新書ノ佝僂病。

從來本邦(日本)ニハ本病ヲ見ルコト甚ダ稀ナリトノ說アリシモ、近來其報告アリ、殊ニ富山縣氷見郡及ビ石川縣羽咋郡ニ於テハ、本病地方病性ニ流行スト、言フノデアアル。

余ハ本來らひちすナル英吉利斯病ニ關シテハ、現時ニ於ケル世界的醫界ノ、一般ナル學說ニ就テモ、其或ル部ハ、之レヲ承認シ難キ所アルノデアアルガ、又我ガ邦醫界ノ英吉利斯病ニ關スル概觀ハ、既述ノ如クデアアルカラ、我ガ邦人間ニハ、既ニ該病ニ關スル學術上ノ研究ガ缺乏シツツアルコトハ、事實デアロトト思フ、乃チ我ガ醫界間ニ觀ル該ハ奇怪ナル現象ハ、尙ホ更ニ意外千萬ナル事實ヲシテ、續

出、セ、シ、ム、ベ、キ、淵、源、ト、ナ、リ、得、ベ、ケ、レ、バ、茲ニ去ル明治三十
九年(西曆一九〇六年)ニハ彼ノ富山縣下ニ於テ、或ル一種
ノ奇病ガ殆ド蒸發的ニ實現シタリトノ飛報ノ傳ハルヤ、
我ガ醫界ハ時ナラズモ俄然色メキテ、恰モ沸議騷然タル
ノ狀勢ヲ呈シ、西ヨリモ、東ヨリモ、南ヨリモ、或ハ官命ヲ帶
ビテ該縣ニ赴キ、若クハ篤志家ノ私行等アツテ、多數ノ學
者ハ殆ド一齊的ニ富山縣下ニ集合シタノデアレバ、時ナ
ラズモ、當時ノ諸新聞紙上ニ奇花ヲ咲シメタリキ、而シテ
該ノ奇病ハ當時専門博士連ノ檢定上ニ、メヅラシクモ、重
症ノらひちすナル英吉利斯病ノ患者ト、骨質軟化病 Osteo-
malacia = die Knochen-erweichung ノ患者トデアルトノユトデア
ツタガ、如何ニモ骨質軟化病ト英吉利斯病トノ比較的多

數ノ患者、然カモ其重症者ヲ限局セル一小地方ニ於テ、同
時ニ數多ヲ生起シタリト言フノデアレバ、眞ニ學術上ノ
奇偶デアツテ、其珍重スベキユトハ固ヨリ言フマデモナ
シ、ナレド本邦ニテ、此ノ學界上ニ頗ル有益ナル珍奇ノ發
見アルト同時ニ、らひちすナル英吉利斯病ガ茲ニ始メテ
發見セラレタルカ、否ナ、遭遇セラレタルカノ如キ、頗ル珍
妙ナル現象ノ我ガ醫界ニ傳説セラレタノハ事實デアツ
タ。

本邦ニ於テ英吉利斯病ノ發見ノ序幕ハ仍ホ未ダ了ラザ
ルニ、山梨縣下、其他ニ於テモ、彼ノ富山縣下ニ發現セル奇
病ト、同種ノ患者ヲ發見セシ等ノ報道者アリ、續テ或ル東
北地方、ヨリモ、該ノ奇病ト同種ノ疾病ヲ發見セリトノ報

道ガ止ダニ新聞雜誌上等ニ現ハルルユトトナリタルバ
 カリデハナク猶ホ是レヨリモ數年前ニ岡山専門醫學校
 病理解剖學教授桂田博士ハ其専門ナル病理的發見上ヨ
 リ日本人ニモ病理解剖上ノ檢索ニハ英吉利斯病ノ患者
 アリトノユトヲ報道シタヨ一ニ記憶シテ居ルガ兎ニ角
 是レ等數種ノ英吉利斯病ニ係レル報道ハ即チ該病ガ我
 ガ日本人間ニモ存在シツツアルベキユトノ證左ヲ示セ
 ルモノニシテ余ハ嚮キニ一八八七年ノ頃ヨリ鹿兒島醫
 學校ヲ首メ神戸病院ヤ金澤醫學部ノ講演等ニ於テ本邦
 人中ニハ多敷ノ英吉利斯病患者ヲ存在スルユトヲ述
 ベタルニ今ハ又タ之レヲ布衍スルニ過ギザル論說ヲ吐
 露スルユトトナルノデアアル。

思フニらひちす病ハ我が邦ノ可憐ナル幼少者ノ最大多
 數ニ互ツテ存在シ其病性ハ縱シ我が邦ニ在テハ其多ク
 ガ輕症ナル者ト爲シ得ルニモセヨ我が邦醫界ノ學者ハ
 従前ニ於テ殆ド凡テ之レヲ觀過シツツアツタヨ一デア
 ルガ余ノ觀タル我が邦ノ英吉利斯病患者ニ於ケル其病
 性ハ既述ノ如ク或ハ早ク既ニ其胎生時代ニ生起シ若ク
 ハ生後ニ發生スル者アツテ其病性ノ經過ハ通常長ク數
 年間以外約五六年内外或ハ其レ以上ニモ互リ經過スベ
 キモノデアアルカラ該ノ罹病者ガ止ダニ其病中ニアツテ
 病弱性ナルバカリデハナク其體質上ニハ將來ニモ儼存
 スベキ或ル有害性ノ變化ヲ遺留シツツアツテ遂ニハ其
 終身ニモ互ルベキ孱弱性ノ體質ヤ矮身者ヤ短脚者ヤ低

鼻者等ノ異態ニ陥ラシムルユトガ、尠カラザルノデアアル
 カラ、今日ノ如ク、既ニ己ニ新進ノ機運ニ際會シツツアル、
 我が邦ノ大勢ハ尙ホ更ニ其大發展ヲ渴望シツツアルノ
 秋ニアタリ、一般國人ノ大奮勵ヲ要スベキハ言フマデモ
 ナク、狭小ナル醫科團ノ吾人モ、固ヨリ各ノ其専門的ノ技
 倆ヲ振ヒ以テ國民ノ義務ト責任トヲ盡サネバナラヌコ
 トハ當然デアアル、然ルニ從來我が國內ニハ尤モ汎ク邦人
 間ニ浸潤シツツアツテ、未ダ容易ニ拔ク能ハザル、國人病
 的ノ有害性作用ヲ逞フシツツアル者ガアルノデアツテ、
 然カモ其多クハ充分ニ豫防シ得ベキ病性ヲ有スルモノ
 デアル、是レ即チ不適當ナル常食料ヨリ生起スルらひち
 すナル、英吉利斯病ヤ、素人自稱ノ脚氣病、否ナ、白米常食ノ

中毒病ヤ、世界的無類ニ空前性ノ大流行ヲ爲シツツアル
 花柳病等デアアルガ、吾人醫家ハ人間ヨリ其減退センコ
 トヲ計リ、且ツ其工夫ヲ凝ラスベキ任務ト責任トヲ有ス
 ルニモ拘ラズ、殆ド之レヲ放任シツツアルカノ如クニテ、
 終ニ今日ノ狀勢ニ至ラシムルハ、實ニ慚愧ノ極ト言フベ
 キデアロー。

特ニ該ノらひちす病ニ關シテハ、我が東京市内、何レノ區
 内ニセヨ、若シ吾人が百名ノ幼少者ヲ一瞥シ得ルユトト
 セバ、止ダ一目ノ下ニアツテ、其らひちす病ノ徵候アル者
 ハ、即時ニモ、或ル數ヲ指摘シ得ベキデアロート思ハレル
 ノデアアル、故ニ若シ之レヲ知ラントスルニモ、敢テ醫學者
 ヤ、専門學者ヤ、實地家ヤ、若クハ小兒病專門家等、日日數十

名以上ノ小兒病患者ヲ診療シツツアル、専門大家ノ爛眼ヲ待ツノ必要ハナキ者ナルニモ拘ハラズ、我が邦人ハ恬トシテ今日マデ之レヲ觀過シツツアリシニ偶然ニモ富山縣下ノ一小局部ニ於テ特ニ非常的ナル極端性不良ノ常食料ニ因ル重症ノらひちす病者ト其姊妹的ナル病性ヲ有スル所ノ骨質軟化性ノ病者トヲ續出セシニ因リ、茲ニ始メテ我が日本人ニモらひちすナル英吉利斯病者アリト唱道スルニ至リタルハ眞ニ慨歎痛恨ノ極デアアル。

吾人ハ固ヨリ該病ニ關シテ専門的ノ智識ハナク、又小兒病専門醫ニアラザルモ、我が邦人ノ該病ニ於ケル狀況如何ハ嘗テ討究セシエトアリシガ、らひちす病ガ如何ニ我が邦人間ニ尤モ多大數ヲ以テ汎布シ、且ツ其有害ナル作

用ヲ逞フシツツアルカハ、吾人が嘗テ視認シタル所デア、ルカラ、乃チ其例證ヲ舉ゲテ其概略ヲ説述シタノデアアル。

本來らひちす病ナルモノハ、今日ノ學術界ニ於テハ通常之レチ一種ノ小兒病ト爲シテ、特ニ重視シツツアルモ、其遺留セラレタル病的變化ノ實況ヨリセバ、決シテ小兒時期ノ體質上ノミニ、特リ其有害性作用ヲ逞フシ得ルノミデハナク、實ニ大人時期ニ至リ、却テ其體質上ニ於テ長ヘニ遺留セラレツツアル、其障害性ノ作用アル者ト爲シ得ベキデアアル、例ヘバ婦女ニ在テハ、其難産ノ一原因トモナルベキ、骨盤ノ變形的狹窄等ヲ遺留シ、以テ自在性ナルベキ産道ニ不慮ノ難關ヲ築キ、以テ將來ニ起リ得ベキ、産道性難産ノ一原因トナリ得ルユトアルガ如キハ、即チ古來

歐洲ノ醫界ニ知ラレタル事實デアルガ、特ニ我が邦ノ如ク、有毒性ナル白米ヤ、他ノ穀物ヤ、野菜等ノ如キ、蛋白質過少ノ不適當ナル勞働食ヲ常用シツツアル者即チ該ノ國人間ニ在テハ、既ニ已ニ或ル種ノ障害的不良性作用ヲシテ母體ノ營養上ヤ、體質上等ニ於テ生起セシメツツアルノデアレバ、余ハ該ノ既ニ不良性ナル母體內ニ胚胎セル胎兒ニ關シ、其胎生時期ニ生起スルらひちす病ヤ、其病的變化ヤ、又該兒ノ產生後ニ於テ、其先天性ナルらひちす病ノ幼少期ニ經過スベキ病狀性質等ハ言フ迄モナク、其病的變化ノ障害性作用等ハ更ニ之レヲ吾人ノ大人期ニモ及ボシ得ベキデアレバ、唯ダニ我が邦人ノミデハナク、凡ソ有毒性ナル白米ヤ、不適當ナル勞働食ヲ常用シツツア

ル者ニハ、該ノらひちす病ナル英吉利斯病ガ、吾人人體上ニ對シテ、如何ニ尤大ナル國人病的ノ大災害ヲ醸生セシメツツアルカノユトニ就テ、余ハ少シク之レヲ陳ベテ見ヨ。

甲 蛋白質過少ノ不適當ナル勞働食例ヘバ主トシテいも類ヤ、麥類ヤ、他ノ雜穀等ヲ以テ常食料ト爲シツツアル者等ノ如シハ、吾人人體ノ胎生時期ヨリ幼少時期ニ亙ル、其發育上ニ蛋白質燐ヤ、石灰ヤ、鐵分等ノ不足ナル爲メ、茲ニ其體內ニ於ケル骨質ノ發育上等ニ於テ、一種變態的ナル有害性ノ發育作用ヲ誘致スルニ至リ、以テらひちす病ナル英吉利斯病ヲ生起スル者等ノ如シ。

乙 該ノ蛋白質過少ノ不適當ナル勞働食ナルニ、尙ホ且ツ

有毒性ナル物質ヲ含有スル白米ヲ常食スルモノニ在テハ即チ英吉利斯病ト、白米常食ノ中毒病(有名無實ナル素人自稱ノ脚氣病ヲモ含ム)トヲ併發シ來ルユトナルノデアル。

丙 該ノ英吉利斯病ハ、概シテ寒國ニ強性ニシテ、暖國ニハ弱性ナルモ、常用白米ノ中毒病ハ、寒候ニハ其病性弱度ナルモ、暖候ニハ増症シ、且ツ熱帶地方ニハ特ニ重劇症狀ヲ生起シ易キ、恆性アルモノト爲シ得ベキデアル。

丁 不適當ナル常食料ニ因ツテ生起スベキ英吉利斯病モ、有毒性ナル白米ノ常食ニ因ツテ生起スル中毒病モ、俱ニ適度ノ蛋白質即チ肉食等ヲ常用スル者、若クハ日常ニ勞働ノ多キ者(幼者ハ年年ニ多動者トナリ、又勞働者ハ消化

作用良ク、大便通毎日アリ易キ等ノ爲メ)等ニ在テハ、前者ナル英吉利斯病ニ起ル、其病症ヲシテ、或ハ輕減セシメ、若クハ治癒セシメ得ベク、又後者ナル白米ノ中毒病ニ對シテモ、或ハ其病症ヲ輕減セシメツツアルモノアルヲ尠シテモ、但シ兵士ヤ、學生等ニ見ル所ノ如ク、急劇性ナル一時的ノ過劇性ナル過勞ハ、却テ潜在性ナル白米常食性ノ中毒症狀ヲシテ、頓ニ増症セシムルノ恆性ヲ有シツツアルノデアル。

一 凡ソ人類ガ母體內ニ在テ、其胎生時ニ生起シタル先天性らひちす病ノ病機ト、其遺留スベキ變化等トハ、其生後ニ於ケル後天性ノ乳兒時期ニ始マリ、其幼兒時期ヨリ成人時期ニ達スルモ、尙ホ且ツ儼存スルノミデナク、實ニ其

終身ニ及ブマデ持續的ニ、或ハ殆ド自體性ノ遺傳的作用トモナリ、其骨質的ノ異形ヤ、畸形ヤ、異態若クハ皮質ヤ、頭髮爪等ノ不良等ヲ以テ、其ママニ成人シテ存在シツツアル變化ト爲シ得ベキモノデアレバ、此ノ場合ニ在テハ妊娠セル母體ガ彼ノ不適當ナル勞働食ヤ、有毒性ナル白米ノ常食等ニヨリ、其惡影響ヲ胎兒體ノ發育上、殊ニ其軟骨ヤ、骨質ヤ、或ハ皮質ヤ、頭髮ヤ、爪等ニ及ボシタル者ナレバ、玆ニ其著明ナル例證ヲ舉グレバ即チ左記ノ如クデアアル。

該ノ不良性作用ノ爲メニ、胎兒ノ鼻梁骨ハ發育不全トナリ、終身鼻梁ノ低キ低鼻者(親子間ノ遺傳ニハアラズ)トナルノデアレバ、特ニ我ガ邦ノ川柳ニ「かんなにてけつられたるか下女の鼻」トノ句アル所以デアツテ、或ハ耳形ノ異

該ノ句ハ多數アル、可憐ナル若年下女ノ生育セシ、其常食料ノ如何ヲモ、之レヲ暗示セル名句ト言ヒ得ベキデアアル。

態、若クハ小形ナル者、或ハ體軀ノ矮小ナル者、或ハ雙手ノ第五指、若クハ雙足ノ第五趾ノ異態的ニ短形ナル者、或ハ雙手ノ小指ヤ、左右足趾ノ小趾等ノ内側ニ變彎スル者、左右拇趾ノ短ナル者、左右下腿ノ内彎(若クハ外彎)スル者、若クハ椎骨炎ナラザルニ、脊柱ノ變彎スル者、四肢殊ニ雙下肢ノ畸形的ニ短ナル者、是レべるつ博士ノ所謂世界的無二ナル日本人ノ長胴短脚者ナルモ、其實ハ胴部ノ常態ニシテ、雙下肢ノらひちす病性ニ短形トナリタル者ナノデアアル)等ニシテ、縱シ、又學術上ニハ骨質ナラザルモ、全皮膚質ヤ、頭髮ヤ、爪等ノ不良性ナル者ヤ、齒列ノ不正ヤ、齒質ノ不良ナル者等ハ、通常トシテ父及ビ母體ノ其レニ關係セザレバ、寧ロ先天性ナル胎生時ニ生成シタル皮質自家ノ

不良質ナルト、其顎骨及ビ齒牙發生ノ牙胞トガ、已ニ不良ナルカ。若クハ生後ノ常食料ガ不適當ナルニモセヨ、是レ正サニ、不適當ニシテ、有害性ナル常食料ニ原因スル英吉利斯病性若クハ營養障害的ノ者ト爲シ得ベキデアル。

二 凡ソ人體ノ胎生時ニ在テハ妊婦ノ不適當ナル常食料若クハ初生兒以後ノ乳兒期ヨリ、五六歳ニ至ルノ間ニ於テハ有毒性ナル白米ノ常食ヤ、不適當ナル勞働食ヲ常用スル母乳、或ハ乳母ノ乳、若クハ人工的ニ不自然性ナル食鹽加入ノ生牛乳、或ハ煉乳、又古來我が邦人間ニ行ハレツツアツテ、其最モ甚ダシキ者ニアツテハ、砂糖ト食鹽トヲ加味セル、道明寺、どうみやうじ汁ヤ、米汁杯ヤ、白米食等ヲ常用セシヤラレツツアル者ガ、茲ニ不適當ナル常食料ノ

悪影響ニ因リ、或ハ胎生時ノ先天性ラひちす病ヲ増症シ、若クハ生後ニ在テ、後天性ラひちす病ヲ生起スルニ至リタル者ト爲シ得ベキ者ノミデハナク、設シ成人ナリトスルモ、特ニ粗悪ナル不適當ノ常食料ヲ持續スルノ止ヲ得ザル場合ニ在テハ即チ去ル明治三十九年(一九〇六年)ニ我が富山縣下ニ於テ、彼ノ極端ナル英吉利斯病者ト同時ニ於テ、尤モ慘悲ノ極ナル、其姊妹病タルベキ骨質ノ軟化病 Osteo-malacia 者ヲモ發現スルニ至リタル所以トナルノデアアルガ、茲ニ我が日本國ニ在テ、是レ等ノ病症ノ最モ多數アル者ヲ舉グレバ、左記ノ如クデアル。

頭蓋骨ノ異形若クハ過大ナルモノ、額部ノ異常ニ突出スル者、顴骨部ノ異常ニ隆起スル者(即チほうぼねノ高キ者

ニシテ、あいなぬ人種ノ重顴骨者ヲ言フニハアラズ、下顎部即チ頤部ノ過長ナル者、若クハ前方ニ突出スルモノ、顔面ノしやくれタル者、男子ニシテ、其身長ノ五尺五寸以下ナル者ナルノミデハナク、實ニ五尺未滿ナル異例ノ矮身者ハ極メテ多大數ナシテアル、下肢ノ異常ニ短キ者、俗語ニ所謂、出ちり、若クハ棚ちりト稱セラルル者、そつ齒、てつ齒、若クハ齒列ノ不正ナルモノ、齒質ノ不良ナルモノ(本邦ニ齒科醫ノ流行スル所以デアル)、世界的無二ノ多大數ナル鼻たらし者(本邦ニハ特ニ耳鼻咽喉専門醫ノ流行シツツアル所以デアル)、皮質ノ不良ニシテ、或ハさめはだ(鮫膚)トモ稱セラルル者、脊柱ノ變形的作用ヤ、特ニ婦女ニ在テ注意ヲ要スル骨盤ノ變形、若クハ其産道ニ變化ヲ生起スル

鼻たらし等ノ鼻病者ト、咽頭病者ノ一部中ニハ、其結核菌ヲ發見シ得ルニヨリ即チ初期ノ結核病者モアルノデアル。

日本ノ婦女ニハ骨盤ノ變形ノ強度ナルモノハ少シ。

者ヤ、生後滿一ケ年ニハ通常起立シ得ベキノミデハナク、實ニ獨歩ヲ學ビ得ベキ幼兒モ、生後ノ十五、六ケ月以上、或ハ二三歳ニシテ、始メテ獨歩シ得ルニ至ル者モアルノデアル。

三 余ハ是ニ於テらひちす病ト、其鼻たらし病トガ更ニ結核病ニモ關聯スル所アルヲ認ムレバ、少シク之レヲ述ベテ置ユ。

既述ノ如ク、不適當ナル勞働食ヤ、有毒性ナル白米食ニ生活シツツアル國人ハ、眞ニ驚クニ耐ヘタル多大數ノ、らひちす病性ノ體質不良(結核病ニ罹リ易キ)ノモノヲ生起セシメツツアルノデアレバ、該ノ體質不良者ノ多クハ即チ虛弱者ニシテ、特ニ感冒性作用ニ侵害サレ易キニヨリ、其

馬關ヤ、廣島
市等ニモ行ケ
リ。

古來ノ結核病
及ビ其病性。

幼少時代ニ於ケル多數ハ、殆ド止ダニ常習的ニ鼻涕ヲ漏
流シツツアルバカリデハナク、該ノ體質不良ノ虛弱者ハ
種種ナル輕性ノ結核病ニモ感染シ易ク、且ツ發病シ易シ
トス、余ハ先キニ一八九〇年ヨリ、一八九三年ノ在神戸中
ニ、結核病ニ關シテ、備前ノ岡山ヤ、京都、大阪、奈良等ヲ首メ
トシ、東京近縣ニ在テ、殆ド常住ナキ乞食ノ健否ヲ視察セ
シユト數回ニ及ビシガ、恒ニ多動ナル彼レ等ニハ、却テ結
核病的ナル病弱者ノ觀ヲ呈シツツアル者ガ尠ナカツタ
ノデアツタ、是ヲ以テ特ニ都會ヤ、市町等ニハ輕性ナル結
核病者モ亦驚クベキ多大數ヲ以テ儼存シツツアルノデ
アルガ、元來結核病ノ流行性慘害ハ有史以降、約五千年ヲ
經過シタル今日ニ至リ、其長久ナル年月ノ間ニ在テモ、彼

結核病ノ自
癒。

ノ一時的ニ極メテ猛烈ナル大慘害ヲ生起スルベすと病、
痘瘡、これら病等ノ如クナラズシテ、實ニ不斷性ノ、一樣的
ナル最大流行ヲ逞フシツツアルノデアアルカラ、結核病ノ
大流行ハベすと病ヤ、痘瘡ヤ、これら病等ノ大流行ガ人類
ノ死亡數統計上ニ在テ、一時的ニ最高度ノ波狀線ノヲ爲
スコトアルニ反シテ、通常最高位ノ地平線一ヲ畫キツツ
アツタノデアアル。余ハ是ヲ以テ一八九二年ノ、拙著ノ肺結
核ノ豫防論、殊ニ其改正結核病豫防論ニモ説述シ置ケル
如ク、結核病ハ實ニ山上、山間、村落、島嶼等ヲ問ハズ、凡ソ人
類ノ居住スル所ニハ便チ隨從シ至ツテ、更ニ傳播シ得ベ
キ、獐猛ニシテ、極惡ナル病性ヲ有シツツアルノデアアルガ、
其初發シ來ル病狀ハ反テ極メテ輕易性ニ、尤モ緩慢的ニ

余ノ治療セル
患者ニアラ
ズ。

概スルニ結核
病者、特ニ肺
結核ノ患者ニ
在テハ、其發
見シヤスキ面
皮ノ帶黃色ニ
注意スベシ。

經過シ、或ハ自癒シツツアル者モ尠ナカラザルノデア
ルガ、或ハ疲瘦シ、若クハ貧血セル等ノ状態ヲ以テ、頗ル慢性
ノ經過ヲ爲シツツアル者モ、極メテ多數アルノデア
ルガ、又尤モ急劇的ノ最悪性ニ經過スベキ結核患者ニシテ、初
發ノ熱度ハ尙ホ低度ナリシ爲メ、家外ノ業務ニモ從事シ
ツツアリシ者ナルニモ拘ラズ、彼ノ最初ノつべるくりん
ノ治驗ニ報告セラレタル者ノアルガ如ク、膿黃色ナラザ
ル、眞黃色ノ喀痰アル者ハ(恐ラクハ人工培養ノ結核菌ノ
中毒者ニモ見ルモノナランカ)、止ダニ強熱ナル悪性經過
ヲ爲シテ、汎ク肺ヤ、胃腸等ヲ急劇性ニ侵害スルノミデハ
ナク、實ニ吾人治療業者ノ尤モ稀有ニ見ルモノナルベキ、
左右ノ皮下前股靜脈等ノ栓塞即チとろんぼすヲモ生起

千五百餘年前
ノ支那ノ亞聖
孟子モ、人ハ
六十歳ニ至レ
バ、體温ヲ肉
食ニトレト、
言ハレテ居ル
ノデア
ル。

該ノ通路ハ同
市内ノ最モ繁
華ナル所デ、
一日間ニハ約
三四萬人モ往

スル等ニ至ル者モアルノデア
ル。又余ハ一八八五年ト、一
八八九年トノ間ニ於テ、數回九州地方ニ渡航セシトキ、冬
季ニ於テ各種ノ船客中ニ咳嗽スル者ヲ統計セシユト數
回ニ及ビシガ、其百人中ニ六十人以上ノ多キヲ算シ得タ
ル等ノユトモアツタガ、冬季ニ在テ特ニ感冒シ易キ者ハ、
獨リらひちす性ノ幼少者ノミデハナク、或ハ殆ド一般的
デハナカローカト思ハレタノデア
ツタ。又余ハ或ル市内ニ居住中、市内ニ肺病者ノ多キノミナラ
ズ、沿海氣候ノ好良ナル爲メニ、結核病者ノ移住シ來ルユ
ト尠ナカラズト聞キ、同市内ノ通路ニ喀キステラレタル
痰痕ヲ幾回トナク統計シテ、余ノ一步毎ニハ約一個ノ喀
痰者アルヲ知り(現ニ我が東京市内ニハ斯ノ如キ通路ヲ

復シ、恰モ東
京市内兩國橋
上ノ人通りニ
等シキ所デア
ル。

發見セズ、次デー一八九一年ニハ乃チ自費ヲ投シテ、市人ノ
爲メ結核病ノ豫防方法ニ就キ、三日間ニ亙ツテ、恰モ街道
演説ノ如キ、公開演説ヲ試ミシユトモアツタガ、現ニ何レ
ノ市町等ニモ、結核病者特ニ肺結核ノ患者等ハ鮮ナカラ
ザルノデアアル、殊ニ注意スベキユトハ何レノ地方ニ在テ
モ、何處ニテモ雇ハレ行ク所ノ、下層ノ健康状態ヲ有シツ
ツアル、壯年以上ノ勞働者ニハ極メテ慢性ナル咳痰病者
ノ多キユトデアアル。

四 本來らひちす病ノ慘害ハ既述ノ如ク、人類ノ體質上ニ
於テ、其輕易性ナルモ、骨質ノ局部性ナル、畸形的、異態的等
ノ變形、若クハ變化等ヲシテ、止ダニ其一生間ニ遺留セシ
ムルノミデハナク、該病ハ實ニ主トシテ不適當ナル勞働

我が邦人ハ此
ノ一章ヲソラ
ンジ居ルノ必
要アラン。

食、若クハ有毒性ニシテ、勞働食ナル、白米ヲ常食セル、一團
ノ國人ニ對シ、其體質上ニ於テ更ニ尤大ニシテ、無限性ナ
ル、一般的ノ障害性作用ヲモ逞フセシメツツアルノデア
ルカラ、止ダニ中毒的ニ、若クハ遺傳的ニ、之レヲ反復スル
ノミデハナク、連綿トシテ、其永代間ニモ互リ得ベケレバ、
若シモ該ノ體質性ノ一般的不良性状態ヲシテ、其邦人間
ニ持久シテ繼續セシムルユトナレバ、遂ニハ該ノ有害
性作用ヲシテ、全國人ノ多大數者ニモ及ボサシメ、茲ニ其
一般的體質ヲシテ矮小ナラシメ、若クハ或ル部ノ畸形等
ニモ陷ヒラシムルニ至ルベキハ、固ヨリ當然ノ理由ガア
ルユトト思ハルルノデアアル。

既述ノ如ク、蛋白質過少ノ有毒性ナル白米ヤ、其他ノ勞働

食ヲ主トシテ、之レヲ無限的ニ常食スル國人ハ、其自然性タル體質ノ完全ナル發育ヲ障害セラルルユトアルベシトノユトニ就テハ、特ニ余ガ多年ニ亙リテ、最モ苦心ノ研究ヲ積ミタル所ナレバ、去ル一九〇六年ノ冬季ヨリ、白米ノ常食國タル東洋ノ諸地方ト、北米合衆國ノ南部等トニ至ルマデ、自ラ其現状ヲ視察スベク計畫セシニ、不幸ニシテ止ムヲ得ザル事情アツテ、今日ニ至ルモ、今猶ホ、其素志ヲ達シ得ザリシハ、余ノ甚ダ遺憾トスル所デアアルガ、其實自ラ海外ニアル白米ノ常食者ヲ視察セネバ、本問題ヲ解決シ得ザルノデハナク、問題ガ宏大ナルダケ、其眼界ヲ擴メテ、陳述ヲ鄭重ニシ、一層緻密ノ所斷ヲ試ミヨトシタノデアアル、是ニ於テ海外ニアル白米常食者ノ一般的體格

該ノ計畫ハ九
鬼男爵閣下ノ
知悉セラルル
所デアアル。

ノ大小等ニ關シ、其米穀ノ產地タル、東洋ノ各地方ト、北米國ノ南部等トニアル者ハ、日本郵船會社役員ニシテ、多年該地方ニ駐在セル辱知某君ニ、其取調ヲ依頼シ、又白米ヲ常食セザル滿洲人ニ就テハ、滿洲地方ノ視察者某氏ニ依頼シタノデアアル。

又主トシテ白米以外ノ雜穀、蔬菜、粟、甘薯、蕎麥等ヲ常食シ、之レト俱ニ獸、鳥、魚肉等ヲ適度ニ常食シツツアツタ鹿兒島人士ハ、既ニ自ラ之レヲ檢定シ、鹿兒島縣人ニ次ギ、粟、さつまいも、豚肉、魚類等ヲ常食セシ沖繩人ハ、嘗テ自宅ニ寄食セシメシ等、其少數者ヲ檢定シタルモ、尙ホ其調査ヲ辱知某氏ニ依頼シタノデアツタ。

余ハ、該ノ既述セシ調査ノ結果上ヨリ、白米常食者ノ一般

白米ヲ常食シ
ツツアル國人
ハ、其體格ガ
概シテ矮小デ
アル。

一五〇
的體格ニ關シ、茲ニ之レヲ斷按スルユトセバ、白米ノ常食者タル我が邦人ヲ首メトシ、海外ノ白米常食者ニ至ルマデ、其一般的體格ハ悲ヒカナ、矮小デアルト言ハネバナラヌ、而シテ歐米人ハ固ヨリ、白米ヲ常用セザル北部支那人ヤ、高地ニ居住シ麥コガシト、ばたとヲ常食シツツアル西藏人モ、其體格ハ偉大デアツテ、我が邦中ノ鹿兒島人士モ、沖繩人ヤ、朝鮮人等モ、其體格ノ偉大ナル者ガアルノデアル。

第二 熱帶地方人ノ不適當ニシテ、有毒性ナル白米ノ常

食料、若クハ不適當ニシテ、勞働性ナル常食料ニ因リ、生起シツツアル常用白米ノ中毒病ト、らひちすナル英吉利斯病等トニ就テ。

余ハ又嘗テ歐洲醫界ノ一般ガ、熱帶地方ニハ彼ノらひちすナル英吉利斯病ガナシトカ、或ハ稀有デアルトカ言ハレテ居ルユトニ就キ、始原論ノ原則上ヨリ、更ニ余ノ所感ヲ一言シテ置コトト思フ。

元來らひちす病ノ患者ハ、冬季ノ寒冷ナル氣候ニ遭フトキハ、既ニ本來ノ體質ガ固ヨリ、虛弱性トナリ居ルニ因リ、屢シバ感冒等ニ襲ハレ易キ病弱性ナルモ、若シ之レヲシテ熱帶地方等ノ、溫暖ナル地ニ移住セシムレバ、其氣候ガ變態的電氣性作用

ナル氣溫ノ高キ爲メ、寒冷ナル地方ニ在ルガ如ク、病弱ナラザルハ、余ガ他ニ植物ニ對スル温室ヲ引例シテ、説明シタルガ如ク、縱シ、冬季ノ寒冷ナル時ナリトスルモ、温室中ニアル變態性ノ發電體ナル生物即チ動植物ハ、恰モ夏季ノ溫熱ナル季候ニアツテ活躍シ得ル者ト、全然一致シ得ベキモノニシテ、唯ダ、其主要ナル點ハ僅カニ一變態性電氣力ナル溫熱作用ノ多寡、其モノニ關係スルユトナルノデアアル、例ヘバ、先年ノ夏季ニ暹羅ヨリ歸住セル七歳ナル男子ノ、其體質ハ元來不良ナル者ナラザリシモ、十月頃ヨリ感冒ニ次ギ、感冒シ、咳嗽ハ持久シ、加フルニ十一月以來ハ熱發シ易ク、十二月ニ至リ、強咳頻發ニ苦シミ、毎日體溫ノ高騰スルニ至レル者ヲ一診セシユトアリシガ、若シ是レ等ノ患者ナシテ溫熱地方ニ轉地セシムルユトトセ

バ、止ダニ速カニ、該ノ感冒性作用ヲ治シ得ベキノミナラズ、吾人ガ若シ寒氣ノ爲メ感冒シ、或ハ將サニ感冒セントスルニ當リ、速カニ煖爐、懷爐、湯たんぼ等ノ、變態性電氣力タル溫熱ヲ以テ、充分ニ自體ヲ溫ムルユトトセバ、或ハ感冒ヲ脱レ、若シクハ速カニ感冒ヲ治癒シ得ベキハ、何人モ醫師ヲ待タズニ、之レヲ承認シ得ルユトデアロト思フ、故ニ冬季ノ寒冷ナル、季候ノ邦國ニ於ケル英吉利斯病ノ小兒ハ、殊ニ冬季中ニアツテ、常ニ居恆病弱ナルユト多ケレバ、余ハ之レヲ言フニ忍ビザルモ、之レヲ忍ビテ、學界ノ爲ニ一言シテ置ユトト思フ。

日本ノ小兒ノ鼻たらし病ニ就テ。

去ル明治二十七八年ノ日、清役後ニ、我が邦ノ小兒ヤ、年少者ハ世界的無二ノ鼻たらし者デアルトノ説ガ起ツタノデアアル。

日清戰役後ニ、日本小兒ノ鼻たらし説起リシモ、之レニ對スル解説者ハ今日マデナカリシ。帝國學士會員ノ日本小兒ノ鼻たらしノ原因ハ如何トノ問ヒ。東京醫科大學耳鼻咽喉科專門教授ノ止ダニ日本ノ小兒ハ鼻たらし多シトノミノ講演。

東京學士會(現在ノ帝國學士會ナリ)ノ會場ニ於テ、或ル憂國ノ學者ガ歐米ノ小兒ハ固ヨリ論ナク、清國ヤ、其他ノ小兒モ日本ノ小兒ノ如ク、多大數ノ鼻たらしナキニ、獨リ我國ノ小兒ノミ、其全國ニ亙ツテ、實ニ多大數ノ鼻たらしアルハ如何トノ講演ヲ爲シタル者アリシモ、已ニ十五、六年ヲモ經過セルニ、未ダ之レニ回答シ得タルモノアリシヲ聞カズ。又明治三十九年ノ頃、東京醫科大學耳鼻咽喉科ノ專門教授ナル某博士ハ、或ル公會場ニ於テ、日本小兒ノ多大數ハ鼻たらしナリトノコトヲ、講演セラレタリトノコトヲモ聞キシガ、該ノ兩講演ハ俱ニ、其眞性ナル鼻たらし病ノ原因ニ關シテハ、全然其斷按ヲ下サザリシトノコトデアツタ。

又其治療方法ニ關シテハ、特ニ本邦小兒ノ冬季ニ於ケル多大

數ノ鼻たらし者ヲシテ、一舉的ニ絶滅、否チ一時的ニモセヨ、之レヲ治癒セシムベキガ如キ、活躍的卓越性ノ熄滅的方法ノ如キハ、毫モ茲ニ論及シタ者ハナカツタト云フノデアアル。又我が邦ニ於ケル多數ノ慈愛深キ小兒病專門ノ醫學者ヤ、病理學專門ナル學者等ノ、日本小兒ノ鼻たらしニ關スル學説ハ、如何ナル者デアアルカ、余ハ不幸ニシテ今日マデ、之レヲ見聞シ得ヌノデアツタ。

本邦ノ小兒ノ多數ハ斯ノ如ク、冬季中ニハ嘗テ外國ニ、其例類者ナキマデノ、鼻たらし者デアルトノコトハ、何人ガ之レヲ見テモ、事實ニ相違ナキモ、特リ其發生原因ト爲シ得ベキ者ハ、果シテ何等ノ者デアローカ。

本來該ノ小兒ノ鼻たらし病ハ諸外國ニモ、其例ナク、獨リ我が

日本國ノミノ特有病ナリトノユトナレバ則チ吾人ハ專ラ該ノ特有病ナリトノユトニ注意シテ、思考ヲ費シ、之レヲ追究シタナラバ、特リ我が邦ノ小兒ノミニ多キ、鼻たらし病位ノユトハ、決シテ専門學者ヲ待ツマデモナク、左マデ難解ノ研究物デハナカローカト思ハレル、若シモ吾人ガ醫科的ノ眼ヲ注ギテ、日本國中ヲ一瞥スルナレバ、我が邦人間ニハ、業ニ既ニ年年、歳歳、歳ハ改マルモ、殆ド變化セザル、多數ノ脚氣病者ヲ續生シ、以テ本邦特有性ノ疾病ト爲リ、年年定期性ニ發生シ、然カモ、其多クハ夏季中ニノミ續發スル、一種特別的ノ疾病ガアルノデアール。然ルニ此ノ脚氣ト、彼ノ我が邦ノ學界間ニ難解ナル小兒ノ鼻たらし病トハ、其發病者ノ多キ時期ガ、止グニ夏ト、冬トノ差違ガアルノミデハナク、

學界間ニ注意
セラレザリシ
數種ノ病症。

我が日本國ニハ、他ニ尙ホ登山半途ノ不能症ヤ、勞働後等ニアツテモ、必發スルガ如キ、隨所、隨時ニ生起シ來ルベキ、本邦人特有性ノ不明ナル、病症モアルノデアール。
顧フニ、是レ等ノ諸病症ハ、凡テ日本ノ醫界ニ於テハ、未ダ猶ホ知ラレザル者ノ如クニシテ、實ニ今日ノ如ク、進歩、發達シタル我が日本國ニ儼存シツツアル、一種特別性ノ不明ナル病症ナノデアール、我が邦ニハ尙ホ他ニ或ル體部ノこり、はる、たるい、若クハのぼせる等ノ未ダ曾テ本邦ノ醫界ニ注意セラレザル、我が邦ニ特異的ノ數種ナル不明性ノ病症モアルノデアツテ、是レ等ハ凡テ無慮十餘萬ノ不明ノ治療者ナル灸點、針治、按摩等ノ日夜ヲ通シテ、之レヲ治療シツツアルノデアール、殆ド國人病的ナル特性ヲ逞フシツツ儼存セル一種特別性ノ不明

性ナル病症ト爲シ得ベキモノデアルガ蓋シ是レハ余ノ本邦人ニ視タル有毒性白米ノ常食ニ因ル中毒病ナノデアアル。若シ果シテ然リトセバ吾人ハ直裁的ニ本邦小兒ニ見ル世界無二ノ鼻たらし病ト本邦人白米常用ノ中毒病殊ニ素人自稱ノ脚氣病等トハ之レヲシテ其發病ノ原因上ニアツテ美事ニ聯結セシムルヲ得タランニハ乃チ該ノ鼻たらし病モ亦タヤスク解決シ得ベキ者デアロト思フ。

故ニ余ハ曩キニ白米ノ常食者タル我が邦人間ニハ極メテ慢性經過ヲトル結核病者以外ニ於テらひちす病ナル英吉利斯病者ガ縱シ輕症ナルニモセヨ頗ル數多アリト云ツタノデアルガ我が邦多數ノ小兒ガ果シテ輕度ナリトモ其常食料ノ不適當ナル爲メニ該ノらひちす病ニ襲ハルルモノトセバ該ノ

多大數ナル小兒ハ爲メニ其體質ガ病弱性ニ陥ヒルノデアアル、而シテ概スルニ體質ノ不良ナル薄弱性ノ小兒ハ動ヤモスレバ感冒シ易スク鼻病ニモ罹リ易スク復タ結核病ニモ襲ハレ易スシトスデアアルカラ本邦ノ貧血性ニシテ體質ノ不良ナル小兒ノ多クハ冬季寒冷ノ候ヲ待タズ早ク既ニ鼻かたるニ襲ハレ以テ鼻涕ヲ漏流スルニ至リ易スケレバ即チ本邦特有ノ鼻たらし小兒ノ一部ハ極メテ慢性ナル輕症經過中ノ結核病者ヲモ含ム原因ハ茲ニ關聯スル者ガ最モ多カロト思フノデアアル是ヲ以テ吾人ハ言ハントス不適當ナル勞働食ヤ有毒性ニシテ尙ホ且ツ勞働食ナル白米ノ常用者ハらひちす病ニ罹リ易スクらひちす病兒ハ其國狀ニヨリ鼻たらし病ニ陥ヒリ易スシト然ラバ則チ吾人ハ更ニ進デ左ノ斷按ヲ下シ

得ルノデアアル。

吾人ハ止ダニ不適當ナル勞働食ヲ常用シツツアルノミデハ
 ナク、實ニ最大不幸ナル有毒性ノ白米ヲモ長ヘニ、之レヲ常食
 シツツアツタノデアアル、サレバ、其尤大ナル中毒病ニ罹ルハ當
 然デアリ、ソノウヘニらひちす病ニモ襲ハレ易スケレバ、隨テ
 本邦ノ如キ、寒冷ノ氣候ヲ有スル邦國ニアツテハ、變態性電氣
 力ナル體溫ノ減乏シツツアル者則チ虛弱性ナル小兒ノ鼻た
 らし者ヲ、介達的ニ多生シ得ベキ理由アルノミデハナク、寒冷
 ノ季節中ハ、若シ該ノ鼻たらし者ヲシテ、溫暖ナル地方ニ轉地
 セシメ、其變態性電氣力ナル、外圍ノ氣熱的作用ヲ増加セシム
 レバ、該ノ鼻たらし者即チ變態性電氣力ナル體力ノ減乏シツ
 ツアル者ノ多クハ自癒シ得ベキ者ナラント。

熱帶地方ノ脚
 氣。

吾人ハ若シモ此原則ヲ以テ、更ニ之レヲ彼ノ熱帶地方ノ、有毒
 性ナル白米常食者ニ應用セシムル事トシテ、其白米常用ノ中
 毒病、其者ノ病性、狀態ヲ推究セシニ、熱帶地方ノ土人ハ白米ノ
 常食ニヨリ、直接的ニ罹リ得ベキ中毒病即チ其脚氣等ノ如キ
 病症ハ、寒冷氣候ノ時季アル、我ガ日本ニ於ケルヨリモ、概シテ
 一層強度ノ病徵ヲ以テ生起スル(變態性ノ電氣的作用ナル)病
 機アル者ト爲シ得ルニ反シ、彼ノ米食常用ノ土人ガ、其常食料
 ノ不適當ニシテ有毒性ナルト、其體質ノ不良狀態トニ誘致セ
 ラレテ、繼發セル所ノらひちす病ハ、熱帶地方ニアツテハ、唯ダ
 ニ、其恆性トシテ、通常其輕症者ヲ現ハシ得ルバカリデハナク、
 我ガ日本國ノ如ク、寒冷氣候等、其氣象的ノ劇變性作用ガ冬季
 ニアツテ、薄弱ナルらひちす性小兒ニ對シ、其感冒性作用ヲ持

熱帶地方ノ英
 吉利斯病。

續的ニ逞フシ得ルユトハ、熱帶ニアツテハ、殆ド之レヲキモノナルベケレバ、縱シ、其常食料ハ勞働性ノ、不適當ナル有毒性白米食ヲ常用シツツアル者ナリトスルモ、其炎熱的過高度ノ、變態性ナル電熱的作用ノ氣候ハ、該ノ薄弱小兒ニ對スルモ、我が日本國ニ於ケル冬季中ノ如ク、尙ホ且ツ多數ノ鼻たらし者ヲ生起スルユトナカラン、之レニ反シ、我が日本ニアツテハ、主トシテ夏季ノミニ生起スルモノト、一般的ニ誤認セラレツツ、以テ今日ニ至リシ、彼ノ素人自稱ノ有名無實ナルベキ脚氣病等、其白米ノ常食ニ基因スル中毒性ノ病症ハ、彼ノ熱帶地方ニ於テハ、我が冬季ノ如キ寒冷氣候ノ至ラザルガ爲メニ、殆ド持續的不斷性ニモ、強烈性ノ脚氣的、否ナ中毒的ノ病者ヲ生起シ得ルノデアロト思フ。

熱帶地方ニ於ケルらひちす病ハ斯ノ如ク、其輕症者ヲ多生シテ、我が寒冷氣候ニ於ケルらひちす病ノ小兒ノ如ク、感冒的ニ病弱ナラザレバ、彼ノ爛眼ナル歐洲ノ醫學者、殆ド其全體ガ古來熱帶地方ニハ、或はらひちす病ハナシトカ、又極メテ稀レナリトカ、論斷シツツアリシ理由モ、亦茲ニ之レヲ了解シ得ルコトトナルノデアロト、例ヘバ余ハ五、六年前ニ於テ、彼ノ熱帶地方ナル暹羅國ニ生レシ、某紳士ノ男子、齡二歳ナルヲ一見シタルユトアリシガ、其頭部ハ異狀ノ大形ニシテ、齒牙ノ發生ヤ、獨歩ノ運動等ハ著シク遲レ居リ、殊ニ多汗症ニ苦ム等ニヨリ、其らひちす病者ナルユトヲ認知シ得タルユトアリシモ、僅カニ該ノ一例ニヨリ、敢テ熱帶地方ニらひちす病者アルユトヲ主張スルニハアラザルナリ。

余ハ是ニ於テらひちす病ニ就キ更ニ言ハントス熱帶地方ノ
有毒性ニシテ不適當ナル白米食ヲ常用シツツアル者ハらひ
ちす病ニ罹リ易スキモ該ノ地方ハ寒冷氣候ノ至ラザルガ爲
メ該ノ病症者ハ我ガ日本ノ冬季寒冷ノ候ニアタリ或ハ感冒
シ易スク若クハ鼻涕ノ出デ易スキ等ノ如ク病弱ナラズ概シ
テ輕症ニ止リ得ベシト

既述ノ如ク有毒性ナル白米ヲ常食シテ獸鳥魚肉大豆等ノ如
キ蛋白質性食料ヲ用ルユト過少ナル者ハ如何ニ健康無病ノ
状態ニナレツツアルモ學術上ニ於テハ其體內ニ或ル種ノ中
毒性作用ヲシテ潜在セシメザル者ハ殆ンド稀レデアロト
思ハレル例ヘバ婦女ノ妊娠中ニ持續シテ專ラ白米ヲ常食ス
ルトキハ妊婦ハ固ヨリ其胎兒モ亦該ノ中毒性有害作用ハ之

妊婦ト、其胎
兒トニ起ル常
用白米ノ中毒
病ニ就テ。

レヲ免ルルニ道ナキデアレバ即チ母子俱ニ該ノ中毒的作用
ヲ蒙ラザルハ蓋シ稀レナル事ト言ヒ得ベキデアル若シ胎兒
ハ健康無病ノ状態ニ生ルルモノアリトスルモ其生育スベキ
或ル時期ハ更ニ有毒性ナル白米ノ中毒病者タル生母若クハ
乳母等ノ乳ニヨツテ養育セラレ(此ノ場合ニ於ケル乳兒ハ始
メヨリ或ハ便秘シ若クハ下利スルモノアリトスルモ後チニ
ハ便秘症ヲ常習性ニ持久スルモノ多シ)稍ヤ發育スルニ至レ
バ即チ不適當ナル勞働食ヤ若クハ勞働食ニシテ有毒性ナル
白米食ヲ更ニ自ラ常食スル者ナルノミデハナク縱シ我ガ邦
人間ニハ古來ヨリ殆ド三食トモ消極的ナル蛋白質汁ノ味噌
汁ヲ常用シツツアリトスルモ宏大ナル佛教ノ殺生禁斷的
ル教化上ト四足ナル獸類ヤ二足ナル鳥類ハ神聖ナル神ヲモ

穢ス等ノ、迷信的ナル思潮ノ馴致上トヨリ、其一般的風習上ニハ蛋白質性ノ食料品ナル肉類等、其蛋白質性ノ常食量品ガ過少ナリシニヨリ、茲ニ白米常食ノ中毒ヤ、不適當ナル勞働食ノ有害性作用ハ直接的ニ、之レヲ自體ニ蒙ルユトナルノデア
ルガ、概スルニ、該ノ中毒性ノ状態ハ各人ノ勞働、職業、健否、蛋白質ノ兼食ノ多少等、其各自ニ不等一ナル所アル如ク、甚ダ不同ナル病症ト、状態トヲ出現スルニ至ルモノナレバ、設シ、白米ヲ常食スルトシテモ、平等一様ニ、該ノ中毒性障害作用ヲ蒙ツテ、同等ノ一様度ナル中毒症狀ノミヲ生起セザルモノ甚ダ多シトハ言ヘ、或ル程度ノ中毒症狀、若クハ其局所の症狀マデモ免レ得ル者アルハ、蓋シ稀有デアロト思フ。

余ハ此ノ基臺ヲ立脚點トシテ、研究シタナラバ、白米ノ常食若

日本人ノ胎兒ノ英吉利斯病ニ就テ。

クハ他ノ不適當ナル勞働食等ノ爲メ、已ニ異常ヲ有スベキ母體内ノ胎兒ハ、其胎生時期ニアツテ、既ニらひちす病ヲ生起スベキ理由ガアルノデアアル、嘗テ余ノ觀タル初生兒ニ、其近親者ニハ例類ナキ所ノ低鼻(特ニ我邦人間ニハ尤モ多キガ如シ)ヤ、雙下腿ノ變彎ヤ、兩手指ノ對小指及ビ雙足趾ノ對小趾ノ内彎ヤ、若クハ輕度ナル耳輪ノ變形等ニ至ル迄モ、余ハ均ク之レヲ、該ノ胎生時ニ於ケルらひちす病性ノ變化ニ歸セシメヨトスルノデアアル、是ヲ以テ我ガ邦ノ産科醫ヤ、産婆等ガ日本人ノ妊婦ニ就キ、其胎兒ノ男女ノ兩性ヲ豫診スルニアタリ、彼ノ歐洲學者ガ已ニ制定シツツアル、男性胎兒ニ聽認シ得ル一分時間ノ心臟音ノ數ガ、百四十至以下(日本ニ在テハ産婆學ノ講義マデモ、其レデアアル)デアルトノ規定ニヨルヨリモ、余ノ檢定上

余ノ東京市内ニ於ケル經驗上ニハ、九ヶ月十ヶ月ノ男性胎兒ノ心臟音ハ一分間ニ百五十至以上ヲ算スルモノ尤モ多シ、但シ獨逸國ニテハ百四十至

以下ヲ規定シ居レルモノナリ。然ルニ日本ノ產科學モ、產婆學モ、俱ニ日本人ノ男性胎兒ノ心音ハ一分間ニ百四十至以內ナリト記シテアルノデアル。

我が邦ノ妊婦及ビ其産後若クハ嬰兒時期等ニ於ケル常食料ニ就テ。

ニ在テハ、却テ妊婦體ノ營養狀態ガ通常トシテ、其不良ニ陥リ、貧血若クハやせる等ノユト多シトノ事實上ヨリ豫診シテ、之レヲ的中シ得ル場合ノミデアリシユトテ、經驗シ居ルノデアルガ、是レハ敢テ各専門家ノ檢定ヲ望ムノデアアル。本邦人ノ胎兒ニシテ、既ニ斯ノ如キモノアリトセバ、殊ニ薄弱ナル初生兒ヤ、嬰兒時期ノ常食料ニ就テハ、直接的ノ關係ヲ有スル我が國ノ產科醫ヤ、産婆ヤ、小兒科専門醫等ハ、之レニ對シテ周到ノ注意ヲ拂ヒ、各ノ専門的ノ任務ヲ以テ、其責任ヲ盡サネバナラヌユトハ言フマデモナシ。余ハ該ノ諸科ニ於テハ専門以外ニアアルモ、若シ注意スベキ時機アルトキ、或ハ妊婦ニ對シ、少クモ、其全妊娠期中ト、授乳時期ト、若クハ離乳後ノ嬰兒ニ對シ、其常用ノ食料中、儼ニ白米ノ常食ヲ禁止スベキユトハ最

我が邦ノ醫界ニハ乳兒ノ便秘ニ對シ、毎日ニモ灌腸ヲ續行シツツアル者アルガ、其無責任ナルコト亦甚ダシト謂フベシ。

大必要ナリト、切言シタユトハ、數シバアツタノデアアル。又本邦乳兒ノ常食料ニ關シテハ、先年中、人乳、牛乳、煉乳等ニ就キ、一時ハ火花ヲ散シテ、大ニ論難セシ時代モアリ、或ハ遂ニ其所期ヲ持續的ニ實行シタ者モアツタヨ一デアツタ、故ニ或ル場合ニ於テハ初生兒ノ養育方法ニ就テ、特ニ煉乳ノミヲ持續的ニ常用スベシト爲シ、或ル資力ニ豊カナル家庭ニ於テモ、之レヲ初生兒以降ノ長キ間ニ亙リ、持久シテ常用セシムベク、規定シタル者モアツタト言フノデアアルガ、斯ノ如キハ威權的ノ滑稽動作ヲ演ジタルモノト謂フベキデアアル、何トナレバ、初生兒ノ煉乳常用者ハ多ク便秘ノ爲メ、毎日ニモ灌腸ヲ續行スル等ノユトヲ持久シツツアツテ、概スルニ、既ニ已ニ病患ニ陥キラシメタル者ト爲シ得ベキノミデハナク、次デ生牛乳ヲモ併

用スル者トスルモ、其生齒期ノ頃ニ於テ、或ル不明ノ病症ニ死亡スル者往往アリトノ事ヲモ聞クノデアツタ、縦シ、又生牛乳ノミヲ常用セシムル者トスルモ、其乳兒ニ適當セザルコトノ多キハ、近世已ニ歐洲學者ノ説述シ居ル所ノ如クデアアル、而シテ尙ホ一層ノ注意ヲ要スベキモノハ、乳兒ノ離乳時以後ニ於ケル常食料デアアル、若シ離乳期前後ノ頃ヨリ、幼兒ヲシテ白米食ヲ常用セシムレバ、殊ニ都會ニ多ク見ル所ノ如ク、可憐ナル幼兒ハ蛋白質ノ過少ニシテ、有毒性ナル白米常食ノ中毒的病症ト、らひちす病ノ作用トニヨリ、茲ニ常習性便秘ヲ生起シ、其持久スルモノハ未ダ一歳ナラザルニ、既ニ已ニ數日間ニモ互ルベキ、常習性ノ便秘者トモナリ得ベケレバ、爲メニ排便時ニ出血スルモノサイモ、數シバ之レアルノミデハナク、實ニ年纔

日本ノ乳兒ノ常習便秘。

日本ノ幼兒ノ痔出血。

日本ノ幼兒ノ外痔核。

カニ三、四歳ニ至レバ、已ニ白米常食ノ中毒症ナル頑固性便秘ヲ持續シツツアツテ、或ハ爲メニ東洋人ノ名物ナル外痔核サイモ、之レヲ生起スル者アルハ、嘗テ余ガ往往實驗シタル所ノ如クデアツテ、彼ノ歐洲ニ於ケル、其不自然性ナル人工的育兒方法ノ弊害上ヨリ、最近ノ發見ニ係ル、有名ナル石鹼便秘症ト同様ニ、此ノ可憐ナル幼兒ニシテ、既ニ已ニ外痔核ヲ患フルニ至ル者ガアルノデアアルカラ、余ガ嘗テ本邦ノ婦女一千三百名中ニ就テ、外痔核ノ有無ヲ檢定セシニ、其百名ニ對スル七十名ノ多キニ達スル、驚クベキ多大數ノ外痔核患者アルコトヲ發見シ得タル所以デアアル。

三十歳以下ナル日本ノ婦女ニハ百名中ニ七十名ノ外痔核患者アリ。

第三 不適當ニシテ有毒性ナル常食料ト、不適當ニシテ
勞働性ナル常食料トノ、有害性作用ニ關スル概況
ノ結論。

余ハ専門以外ナルモ、嘗テ是レ等ノ既述ニ關スル一切ノ事ヲ以テ、一ノ恨事トナシタノデアツタ、故ニ茲ニ其概要ヲ結論スルユトトセバ、則チ常用白米ノ有害作用ヲ以テ、單ニ有名無實ナルベキ、素人自稱ノ脚氣病ノミヲ生起スルモノト爲スガ如キ、現下ノ世界的ナル學界間ニ在テ、其思潮ノ如何ニモ淺薄ナル論說ヲ見聞スルハ、余ノ嘗テ甚ダ遺憾トセシ所デアツタノデアアル。兎モ角モ體質ノ尙ホ薄弱ナル幼兒時期ニ於テ、其常食料ガ已ニ有毒性ニシテ、且ツ不適當ナルトキハ、隨テ彼ノらひちすナル英吉利斯病ヲ生起シ、易キ理由アレバ、我が邦ニ於テ、

其實例ノ殊ニ多キヲ見ルガ如クデアアル、是ヲ以テ我が邦ニ在テハ止ダニ都會ノ小兒ノミナラズ、町村、海邊、山間等ノ居住者ニ至ルマデモ、其貧者ト富者トヲ問ハズ、特ニ蛋白質ノ過少ナル勞働性ノ常食料ニ加フルニ、吾人が尤モ恐ルル所ノ、有毒性ナル白米ヲモ、長ヘニ之レヲ常食シツアツタノデアアルカラ、該ノ不適當ナル常食料ノ有害性作用ハ止ダニ嬰兒ヤ、小兒期等ニ於テノミ、其有害性作用ヲ逞フシ得ルバカリデハナク、既ニ已ニ母體ナル妊婦ノ常食料ガ不適當ニシテ、尙ホ且ツ有毒性ナル白米ヲモ、長ヘニ之レヲ常用シツアツタモノノ多ケレバ、其胎兒ノらひちすナル英吉利斯病ト、慘澹ナル白米ノ中毒病トニ罹リ、易キユトハ言フ迄モナシ、矧ンヤ、我が邦人ノ多、大數ハ該ノ常食料ノ不適當ナルト、有毒性ナルトニヨリ、既ニ